



IEHE TOHOKU Report 73
Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

第26回東北大学高等教育フォーラム
新時代の大学教育を考える [14] 報告書

個別大学の入試改革

—東北大学の入試設計を事例として—

平成29（2017）年9月

東北大学高度教養教育・学生支援機構

第 26 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [14]）

—— 個別大学の入試改革
東北大学の入試設計を事例として ——

- ◇ 日 時 : 平成 29 年 5 月 12 日（金）13:00～17:00
◇ 会 場 : 東北大学百周年記念会館 川内萩ホール
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 40
◇ 主 催 : 東北大学高度教養教育・学生支援機構

プログラム

- 司 会 東北大学高度教養教育・学生支援機構 特任教授 石上 正敏
- 開会の辞 東北大学 総長 里見 進
- 基調講演 「新共通テストの下における東北大学学部入試の展望」
東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授 倉元 直樹 氏
- 現状報告 1 「京都から見える東北大学 A0 入試」
京都大学大学院法学研究科 教授 木南 敦 氏
(休憩)
- 現状報告 2 「新しい入試制度に向けた高校の取組」
秋田県立湯沢高等学校 校長 阿部 淳 氏
- 現状報告 3 「多様化する大学入試と高校現場
——主に国語教師の立場から——」
福岡大学附属大濠中学校・高等学校 副校長 清水 和弘 氏
- 現状報告 4 「センター試験・新テスト・高大接続」
大学入試センター 試験・研究副統括官 山地 弘起 氏
(休憩)
- 討 議 ーパネルディスカッションー
司 会 東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授 宮本 友弘
東北大学高度教養教育・学生支援機構 講師 田中 光晴
- 閉会の辞 東北大学 理事 花輪 公雄

第 26 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [14]）

個別大学の入試改革

—— 東北大学の入試設計を事例として ——

目 次

第 26 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨	1
開会の辞	3
第Ⅰ部 基調講演	
基調講演者紹介	5
基調講演 : 「新共通テストの下における東北大学学部入試の展望」 東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授 倉元 直樹 氏	7
資料	17
第Ⅱ部 現状報告	
現状報告者紹介	25
現状報告 1 : 「京都から見える東北大学 A0 入試」 京都大学大学院法学研究科 教授 木南 敦 氏	29
資料	34
現状報告 2 : 「新しい入試制度に向けた高校の取組」 秋田県立湯沢高等学校 校長 阿部 淳 氏	36
資料	40
現状報告 3 : 「多様化する大学入試と高校現場―主に国語教師の立場から―」 福岡大学附属大濠中学校・高等学校 副校長 清水 和弘 氏	45
資料	50

現状報告 4	： 「センター試験・新テスト・高大接続」			
	大学入試センター 試験・研究副統括官	山地 弘起 氏		52
資料				57
第Ⅲ部	討 議	ーパネルディスカッションー		59
閉会の辞				75
講 評				
講評 1	： 第 26 回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して			
	青森県立青森東高等学校	宮本 直	教諭	77
講評 2	： 第 26 回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して			
	宮城県宮城第一高等学校	三文字 和史	教諭	80
講評 3	： 第 26 回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して			
	岩手県立黒沢尻北高等学校	及川 恵生	教諭	84
講評 4	： 第 26 回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して			
	秋田県立秋田高等学校	遠藤 金吾	教諭	88
講評 5	： 第 26 回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して			
	山形県立米沢興譲館高等学校	廣瀬 辰平	教諭	92
講評 6	： 第 26 回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して			
	福島県立安積高等学校	菅野 多美子	教諭	96
アンケート・参加者統計				
アンケート集計結果				101
アンケート自由記述				102
参加者統計				119

第 26 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨



昨年、第 24 回東北大学高等教育フォーラムの案内に「大学入試センター試験に代わる新テストが迷走している」と書いた。現在知られている工程表によれば、大学入試センター試験に代わる大学入学希望者学力評価テスト（仮称）（以下「学力評価テスト」）を基軸とした新制度が平成 29 年度初頭には「実施方針」が策定・公表され、平成 32 年度に始動するという。初回の学力評価テストは平成 33 年度入学者選抜に利用されるため、平成 29 年度の中学校 3 年在籍生徒が最初の学年となる。高等学校は今夏には受験生と保護者に進路指導の方針を説明し始めることになる。平成 33 年度大学入学者選抜に関する情報が必要だが、個別大学が確かなことを発信できる状況にはない。

平成 12 年度の AO 入試導入以来、東北大学は「学力重視の AO 入試」を掲げ、独自の入試改革を行ってきた。平成 28 年度入試からは

当時約 18% の募集人員比率を 3 割まで広げる「AO 入試 3 割拡大方針」を打ち出し、個別大学の入試改革を先導してきた。学力評価テストに記述式問題が導入された場合、東北大学の入試はどう変わるのか。例えば、こういった問いに対して、あらゆる状況を想定しながら解を探っていかなければならない。それは、全ての大学に共通に求められている課題でもある。

基調講演は、東北大学の入試設計の実務を担う東北大学入試センターから、倉元直樹東北大学高度教養教育・学生支援機構教授が担当する。学力評価テストへの記述式問題導入を中心とした共通テスト構想に関する現時点での議論を前提として、東北大学の今後の入試設計方針について概説する。さらに、高等学校や大学等、様々な立場から、4 件の現状報告を予定している。以上の講演と報告を受け、フロアからの意見を交えて討論を行い、

そこから新制度の下で、個別大学に突き付けられた課題と今後の展望を描くことを試みる。

高等学校および大学の先生方、関係する方々の多くの参加と忌憚なき活発な議論を期待している。

本報告書は、フォーラムの録音記録に修正を加えた原稿、「招待参加者」としてフォーラムに参加し、フロアの立場からフォーラムに対してお寄せいただいた講評、およびアンケート・参加者統計から成る。招待参加者は、東北地方6県の高等学校進路指導研究会進学指導部会等を通じ、各県1名ずつ選ばれた方々である。

本報告書は、録音テープから起こした原稿に対し、フロアからの発言を除き、発言者が校正を加え、最終的に編集責任者が表現・体裁の統一・修正を加えたものである。招待参加者の原稿の編集についても、体裁統一と誤字脱字の修正のみにとどめ、極力臨場感のある会場の雰囲気やそこに参加された方々が感じられたこと重視することにした。

尚、編集過程で生じた不具合に関しては、全て編集者の責任である。

本フォーラムの開催・運営にあたっては大変多くの方にご協力をいただいた。心より御礼を申し上げたい。

（編集担当：

東北大学高度教養教育・学生支援機構
高等教育開発部門入試開発室
教授 石井光夫・教授 倉元直樹・
准教授 宮本 友弘・講師 田中光晴）

開 会 の 辞

東北大学総長

里見 進

石上正敏特任教授(司会)：

みなさん、こんにちは。本日はお忙しい中、北は北海道、南は沖縄から多数のみなさまにご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。それでは予定の時刻となりましたので、第 26 回東北大学高等教育フォーラム「個別大学の入試改革－東北大学の入試設計を事例として－」を開始いたします。本日の進行を担当いたします、東北大学入試センターの石上正敏と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

開会にあたりまして、主催者を代表し、東北大学総長 里見進よりご挨拶を申し上げます。

里見進総長

ご紹介いただきました、東北大学の総長の里見です。本日はお忙しい中、第 26 回の高等教育フォーラムにお越しいただきまして、誠にありがとうございます。主催者を代表いたしまして、開会にあたりまして一言ご挨拶を申し上げます。この東北大学高等教育フォーラムは、今年で第 26 回を向かえますけれども、本企画は年に 2 回、春と秋に開催しております。秋は IDE 大学協会の東北支部との共催で、大学教育全般に関するその時々テーマを中心にしてまいりました。春は高大接続というものにテーマを絞って開催しております。昨年の春に開催いたしました第 24 回の高等教育フォーラムでは、大学入試における共通試験の役割というテーマで、現在文部科学省が進めております大学入試改革における課題の一つであります、大学の入試センターの試験に代わります新しい共通テストというものを取り上げまして、その構想に至るまでの経緯や、具体的な個別の問題につきまして、詰めるべき課題を議論していただきま



して、大変に盛り上がりました。本当にその回に参加された皆様には御礼を申し上げたいと思います。この度のフォーラムでは、この入試改革におけるもう一つの課題であります、個別大学の入試改革を取り上げまして、「個別大学の入試改革－東北大学の入試設計を事例として－」というテーマでご議論をいただくことにいたしました。現在知られております工程表によりますと、新しい共通テストを基軸とした新制度は、今年度初頭に実施方針が策定・公表されて、平成 32 年度に始動すると言われております。ですから、新共通テストは平成 33 年度の入学選抜に利用されるために、平成 29 年度の中学校 3 年生の在籍生徒が最初の学年になりますので、高等学校では、今年の夏には受験生と保護者に対して進路指導の方針を説明し始めることとなります。そういうことでは、平成 33 年度の大学入学選抜に関する情報が、今まさに必要なんでありますけれども、残念ながら、未だに個別大学が具体的なことを詳細に発表できるような状況にはないのが現実でございます。

本学の状況を申しますと、平成 12 年度に AO 入試を導入して以来、昨今報道でもよく触られておりますけれども、学力を重視した AO 入試を掲げまして、独自の入試改革を行ってまいりました。平成 28 年度の入試から

はAO入試が約18%の募集人員比率を約3割まで広げようということで、AO入試3割の拡大方針を打ち出しまして、個別大学の入試改革を本学としては日本で先導しているというふうに考えております。現在の高大接続の流れの中で、これまで進めてきました本学の入試改革をどのように改めて位置付けていけばいいのか、あらゆる状況を想定しながらその解を探っていかなければならないというように考えております。そしてそれは全ての大学に共通して求められている課題でもあるというように考えます。

本日は本学の入試センターの倉元教授から、東北大学の入試設計方針を説明させていただいたあとに、各方面でご活躍の先生方にテーマに関連した報告をいただきます。これらを手掛かりといたしまして、新制度のもとで個別大学に突きつけられた課題と、今度の展望を議論できればというように期待しております。

最後になりましたけれども、今回この東北大学の100周年を記念して作られましたこの施設に、例年を上回ります400名にもおよぶ高校や大学の先生方をお迎えできましたことを、大変心より嬉しく思っております。今日は長時間になりますけれども、活発な議論を通して、実りある会合となることを願い開会の挨拶にかえさせていただきます。本日は本当に多くの皆様方にお集まりいただきまして誠にありがとうございました。

(拍手)

石上正敏特任教授(司会)：

それでは私から大きく2点お知らせを申し上げます。一点目は本日の会の流れについてでございます。本日は三部構成になっておりまして、第一部が基調講演ということで、東北大学の入試センター 倉元直樹教授から40分間程のお話をいただきます。その後第二

部に入りまして、現状報告1から4として、大学、高校および大学入試センターから四人の先生方に、それぞれ20分程度お話をいただくこととしております。次に第三部では、5人の先生方に再びご登壇いただき、基調講演、現状報告を踏まえてご討議いただきます。終了は17時頃を予定しております。なお、間に2回休憩を挟む予定でございます。1回目は第二部の現状報告お一人目の後、10分程度。2回目は第二部終了後、20分程度。合わせて2回の休憩を予定しております。なお、基調講演、現状報告でお話いただきます先生方の詳しいプロフィールにつきましては、配布資料に同封しておりますのでご覧ください。

次に、お知らせの二点目でございます。本日の配布資料には、質問票とアンケート用紙が同封されております。質問票には基調講演、現状報告に対する質問や意見をお書き下さい。第二部終了後の20分程度の休憩の際にスタッフが会場を回りますので、お渡し下さいますようお願いいたします。それは第三部の討議に反映をさせていただきます。また、アンケート用紙につきましては、はじめに受付のところに回収箱を設置しておりますので、お帰りの際にご提出いただければ幸いです。なお、今年も本フォーラムの内容等を記載した報告書を、後程ご出席の皆様にお送りすることとしています。本日は皆様のご協力をいただき、有意義なものになりますようよろしくお願いを申し上げます。



第 I 部 基調講演

基調講演者紹介

基調講演者

倉元 直樹（くらもと なおき）氏

1961 年北海道生まれ

〔教員歴〕

大学入試センター研究開発部 助手	(1990 年 12 月 ～ 1999 年 3 月)
東北大学アドミッションセンター 助教授	(1999 年 4 月 ～ 2004 年 3 月)
東北大学高等教育開発推進センター 准教授	(2004 年 4 月 ～ 2014 年 3 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授	(2014 年 4 月 ～ 2015 年 9 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授	(2015 年 10 月 ～ 現在に至る)

〔主な研究歴〕

専門は教育心理学（教育測定論，大学入試）

〔主な著書，研究業績〕

倉元直樹 (2017). 大学入試制度改革の論理——大学入試センター試験はなぜ廃止の危機に至ったのか——，東北大学高度教養教育・学生支援機構編，「大学入試における共通試験の役割」，高等教育ライブラリ 12，東北大学出版会，47-82.

Kuramoto, N. & Koizumi, R. (2016). Current issues in large-scale educational assessment in Japan: focus on national assessment of academic ability and university entrance examinations. *Assessment in Education: Principles, Policy & Practice*, in press.

倉元直樹 (2014). 大学入試制度の変更は何をもたらしたのか？——昭和 62 年度改革の事例——，大学入試研究ジャーナル，No.24，81-89.

倉元直樹 (2011). 教育政策と学力測定の技術，日本児童研究所編 児童心理学の進歩，50，2011 年版，金子書房，199-230.

倉元直樹・大津起夫 (2011). 追跡調査に基づく東北大学 AO 入試の評価，大学入試研究ジャーナル，No.21，39-48.

日本テスト学会編 (2007). テスト・スタンダード——日本のテストの将来に向けて——，金子書房（共同執筆）

〔学会活動等〕

日本テスト学会，日本教育心理学会等

日本テスト学会理事（2005 年より）

〔その他の特記事項〕

全国大学入学選抜研究連絡協議会企画委員会委員（2010 年 5 月より [継続中]）

日本行動計量学会 林知己夫賞（優秀賞）受賞（第 27 号）（2007 年）

日本教育心理学会 城戸奨励賞受賞（第 37 号）（1995 年）

基調講演：新共通テストの下における東北大学学部入試の展望

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授

倉元 直樹 氏

〔講師紹介〕

石上正敏特任教授(司会)：

それでは早速第一部の基調講演に入ります。
「新共通テストの下における東北大学学部入試の展望」と題しまして、東北大学高度教養教育・学生支援機構教授の倉元直樹先生よりお願いいたします。

(拍手)

倉元直樹教授：

ただいまご紹介に預かりました、倉元でございます。本日、これだけ多くの方にご出席いただきまして、講演する立場の者としても嬉しく思っております。と申しますのも、今日は近隣の高校ですとか、東北一円の高校で様々な行事があるということで、最も都合の悪い日だと伺ってありましたので、一体どのくらいの方が来て下さるのかとちょっと内心心配しておりました。やや窮屈なくらいに入っていただきました。非常に嬉しく感じております。与えられた時間が40分と非常に短いので、早速話に入らせていただこうと思います。お手元にありますレジュメに沿って話をさせていただきます。あと、本日、東北大学出版会の方で本の販売に来られているかと思いますが、私どものフォーラムに関連して今まで6冊の本を出版しております。本来ですと丁寧にお話をしないといけないことが多いのですが、かなりの部分がもうすでにお話をさせていただいて、本の中に書かれていることでございますので、そちらもある程度参照しながらお話をさせていただこうと思います。あとは高校生に配っている東北大学のAO入試パンフレットでございます。こちらの



方を順次参照しながらお話を進めさせていただこうと思います。よろしくおねがいいたします。

さて、先程、総長からも今回で26回目になるというこのフォーラムのご紹介がありましたが、2年前の第22回東北大学高等教育フォーラムの閉会の辞において、本日も閉会のご挨拶を申し上げることになっております花輪理事の方から、非常に大きな宿題をいただきました。それは当時から見て、5年後の入試がどうなるのか、本来、私ども大学には説明する義務があるだろう、とのことでした。正直、痛い所を突かれたなという感じでした。というのは、当時5年後の見通しというのはなかなか立たない状況にありました。ただ、理事が申し上げたことはまさしくその通り、否定することのできないものである、とも感じました。どこかで義務を果たさなければいけないということでずっと考えておりましたが、あれから2年経過しました。それがこの義務を果たす時というのは本日であろうと考えて、講演を準備したという次第です。

結論から申します。東北大学では、現在まで積み上げてきた入試改革、それとその方針を今後も継続することになるんだというのが現時点での暫定的な回答です。

本日の話の構成はこのようになっております。

順次お話をさせていただこうと思います。まず、現時点でもなかなかちょっとはつきり細かいことを申し上げにくいのは、現在の高大接続改革、最終的にこうなるという話が、今の時点でも必ずしも分からない状況なのです。ちょっと古くなりましたが、おそらく公的な資料として参照するのに一番ふさわしいものが、昨年の8月末に出ました「高大接続改革の進捗状況について」という、文科省のプレスリリースだったかと思いますが、そこで・・・現在も「仮称」ですので、「大学入学希望者学力評価テスト」という名称が最終的にどうなるのか分からないので、新共通テストと呼ばせていただくことにしますが・・・検討状況が発表されました。大きく6点あります。記述式問題の共通試験への導入、英語の多技能を評価する問題をどうするのか、マークシート方式の問題の改善、結果の表示の仕方、複数回実施・CBTの導入、それから、プレテストに関してというようなことが書かれておりました。それぞれ重要な観点だと思いますけれども、そのうち一番目と二番目というのが実質的に大学入試をどうしていくのか、個別大学に関わる大きな部分ではないかと思います。現時点（2017年5月12日現在）で実施方針というのが未発表ですので、以下、一部推測ということになってしまうかもしれませんが、この「記述式問題の導入」ということについての制度設計案が3案示されておりました。「案1」が1月に実施をし、大学入試センターが採点をする方式。「案2」が12月に実施をして大学入試センターが採点をする方式。「案3」が1月に実施をして大学入試センターがデータ処理をして大学が採点をする方式です。この3つの案が提示されていたのですが、案2に関しましては実施時期が早まることになります。これでは高校教育を阻害するという問題があり、高等学校が非常に強く反対をしました。「案3」に関しては、やはり個別大学の立場からは不可能ということで、実施方針が発表されるとすれば「案1」に近いものになるはずで、今日はそれを前提

にお話をさせていただくということにいたします。

2番目の英語の問題ですね。これは将来的には資格・検定試験の活用にするということで、当面センター試験と資格・検定試験でカバーをするというようなお話が書かれておりましたが、本日は講演時間の問題と現時点でコメントする材料が不足しているということで、本講演では、こちらの方には触れない方針でいこうと思います。

東北大学の入試設計

このような状況ではございますが、そもそも東北大学の入試設計というのはどうなっているのか、ということですね。ここを本当は丁寧にお話したいところなのですが、時間が限られておりますので、ざっくり概要をお話します。

東北大学では一般入試とAO入試、この二本柱で個別試験を組み立てています。かつては推薦入試も実施していたのですが、現在は廃止をされて、この二つが大きな柱です。その中で一般入試はオーソドックスに前期日程試験と後期日程試験を実施しております。現在多くの国立大学ではそうだと思いますが、前期日程では全学部で実施をしていて、ここに最大の募集人員を割いております。後期日程は、現在、実は経済学部、理学部の2学部のみで実施をしているということで、比較的少数の区分ということになっています。

もう一つのAO入試というのが、東北大学の入試設計の非常に大きな特徴です。この東北大学のAO入試は「学力重視」であり、しかも「第一志望の受験生」のための特別な機会、そういう位置づけでずっと改革を進めてきた経緯がございます。こちらは、すみませんが、今年選抜要項の発表前ということで、本来秘密にする必要があるものではないのですが、資料から省かせていただきました。

ざっくりとこんな仕組みということを説明いたします。私どものAO入試Ⅱ期、・・・かつ

てⅠ期というのがあったのですが、今は廃止になっております・・・Ⅱ期とⅢ期という呼び方をしておりますが、この分け方がなんであるかという、センター試験を「使う」か「使わない」かですね。センター試験を使わないものに関しては、選抜の時期がセンター試験前の11月、センター試験を利用するAO入試Ⅲ期というのが、2月に実施をすることになっております。どの区分でAO入試を実施をするかという点は学部によって任されておりまして、Ⅱ期を実施する学部、Ⅲ期を実施する学部、そして両方実施する学部というような形で分かれております。Ⅱ期に関しては「現役生限定」です。Ⅲ期は平成30年度から整備ができてまして、「一浪まで受験可」という学部と「浪人も無制限に受験可」という学部に分かれています。入試説明会ではないので細かいことは省略いたしますが、太字になっているところが、平成30年度に向けて何らかの改革を行ったところです。赤の文字は募集人員が変わっているところです。こういうような形で不断に見直しをして、改革が進んでいる状況です。

大きく分けてⅡ期とⅢ期があるということをお伝えしましたが、受験生の皆さんにどういふふうにお伝えしているかということです。こちらのパンフレットですが、AO入試の方針が現在のようになりましてから、毎年作っているものです。出来が良いかどうかは分かりませんが、中をぱっと開いていただきますと、学生のコメントが大きくあって、その右側に東北大学AO入試の「5つの特徴」が書かれています。後でゆっくりご覧いただくとして、一つだけ、「入試は思いを伝える場」です。一般入試だけですと、ペーパーテストの答案しか、受験生と我々大学が邂逅する場がないわけですが、AO入試の場合は他に「面接」、「志願理由書」という自分の思いを伝える場がありますよ、ということですね。

それから、この辺が特に大きな特徴だと思いますが、AO入試は学力重視です。したがって、

結果的に今、AO入試の方が実は選抜としてはやや難しくなっています。AO入試だけに絞って準備をするのはリスクがありますので、多くの東北大学の第一志望の受験生は、一般入試まで視野に含めて受験をしていただいています。AO入試対策というのは計画的な勉強が一番ですよ、他に何もする必要もないですよ、というような話を書いてあります。

そして、東北大学が第一志望になる機会として、色んなことをやっています。その一つがオープンキャンパスです。是非、こちらにお越しいただきたいと、そんなようなことが書かれております。これが受験生に向けた東北大学の入試の方針になるかと思います。

これが今の入試改革の中でどういう位置づけになっているか、整理をします。今の入試改革の最初の議論が本格的に行われたのは、教育再生実行会議という首相官邸に置かれた首相の私的諮問機関で議論されたことがきっかけです。平成25年10月31日に出された提言が、その後の中教審に極めて大きな影響を持ったということがあります。したがって、今の高大接続改革の原点はここにあると考えてよいかと思うのですが、その中で、・・・これは報道ベースですが・・・、東北大学のAO入試が、この入試改革の一つの典型とみなされました。すなわち、本来、私どものやってきたことが、今行われている改革の結果として目指すところであろうというわけでございます。中でもAO入試が一つの鍵になるということで、平成28年度入試から、当時18%だったAO入試の募集人員を3割まで拡大するという東北大学の入試改革の方針が示されました。これが現在でも続いており、今後もそれを変更するという指示は受けておりません、このことを最初に申し上げたいと思います。

大学入試の「多様化」

東北大学の改革は、大学入試政策、ずっと続いてきた政策の中の一つの具体的な表れと位置

付けられると考えています。それを一つのキーワードで表すと「大学入試の多様化」という政策です。

この「多様化」という言葉、なかなか難しいというか、曖昧な部分がありまして、実質的には三つの意味内容があるだろうと分析しています。一つは「選抜資料の多様化、評価尺度の多元化」。これは、いわゆる学力試験のみで入学者を決めるのはいかなものか、という伝統的な大学入試批判と言いますか、考え方です。色々な方法を取り入れなさい、創意工夫をしなさいということです。二つ目が「学生集団の多様化」ですね。多くの大学では一般入試と求める学生を差別化するという形でAO入試を使っています。東北大学もそのところは、他大学さんとは違った意味で学生集団の多様化ということは考えていますけれども、その中に「学力水準の多様化」は入っていません。つまり、AO入試では一般入試程の学力がなくても受け入れますよ、という話にはしていないのです。三つ目の多様化が「受験機会の複数化」という、国立大学特有の文脈だと思います。戦後、新制大学が発足してから、伝統的に国立大学入学する機会は2回あったわけですね。当時は「Ⅰ期校」、「Ⅱ期校」という分け方だったのですが、これが共通1次になったときに機会が一本化されました。Ⅰ期校・Ⅱ期校制には問題があって共通1次が入ってきたわけですが、受験機会が一回に限られたということが、共通1次が10年、11回しかもたなかったことの原因の一つになっていると思います。昭和62年度に今のセンター試験に繋がるような改革がなされたわけですが、無理やり国立大学の受験機会を2回にして、その悪影響が非常に大きかったわけですね。それが「東北大学型AO入試」、「第一志望重視のAO入試」が始まるきっかけになりました。それは『高大接続にどう向き合うか』という本に書かせていただいたことです。簡単に言いますと、この時の改革では二つの国立大学に合格することが許され、その後に大学を選べることができたわ

けです。そのため、逆に、一つの大学も受けられない。第1次選抜で志願していたところを両方不合格になってしまう例が出た。東北大学の場合には、東北大学を志望していない合格者が増えて、とてつもない比率で辞退者が出たということがありました。ですから、そういう形ではない、本当に東北大学で学びたい学生を受け入れるような制度を作ろうとなり、AO入試の基になる推薦入学が始まったという経緯がございます。

この「入試の多様化」の一環としてのAO入試の元々の考え方は各大学による「自由設計入試」です。当時、アドミッション・ポリシーという言葉はなかったですが、それぞれの大学が「求める学生像」に従って、自分たちにふさわしい入学者を選抜するような仕組みを作りなさい、というわけです。この辺に関しては『高大接続のパラダイム転換と再構築』という本に書かせていただきましたが、「入試の多様化」の概念を東北大学に当てはめて考えると、一つは「選抜資料の多様化、評価尺度の多元化」という点を推進していく方向です。「学生集団の多様化」という意味で言えば、・・・なかなか正確に話すのは難しいところなのですが・・・元々東北大学は他の旧帝大よりも学生の出身母体が多様でしたので、その中でむしろ地元、つまり東北大学を第一志望とする受験生が多い東北地域から、結果的には多くの志願者があることが特色で、AO入試がそういう作用を及ぼしたということはありません。「受験機会の複数化」ということに関しては、平成15年に出了た国立大学協会の通達によって、実質的に国立大学協会から公認されました。

大学入試の設計のポイント

こういう形で基本設計がなされているわけですが、これがうまくいくためには、それなりのポイントがあります。内部の研修会などでは何度か話をさせていただいていたのですが、こういう場でお話するのは初めてです。個別大学

から見たときに「大学入試の設計のポイント」というものがあるのではないかと考えます。

一つ、まず大前提として、「大学入試の目標」は求める学生の確保です。それ以上でもそれ以下でもないです。それを達成するために何が必要か、という構成になってきます。

次に出てくるのが「相互関係の原則」。入試を募集する側、選抜する側と志願者の相互関係で成立する。だから、いかに理想的な制度と思うものを大学側が出しても、それを受ける側でそのように受け取られなければ意味がありません。ここがすごく大事になります。

また、入試というのはその年一回で終わるわけではないです。「継続性の原則」、来年もそのまた次も続くということを考えると、選抜結果がどうフィードバックされるか、それが翌年以降どういうふうにも募集に影響するかということが大事になってくる。また、選抜のコストや手間暇というものは、その時1回だけで終わるものではないですから、継続的に出来る範囲に収めておくということが条件になるかと思います。

そこから選抜の諸原則。継続性、相互関係といったことを考えると、選抜は公平でなければいけない、ということになります。公平とはなにか。それは不合格者が結果に納得できることです。大学入試によってもたらされる情報は様々ありますが、最終的には誰が合格して誰が不合格になったか、が重要です。合格した人から文句が出ることはあまりありませんが、不合格になった受験生が、結果的に残念ではあるけれども、その結果を受けるといえることができるようなものになっているか。それは「努力が報われる」という仕組みになってくるのかなと思います。そうしますと、結果的に誰が合格して誰が不合格になるか分からないので、皆同じ条件で選抜を行うということが必要になります。

今まで選抜ということに関して話をしましたが、「選抜」が必ず大事なのかと言われると、実はそうでもない。

まず「理想状態」です。これはアドミッショ

ン・ポリシーに合致した志願者が募集人員と全く同数志願する状態。ありえない話をしていますが、そうであれば入試ってやる必要がないんですね。全員「合格」でいい。

次、「選抜に過度な負担がかからない状態」。アドミッション・ポリシーに合致した志願者のみが募集人員を越えて志願している状態。これもなかなか難しいです。アメリカのトップ大学の話がよく持ち込まれるんですけども、アメリカのトップ大学はこの状態になっているのでしょう。日本でこの状態が実現されているということはまずないだろうと思います。

選抜をしっかりと考えなきゃいけないのは、志願者の中にアドミッション・ポリシーに合致した受験生と合致しない受験生が混在している状態。その中で一番自分たちのアドミッション・ポリシーに合致した受験生に「合格」という判定を出すということが、入試の手続きの一番大事なことになっている。

それに対して、選抜をどれだけ工夫しても意味がない状態というのがある。それは募集人員に見合う志願者が集まらない、あるいは沢山志願者が来ている、自分たちのアドミッション・ポリシーに合致した受験生がいない状態。この場合にはどんなに選抜を工夫しても意味がないことになってしまいます。

そうすると、実は入試の設計においては「募集優先」になるということが分かります。つまりアドミッション・ポリシーに合致した志願者の獲得が選抜方法の工夫に勝つというわけです。効果的な入試広報も必要ですし、実は魅力的な入試の仕組みっていうのが、募集のための非常に大事なツールになる、最も大事かもしれない、ということがあります。

戻ってきますが、「相互関係」なんです。こちらの方でいいと思っても、受験者側がいいと思わなければアドミッション・ポリシーに合致した志願者は集まってこない。ちなみに、志願倍率というのはちょっとトリックがありまして、非常に高い志願倍率の場合は、おそらくキャン

ブルだと思われる可能性が高い。要するに大学そのものが魅力的ということが一つ前提にあるんですけど、「運が良ければ通るかもしれない」という形だと爆発的に志願倍率が増える。だから、志願倍率そのものを追うというのは、ちょっと問題があるんじゃないかなと私は考えています。

それから「大学入試制度設計の諸原則」の残りですね。「育成の原則」。選抜を通じて高校にメッセージを送るべきである。これが今の高大接続改革の中で、非常に強いトーンで出てきているものではないかと思います。もう一つ大事なのが「妥協の原則」です。高等教育は大衆化しています。こうあるべきという理念・理想と現実というのは必ずしも一致していません。これだけの手間をかければ、これだけのいい学生が取れるはずだと思うかもしれませんが、必ずしもそれは現実的ではないかもしれない。ですので、色んな筋を合わせてどこかで妥協しなければいけません。実施者側から言えば持続可能なものでなければいけないので、ある意味可能な限りシンプルにしていくということが大事になってきます。

入試設計の諸原則と東北大学の AO 入試

東北大学における AO 入試の大前提は、実は一般入試の存在です。それがあって初めて AO 入試が活きる。だから、東北大学型 AO 入試のやり方だけを持ってきたところで上手くはいきません。平成 30 年度入学者選抜方針、これはまだ発表されていないので虫食いだけですけど、どんなことが書かれているかというと、東北大学が志願者に求める学生像として、「研究者として貢献する者、豊かな学識とリーダーシップを備える職業人を目指す者。学問に対する強い好奇心がある、高水準の学力がある者」といったことです。入試方法として一般入試ではセンター試験で幅広い学力、個別試験で思考力、表現力を含む高い学力を測ります。そして AO 入試では、東北大学を第一志望とする受験生に

対してこういったものを測ります、というようなことが書かれています。

もう一度東北大学型 AO 入試の五つの特徴をこの原則から見直してみると・・・若干解釈に色々幅があるかと思うのですが・・・「公平性（納得性）の原則」というのは、これは実は社会心理学的な公平性理論に基づいているのです。志願する側が自分を十分にアピールできるかということが最終的な結果に結びつくということになり、そういう機会を持てるかどうか。2～4は「育成の原則」ですね。何を志願者に求めるか、育ててもらいたいのか。これは一般入試、前期日程を照準に準備してもらうことで育つので、AO 入試で全ての教科・科目を課す必要がないということになっています。公平性に関しては、受ける側が公平と思うような試験をやるということで、必ずその努力が結果に出るような形で選抜方法を取るということです。最後は「募集優先の原則」に関わるものです。

こうしたメカニズムを見ますと、やはり背景には一般入試制度を介する実施者側と志願者側の信頼があるんだなということが見えてきます。高大接続改革は議論の転換点に今差し掛かっているのではないのでしょうか。今回の高大接続改革で、ある意味、画期的なことは大学入試の試験問題に焦点が当たったことだと思います。何故かと言うと、「育成の原則」という観点から見ると学力検査が重要であるということの認識は間違っていない。焦点は共通テスト改革に向かったわけですが、今後はおそらく、個別試験を含むトータルな入試設計に対して目を向けるべきなのではないか。従来の議論というのは、「選抜資料の多様化」ということから、学力検査を忌避するという方向だったのですが、これからはより良く学力を測る試験問題はどんなものなのか、という建設的な議論にいくべきだと思います。

ただそうしますと、答申の出発点には実は二つ疑問点がある。それは、小中学校の教育が向上していて、大学、それから高校が旧態依然と

しているという認識です。これはおそらくどう考えてもおかしいですね。小中学校の教育の質が向上しているという認識は全国学力調査を基盤にした国際比較調査の結果に基づいている。それはテスト理論的には非常におかしい。特に全国学力調査対策が蔓延していることが事実とすれば、額面通りに受け取っていいのか、という話になります。もう一つ、これは先程の「進捗状況」の中に出てきたものですが、国立大学の個別試験で記述式問題が課されていないということを前提にして話がされている。その点に関しては、こちらの新しく出ました『大学入試における共通試験』で書かれておりますので、そちらをご参照下さい。

「記述式」に関する認識のズレ

もう一度高大接続改革の「進捗状況」を見ますと、「記述式は文章による表現の評価が可能である」とあります。次に、「二次試験で国語、小論文、総合問題のいずれも課さない募集人員が全体の61.6%である」とされています。したがって、「高等学校における能動的な学習を促進するために記述式が必要であり、評価すべき能力への共通理解、作題・採点の負担軽減に結びつくだろう」というような流れになっています。記述式が国語、小論文、総合問題に限定されている。なぜこういう数値になってしまっているかというと、「学部でその科目を課しているかどうか」だけの調査なんですね。つまり、「国立大学の記述式の問題というのは、国語、小論文、総合問題に限られるのか」ということが疑問として出てくるわけです。個々の設問にさかのぼって解答形式を調査する必要があるんじゃないか、という正当な疑問がわいてきます。私どもでは、この発表が出た時点で別の目的で、ある程度研究を進めていたところでした。そこでの成果を急遽この疑問に答えるように整理し直して、発表しました。本日の討議司会を務めます宮本准教授と私が日本テスト学会誌というところに投稿いたしまして、今年出る予定になって

います。概略を申しますと、平成27年度に国立大学の一般入試で出題された問題約24,000問全ての形式を調べました。速報値ですが、結果から言いますと、文部科学省と同じ集計をすると、「国語、小論文、総合問題いずれも課していない募集人員」は64.1%でした。これは文科省よりも厳しい数値になっています。理由はですね、入試問題の科目は学部ごとではありません。例えば、教育学部のようなところでは専門によって非常に多様な科目の設定があつて、ある部分で課していたり課していなかったりする。文科省の資料のまとめ方では、それは全部課している方に入っているんですけれども、私ども、そこはできるだけ実態に合わせて調査しました。

国立大学の個別試験に記述式の設問がどれくらいの割合で含まれているかということ、実は9割が記述式なんですね。設問数ベースです。逆に言えば、国語であっても1割は記述式の形式にはなっていないことがわかりました。小論文、総合問題といってもほとんどは記述式ですが、必ずしもそうではない設問もあります。そこから、1問でも記述式の問題を課されなかった志願者の募集人員というのは、実は10%ありません。8.9%でした。形式的に見ると、「穴埋め式」とか「短答式」も記述式に入るので、それも入れているんじゃないかという反論もあるのだろうけれども、それらを除いてもこの数値は変わりません。ということは、文科省の集計そのものはもちろん間違いではないんですが、そこから国立大学で記述式の問題を課していないと推認するのは間違いだということです。

新しい共通テストにおける記述式問題の条件を見てみますと、評価すべき能力や作問の構造ということで、国語と数学をターゲットにして、「主体性の発揮、思考プロセスの自覚、表現力」というようなものを問うのだとされています。ということは、私どもとしては、現在の東北大学の個別試験で課されていない、あるいは、課すことが出来ないような能力を計る画期的な内容の問題が共通試験で課されるんだろうな、と

いうことを期待するわけです。

現時点で、本当は試験問題の機能というのはきちんと分かっている必要はないのですが、まだ研究段階です。喫緊の課題だと思います。ということで、昨年度から文部科学省から大学入学者選抜研究委託事業の委託が始まりました。私ども東北大学もその中に入っていて、「個別学力試験「国語」が測定する資質・能力の分析・評価方法に関する研究」というテーマで北海道大学のリーダーシップの下で研究を進めています。また、先程の研究がそうなんですけれども、それに関連したようなことで、個人的に採択されるものですが、科学研究費を頂いて研究を進めております。それに関しては速報性が大事だということで、こちらの Web サイトに研究成果を掲載しております

(<http://www.adrec.ihe.tohoku.ac.jp/>)。

新共通テスト実施の日程問題

そういった非常に画期的な共通試験が開発されるということを前提にしたとしても、それが実際に入試に機能するためにはもう一つ条件があります。その話を詰めておきたいと思います。

「国立大学における大学入試の日程問題」と呼ばせていただきました。国立大学の入試、当然のことですが勝手にやるわけにはいきません。文部科学省が発表する「大学選抜者実施要項」というルールに従ってやることになります。その中で、「国立大学の入学者選抜の日程は、国立大学協会の定める実施要領及び実施細目に基づき実施をすること」となっております。新共通テストにもこの「日程問題」が不可避になってくると思います。進捗状況の「案 1」を前提にしますと、「センターが 1 月に実施し、採点をする」ということです。私どもの AOⅢ期はセンター試験をベースにしたものですから、新共通テストも同じように利用するとなると、実施後何日以内に成績を提出していただく必要があるのが外せない絶対条件になります。

国立大学における大学入試の日程の仕組みで

すが、実施要領によれば、2 月 25 日というのが毎年日付を固定されて前期日程試験の初日になっています。AO 入試の日程は変動します。AO 入試については平成 30 年度の場合は「2 月 7 日までに結果を発表し、14 日までに入学手続きを行う」ということが決められています。では、他方、センター試験はといいますと、「大学入試センター試験実施大綱」というものがありまして、・・・これは平成 21 年以降に決まったものですけれども、・・・「1 月 13 日以降の最初の土曜日及び翌日の日曜日」に実施することとなっています。センター試験が曜日固定、前期日程試験が日付固定になっています。ということで、現在に至るまで、それから、この先どんな日程で AOⅢ期を含めて前期試験まで、センター試験から何が行われてきたのかということをもとめたものがお配りした A3 の表です。センター試験から前期日程試験までに必要な作業です。まず AO 入試Ⅲ期の出願期間は、センター試験の後、中 1 日おいて概ね 4 日間になっています。これは受験生には非常に評判が悪いです。厳しいです。でも、この日程でやらざるを得ない事情があるということですね。受付後、志願者の分のセンター試験の成績を請求します。それを受け取る作業があるのですが、これはオンラインでやりますので、受験者の成績を請求すると数分で入手できます。したがって、この部分の日程はちょっと詰めようがない。その後、AOⅢ期の第 1 次選考と合格発表をします。それは成績受領の翌日です。もうほとんど奇跡的な日程です。それから第 1 次選考を実施する間に中 3 日です。これは第 1 次選考で不合格になると東北大に来る必要がないので、そういう意味ではこれは非常に受験生に迷惑を掛けているんですけれども、最低限必要な期間です。第 2 次選考をして合格発表まで中 1 日です。これは AOⅡ期や一般入試では考えられない離れ業です。通常、1 週間とか、場合によっては 2 週間くらいかかるものです。それを何とか中 1 日で今やっています。次に入学手続き期間がありま

す。以前は当日から手続き期間を持ってきたこともあったんですけども、中1日おいてその後5日間くらいは必要です。特にお金の支払の問題があつて、結構な額を用意しなければいけないし、窓口が開いている時間に振込に行かなければいけないということがあるので、どうしても5日間が必要だろう、というのが現場の意見です。

その後、AO入試の可否情報を大学入試センターに提出をします。手続きの終了した後の翌日に、です。その後に推薦入試やAO入試の合格者情報を受領します。今までの実績から見ると中3日です。このプロセスは絶対に欠かせません。というのは、以前、大混乱になった複数合格可能な制度に戻すということは、東北大学のAO入試の根幹を崩してしまうということになりますので、極めて重要です。

それでは、これだけのプロセスをどこまで詰められるのかという話ですね。平成30年度入試以降は推測です。もしも、一番厳しかった日程・・・これは今ではあり得ないのですが、センター試験はもう一週間早くやりますので、・・・では、センター試験から成績受領まで中14日かかっています。これをベースにすると、今と同じルールであれば平成33年度入試では中16日ということになります。国立大学協会の方でAO入試の規程を日付固定、後ろから逆算して日付固定にさせていただけるとあと3日稼げます。中19日。つまり、最短で実施した年の期間からの差分を考えると5日間は確保できる。ちなみに平成37年度入試には、日付を固定しても中17日になります。5日間だったものが3日間。この期間に採点プロセスを改善していただけるのだと思います。

ということで、東北大学において入試設計の絶対的必要条件は、この日程問題の解消です。この期間で成績を提供していただかなければ東北大学の入試が壊れてしまいます。元々、「改革のモデル」として位置づけたものを壊すという愚行が行われることがないと信じています。た

だ、今の時点では見通しが分からなくて不安ですので、是非、見通しの提示をお願いしたいと思っていますところ。

東北大学の入試改革の状況

さて、東北大学がAO入試を3割まで拡大するという方針を出しましたが、これには課題もあります。先程も申し上げました、選抜が意味を持つための条件としては志願者の募集が重要です。これを拡大する必要があるということで、平成28年度時点の区分のままでは無理ですので、平成30年度で見られますように各学部で努力をしていただいて、今までやってこなかった区分を開始するというをしています。ただ、それでも「継続性の原則」から考えると、あまりにも大きな負担というのは難しい。工学部の現状が限界点だろうと思います。もし、募集人員の全てを今のAO入試のやり方で選抜するとすれば、約1ヶ月間大学の活動がストップしてしまう・・・これは石井教授の試算ですけども、『大学入試における共通試験』に収めさせていただいたところです・・・。

「募集優先の原則」、「公平性の原則」、「育成の原則」、この辺はもう時間がないので細かく話せませんが、今まで各学部がそれぞれの考え方でやってきたAO入試を、全学体制化することが必要だろうと考えています。基本的には用いられる用語の統一ということから、今、始めています。同じ内容に同じ用語、同じ様式をあてる。完全には統一できてないかも知れないんですけども、そこから始めています。

あとは「妥協の原則」ですね。どうしても全学体制化すると、「自分の学部はそれに合わないんだ」というところが出てきますが、そのギリギリの調整です。「自由設計入試」、各学部のポリシーを取り入れるということと、共通化ということの妥協点を探ることを、今、試みているところです。

様々な意味で、やっぱり筆記試験というのは非常に重要です。AOⅢ期では新共通テストが

利用できなければ前提が崩れてしまう。AOⅡ期では独自の筆記試験を課していますが、今までのように学部単独だとその専門性に限界があります。AO入試全学体制の実質化をどうしていくかということで、全学共通に筆記試験を中心に、AO入試の企画・実施をサポートできる専門的人材を確保することを昨年度から始めました。今、司会に立っております石上先生もその一人なのですが、具体的には高校教員の経験者から科目ごとに担当者を採用しています。英語、数学、物理、化学という4名ですね。こういう人材を継続的に確保していくということが、今後の一番の課題だと思っています。高等学校が筆記試験を充実して欲しい、ということが当然あるだろうというのが前提です。最も重要視しているのは「相互関係の原則」ということになるのかなと思います。

おわりに

大分時間が過ぎてしまったようです。まとめます。入試改革が改悪として受け取られる背景には「スケジュール問題」があります。これは今日申し上げた「日程問題」ではなくて、急に大きな改革を実施すること自体が現場にとっては悪いことだと受け止められるということです。それは『高等学校学習指導要領 vs. 大学入試』という本の中に書かせていただいています、ここにやはり「妥協の原則」を働かせるのが重要じゃないかな、と感じます。現在の大学入試センター試験、これは運営に対する批判は基本的にはないと思います。運営実施面では非常に精巧に作り上げられています。むしろお手本になると思います。詳しくは『「書く力」を伸ばす』という本に書かせていただいています。従来からの財産を最大限に活かし、現在行っている改革が着実に続けられるように、迅速に実施方針を明らかにしていただきたいというようなことを申し上げて、私の講演を締めさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

石上正敏特任教授(司会)：

倉元先生ありがとうございました。ご質問等がございましたら、お手元の質問票をご利用いただけますようお願いいたします。後程回収をさせていただきますのでご記入ください。



新共通テストの下における 東北大学学部入試の展望

東北大学 高度教養教育・学生支援機構
教授 倉元 直樹



新共通テストの展望 (2)

- 現時点で **実施方針が未発表** → 以降、一部推測
- 「1. 記述式問題の導入」についての制度設計案
 - 【案1】1月に実施し、センターが採点
 - 【案2】12月に実施し、センターが採点 ← 高校が反対
 - 【案3】1月に実施、センターがデータ処理、大学が採点 ← 大学が反対
- **【案1】を前提**に展望を考える

2017/5/12 第26回東北大学高等教育フォーラム 5



はじめに

- 第22回東北大学高等教育フォーラム(平成27年5月15日)
 - 閉会の辞: **5年後の入試がどうなるのか説明する義務**
- あれから2年経過 → 義務を果たすとき

東北大学では、**現在まで積み上げてきた入試改革とその方針**を今後も**継続**することになるだろう

2017/5/12 第26回東北大学高等教育フォーラム 2



新共通テストの展望 (3)

- 「2. 英語の多技能を評価する問題」についての制度設計案
 - 将来的に **資格・検定試験**の活用のみ
 - 当面はセンター試験で2技能(リーディング、リスニング)、認定した資格・検定試験で2技能(ライティング、スピーキング)
 - ← 時間と材料不足のため、本講演では触れない

2017/5/12 第26回東北大学高等教育フォーラム 6



本講演の構成

• 新共通テストの展望 • 東北大学の入試設計 • 入試の多様化と東北大学型AO入試 • 大学入試の諸原則 • 諸原則から見た東北大学型AO入試	• 育成の原則と入試問題 • 新共通テスト記述式問題への期待 • 日程問題 • AO拡大方針の課題 • まとめ
--	---

2017/5/12 第26回東北大学高等教育フォーラム 3



東北大学の入試設計 (1)

- **一般入試**(一般選抜入学試験)と**AO入試**(アドミッションズ・オフィス入学試験)の二本柱
- 一般入試: 前期日程試験と後期日程試験
 - 前期日程: 全学部で実施、最大の募集人員
 - 後期日程: 現在は経済学部、理学部のみ
- **AO入試**: 東北大学の入試設計の特徴
 - **学力重視、第1志望の受験生**のための特別な機会

2017/5/12 第26回東北大学高等教育フォーラム 7



新共通テストの展望 (1)

- 高大接続改革の進捗状況について(H28.8.31)
- **大学入学希望者学力評価テスト(仮称)**の検討状況
 1. 記述式問題の導入
 2. 英語の多技能を評価する問題
 3. マークシート式問題の改善
 4. 結果の表示
 5. 複数回実施・CBTの導入
 6. プレテスト

2017/5/12 第26回東北大学高等教育フォーラム 4



東北大学の入試設計 (2)

2017/5/12 第26回東北大学高等教育フォーラム 8

東北大学の入試設計 (3)

・東北大学のAO入試: 常識を超える 5つの特徴

1. 入試は思いを伝える場
2. AO入試は 学力重視
3. AO入試の方が難しい
4. AO対策は 計画的な勉強
5. 規格外の オープンキャンパス

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

9

入試の多様化と東北大学型AO入試 (3)

・多様化政策の一環としてのAO入試とは？

各大学による 自由設計入試

東北大学型は 他大学と違ったコンセプト

1. 選抜資料の多様化・評価尺度の多元化 ← 推進
2. 学生集団の多様化 → むしろ特色化
3. 受験機会の複数化 → 国立大学協会による公認
(「高大接続関係のパラダイム転換と再構築」pp.7-40)

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

13

東北大学の入試設計 (4)

・教育再生実行会議

第4次提言「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」(平成25年10月31日)
→ 中教審高大接続答申に多大な影響

・東北大学のAO入試が 入試改革のモデルに

- ・募集人員に対して AO入試3割を目標とした拡大
← 東北大学の入試改革方針 (平成28年度入試～)

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

10

大学入試の諸原則 (1)

・個別大学から見た大学入試設計のポイント

1. 大学入試の目標

・ 求める学生の確保 → 以下、それに伴う副次的目的

・ 相互関係の原則

入試は 募集・選抜 側と 志願者 の 相互関係で成立

・ 継続性の原則

選抜結果のフィードバックと翌年以降の募集への影響
選抜のコストや手間暇は持続可能な範囲が条件

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

14

入試の多様化と東北大学型AO入試 (1)

・大学入試の多様化: 大学入試政策の基軸

1. 選抜資料の多様化・評価尺度の多元化
小論文試験、書類審査、面接等 ← 創意工夫
2. 学生集団の多様化
求める学生像を一般入試と差別化
学力水準の多様化を容認するか否か？

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

11

大学入試の諸原則 (2)

2. 選抜の諸原則

・ 公平性(納得性)の原則

最重要の情報は 合格か 不合格か

公平性とは？ → 不合格者が結果に納得できる
(能力+)努力が報われること

・ 斉一条件の原則

全受験者が公平と感じる ← 同一条件の確保

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

15

入試の多様化と東北大学型AO入試 (2)

3. 受験機会の複数化: 国立大学の文脈

一校・二期校制以来の懸案事項
共通1次早期廃止の原因の一つ

昭和62年度改革のショック

→ 第1志望重視、東北大学型AO入試の淵源
(「高大接続改革にどう向き合うか」pp.85-113)

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

12

大学入試の諸原則 (3)

2. 選抜が意味を持つための条件 (1)

1. 理想状態

アドミッション・ポリシーに合致した志願者が 募集人員と同数 志願している状態

2. 選抜に 過度な負担がかからない 状態

アドミッション・ポリシーに合致した志願者 のみが 募集人員を超えて 志願している状態

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

16

大学入試の諸原則 (4)

2. 選抜が意味を持つための条件 (2)

3. 選抜が重要になる状態

志願者の中にアドミッション・ポリシーに合致した受験生と合致しない受験生が混在している状態

4. 選抜が無意味な状態

募集人員に見合う志願者が集まらない！か、アドミッション・ポリシーに合致した受験生が志願者の中には存在しない！状態

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

17

諸原則から見た東北大学型AO入試 (2)

・入試方法

・一般入試

・センター試験で幅広い基礎学力

・個別試験で思考力、表現力を含むより高い学力

・AO入試: 東北大学を第一志望とする受験者

・幅広い基礎知識、論理的思考力、表現力・コミュニケーション能力等...

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

21

大学入試の諸原則 (5)

3. 大学入試制度設計の諸原則 (1)

・募集優先の原則:

アドミッション・ポリシーに合致した志願者獲得が
選抜方法の工夫に勝る

(効果的な)入試広報活動の重要性

志願倍率のトリック

← 爆発的な志願倍率はギャングルだから？

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

18

諸原則から見た東北大学型AO入試 (3)

・東北大学型AO入試の5つの特徴(再び)

・「1」:公平性(納得性)の原則

・「2～4」:育成の原則、公平性(納得性)の原則

← 一般入試前期日程を基準に準備

・「5」:募集優先の原則

← オープンキャンパスを基軸とした入試広報の展開

・育成の原則の背景に一般入試制度への信頼

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

22

大学入試の諸原則 (6)

3. 大学入試制度設計の諸原則 (2)

・育成の原則:

選抜を通じて高校にメッセージを送るべき

・妥協の原則:

高等教育の大衆化 →

理念・理想と現実の妥協点の模索

実施者側の継続可能性 → シンプルかつ簡便に！

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

19

育成の原則と入試問題 (1)

・高大接続改革における議論の転換点

・選抜方法の改革の主眼は大学入試問題

・前提:学力検査は育成の原則から見て重要

・焦点:共通テスト改革

→ 個別試験を含むトータルな入試設計へ

・選抜資料の多元化＝学力検査の忌避

→ よりよく学力を測る問題への建設的な議論へ

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

23

諸原則から見た東北大学型AO入試 (1)

・東北大学におけるAO入試の大前提

一般入試(センター試験＋個別学力検査)の存在

・平成30年度入試入学者選抜方針(予定)から

・東北大学が学部志願者に求める学生像

・研究者として貢献、豊かな学識とリーダーシップを
備える職業人

・学問に対する強い好奇心、高水準の学力

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

20

育成の原則と入試問題 (2)

・試験問題に対する認識を巡る2つの疑問

・学力の国際比較調査と全国学力調査

全国学力調査対策の蔓延 →

小・中学校の教育の質は向上しているのか？

・国立大学の個別試験では記述式問題が課さ
れていないのか？

(「大学入試における共通試験」pp.47-82)

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

24

育成の原則と入試問題 (3)

- ・新共通テストへの記述式導入の意義
(高大接続改革の進捗状況)
- ・記述式は文章による表現の評価が可能
- ・国立大学の二次試験で、**国語、小論文、総合問題**のいずれも課さない学部は、全体の**61.6%**
→ 考えを形成し表現する能力などをより的確に評価、
高等学校における能動的な学習を促進
- ・評価すべき能力への共通理解、**作題・採点の負担軽減**

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

25

新共通テスト記述式問題への期待 (2)

- ・**試験問題の機能**の研究 ← 喫緊の課題
- ・**大学入学者選抜研究委託事業**: 個別学力試験「国語」が測定する資質・能力の分析・評価手法に関する研究(代表大学: 北海道大学)
- ・科学研究費基盤研究(A): 高大接続改革の下での新しい選抜方法に対する教育測定論・認知科学・比較教育学的评价(研究代表者: 倉元直樹)
(<http://www.adrec.ihe.tohoku.ac.jp/>)

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

29

育成の原則と入試問題 (4)

- ・問題点: 「記述式＝国語、小論文、総合問題」?
← 限界: 学部で**科目を課しているか否か**の調査
- ・**個々の設問**にさかのぼって**解答形式**を調査
- ・分析対象: 国立大学82校の2015年度一般入試個別学力試験問題(前期日程、後期日程)全科目**約24,000問**
- ・分類カテゴリ: 客観式(7カテゴリ)、記述式(11カテゴリ)等
(宮本・倉元 [2017]「日本テスト学会誌」[印刷中])

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

26

日程問題 (1)

- ・国立大学における**大学入試の日程問題**
- ・大学入学者選抜実施要項(高等教育局長通知)
← **文部科学省**のルール
- ・大学入試の考え方、規則等に関する通知
- ・国立大学の入学者選抜の日程等は、**国立大学協会の定める実施要領及び実施細目**に基づき実施される。

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

30

育成の原則と入試問題 (5)

- ・分析結果概要(速報値)
- ・国語、小論文、総合問題のいずれも課さない学部は、全体の**64.1%** ← 文科省資料より大
- ・国立大学個別試験に占める**記述式設問**は**87.5%**
(国語88.4%、小論文98.3%、総合問題94.8%)
- ・**記述式を全く課さなかった募集人員は8.9%**
(穴埋め式・短答式を除いて集計しても同じ)

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

27

日程問題 (2)

- ・新共通テストに不可避の**日程問題**
- ・【案1】1月に実施し、センターが採点 →
AOⅢ期で新共通テストを利用するために**実施後何日以内に成績を提供してもらう必要があるか?**

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

31

新共通テスト記述式問題への期待 (1)

- ・新共通テストにおける記述式問題の条件
- ・**評価すべき能力や作問の構造**
(高大接続改革の進捗状況について)
- ・国語: 主体性の発揮、思考プロセスの自覚、表現力
- ・数学: 主体性の発揮、思考プロセスの自覚、表現力
- ・現在の東北大学の**個別試験で課されていない、課すことができないような能力**を測る問題

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

28

日程問題 (3)

- ・国立大学における**大学入試の日程**の仕組み
- ・大学入学者選抜実施要項(高等教育局長通知)
← **文部科学省**のルール
- ・大学入試の考え方、規則等に関する通知
- ・国立大学の入学者選抜の日程等は、**国立大学協会の定める実施要領及び実施細目**に基づき実施される。

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

32

日程問題 (4)

- 国立大学の入学者選抜についての〇〇年度 **実施要領**
 - **2月25日**をその試験第1日として「前期日程」の試験を行い… ← 毎年、**同じ日付**
 - (平成30[2018]年度入試の場合) **AO入試**についての結果発表は、**2月7日**までとし、**2月14日**までに入学手続きを行う ← 毎年 **変動**

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

33

日程問題 (8)

- A3判資料の平成30年度入試以降は推測
- 平成18年度入試: 最も厳しかった日程
 - **センター試験から成績受領まで中14日**
- 平成33年度入試
 - 現状と同じルールであれば中16日
 - **AO入試の規程を日付固定とすれば中19日**

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

37

日程問題 (5)

- 大学入試センター試験の日程 → **大学入試センター試験実施大綱**によって定められる
- **1月13日以降**の最初の土曜日及び翌日の日曜日 → センター試験は **曜日固定**、前期日程試験は **日付固定**
- センター試験から前期日程試験までの作業についてA3判資料を参照

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

34

日程問題 (9)

- 日付固定 → 差分を **5日間**確保できる
 - 平成37年度入試では日付固定でも中17日 → この期間に採点プロセスの改善
- **日程問題の解消**
 - 東北大学における入試設計の **絶対的必要条件**
 - **高大接続改革**の目的完遂の **大前提**
- 是非、見通しの提示を！

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

38

日程問題 (6)

- センター試験から前期日程まで必要な作業
 1. **AOⅢ期出願期間**: 中1日、概ね4日間
 2. **センター試験成績の請求・受領**
 - ← オンラインで行うので数分
 3. AOⅢ期 **第1次選考**と合格発表: 受領の翌日
 4. **第2次選考**の実施: 中3日

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

35

AO入試拡大方針の課題 (1)

- 募集人員拡大に伴う課題
 1. 選抜が意味を持つための条件
 - **志願者の母集団拡大**が必須
 - 現在の区分では無理 → **新規区分**の開始
 2. 継続性の原則 → **負担増**の問題
 - 工学部の現状(3割達成済)が限界点
 - (「大学入試における共通試験」pp.185-216)

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

39

日程問題 (7)

5. 第2次選考 **合格発表**: 中1日
6. **AOⅢ期入学手続き期間**: 中1日、概ね5日間
7. AO入試 **合否情報の提出**: 手続き終了翌日
8. **推薦入試・AO入試等合格者情報受領**: 中3日
 - ← 多重合格を防ぐために **極めて重要**
 - (「高大接続改革にどう向き合うか」pp.85-113)

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

36

AO入試拡大方針の課題 (2)

- 募集優先の原則、公平性の原則、育成の原則
 - **AO入試の全学体制化**
- 従来: 学部、募集単位ごとの流儀
 - 名称の統一: **同じ内容**には **同じ用語**、**同じ様式**
- 妥協の原則
 - 実施面: 部分的に学部、募集単位を超えた共同化
 - 同時に **自由設計入試の利点**を保つ

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

40

AO入試拡大方針の課題 (3)



- 公平性の原則、斉一条件の原則、育成の原則
→ **筆記試験の重要性**の増加
- **AOⅢ期**における**新共通テスト**の利用
- **AOⅡ期**における**独自の筆記試験**
← 学部単独では**専門性**に限界
- AO入試の全学体制実質化の秘策？

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

41

AO入試拡大方針の課題 (4)



- **全学共通**に**筆記試験**を中心に**AO入試の企画・実施**をサポートできる**専門的人材**の確保
- **特任教授制度**: 高校教員経験者から募集
 - **科目ごと**に担当者を採用
 - 現在、**英語、数学、物理、化学**の4名
 - 継続的な人材確保が課題
- 最も考慮されるべきは**相互関係の原則**

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

42

まとめ



- 入試改革が**改革**と受け取られる背景に**スケジュール問題**の存在 ← **妥協の原則**の重要性!
(「高等学校学習指導要領 vs 大学入試」pp.53-89)
- **大学入試センター試験**は運営・実施面でも精巧に作り上げられたお手本になるシステム
(「『書く力』を伸ばす」pp.187-217)
- **従来の財産**を最大限生かし、**迅速に方針**を

2017/5/22

第26回東北大学高等教育フォーラム

43

新共通テストにおける「日程問題」検討のための基礎資料

	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32	H33	H34	H35	H36	H37
1月11日																										
1月12日																										
1月13日																										
1月14日													センター					センター	センター	センター						
1月15日	センター					センター							センター													
1月16日	センター					センター							センター													
1月17日	出願期間					センター							センター													
1月18日	出願期間					センター							センター													
1月19日	出願期間					センター							センター													
1月20日	出願期間					センター							センター													
1月21日	出願期間					センター							センター													
1月22日	出願期間					センター							センター													
1月23日	出願期間					センター							センター													
1月24日	出願期間					センター							センター													
1月25日	出願期間					センター							センター													
1月26日	出願期間					センター							センター													
1月27日	出願期間					センター							センター													
1月28日	出願期間					センター							センター													
1月29日	出願期間					センター							センター													
1月30日	出願期間					センター							センター													
1月31日	出願期間					センター							センター													
2月1日	セ試受					セ試受							セ試受													
2月2日	セ試受					セ試受							セ試受													
2月3日	セ試受					セ試受							セ試受													
2月4日	1次発表					セ試受							セ試受													
2月5日	1次発表					セ試受							セ試受													
2月6日						セ試受							セ試受													
2月7日						セ試受							セ試受													
2月8日						セ試受							セ試受													
2月9日	1次発表					セ試受							セ試受													
2月10日	2次発表					セ試受							セ試受													
2月11日	2次発表					セ試受							セ試受													
2月12日	2次発表					セ試受							セ試受													
2月13日	2次発表					セ試受							セ試受													
2月14日	合格発表					セ試受							セ試受													
2月15日	入学手続					セ試受							セ試受													
2月16日	入学手続					セ試受							セ試受													
2月17日	入学手続					セ試受							セ試受													
2月18日	入学手続					セ試受							セ試受													
2月19日	入学手続					セ試受							セ試受													
2月20日	入学手続					セ試受							セ試受													
2月21日	入学手続					セ試受							セ試受													
2月22日	入学手続					セ試受							セ試受													
2月23日	入学手続					セ試受							セ試受													
2月24日	入学手続					セ試受							セ試受													
2月25日	入学手続					セ試受							セ試受													
2月26日	入学手続					セ試受							セ試受													

第Ⅱ部 現状報告

現状報告者紹介

木南 敦（きなみ あつし）氏

1956 年大阪府生まれ

〔教員歴〕

京都大学助手（法学部）（3 年）

京都大学助教授（法学部、大学院法学研究科）（11 年）

京都大学教授（大学院法学研究科）（25 年、現職）

ミシガン大学ロースクール客員教授（1999 年秋学期、2002 年冬学期、2009 年冬学期、2015 年冬学期、2016 年秋学期）

〔主な研究歴〕

専門、英米法（特に、日本とアメリカの法の比較）

〔主な著書、研究業績〕

『合衆国憲法と通商条項』（東京大学出版会）

〔学会活動等〕

日米法学会代表理事（3 年）、信託法学会常務理事、金融法学会理事

現状報告者紹介

阿部 淳（あべじゅん） 氏

1957 年岩手県生まれ

〔教職員歴（通算 38 年）〕

英語科

岩手県立大東高等学校講師（1 年）

福岡高等学校教諭（6 年）

遠野高等学校教諭（7 年）

花巻北高等学校教諭（8 年）

盛岡第一高等学校教諭（6 年）

（北海道・北東北 3 県交流人事で、秋田県へ転入）

秋田県立秋田高等学校教諭（2 年）

秋田南高等学校教頭兼教育専門監 1 年）

（岩手県教員退職）

秋田県教育委員会政策監（1 年）

秋田県立大曲高等学校校長（3 年）

湯沢高等学校校長（現職）（3 年目）

〔主な教育活動〕

担任経験：正担任 20 年，副担任 8 年

分掌経験：総務 4 年，教務 3 年，生徒指導 20 年，進路指導 3 年．

部活動：ラグビー，山岳，野球，サッカー，陸上競技，剣道，卓球，バレーボール（女子），
バスケットボール，囲碁・将棋，J R C，ユネスコ，応援団，生徒会

現状報告者紹介

清水 和弘（しみず かずひろ）氏

1952 年福岡県生まれ

〔教員歴〕

福岡大学附属大濠中学校・高等学校教諭（37 年間）

福岡大学附属大濠中学校・高等学校 副校長（3 年目）

〔主な教育活動〕

中学校教務主任，高等学校進路指導主任，高等学校学年主任

現状報告者紹介

山地 弘起（やまじ ひろき）氏

1959 年香川県生まれ

〔教員歴〕

東京大学教育学部教育心理学科助手（3 年間）

メディア教育開発センター研究開発部助教授（15 年間）

長崎大学大学教育イノベーションセンター教授（6.5 年間）

〔主な研究歴〕

専門は教育心理学（身体体験に基づく主体性の研究）

〔主な著書、研究業績〕

山地弘起、身体体験という土壌－自身とのかかわりから他者とのかかわりへ－、山地弘起（編）「かかわりを拓くアクティブ・ラーニング」、78-104 頁、ナカニシヤ出版、2016 年 8 月

山地弘起、ソマティック・インテリジェンス－体験と関わるかしこさとは？ギンドラー＝ヤコービのワークから－、久保隆司（編）「ソマティック心理学への招待：体と心のリベラルアーツを求めて」、47-64 頁、コスモスライブラリー、2015 年 8 月

Yamaji, H. Does mindfulness cultivate social connectedness? A narrative review on a novel modality of social emotional learning. 長崎大学大学教育イノベーションセンター紀要、第 5 号、67-88 頁、2014 年 3 月

山地弘起、かかわりの基盤を問う－「学生と楽しむ」授業の幸運な苦難－、清水亮・橋本勝（編）「学生と楽しむ大学教育」、216-232 頁、ナカニシヤ出版、2013 年 12 月

山地弘起、健康教育における実践事例－体験学習を軸にして－、山地弘起・橋本健夫（編）「学生の納得感を高める大学授業」、107-130 頁、ナカニシヤ出版、2012 年 3 月

山地弘起、学生の教員印象、授業内体験、及び授業評価・授業改善への意識－因果モデリングの試み－、大学教育学会誌、第 33 巻第 2 号、115-123 頁、2011 年 11 月

〔学会活動等〕

日本ソマティック心理学協会運営委員（4 年間）

現状報告 1：京都から見える東北大学 AO 入試

京都大学大学院法学研究科教授

木南 敦 氏

〔講師紹介〕

石上正敏特任教授(司会)：

それでは早速ですが，続いて第 2 部の現状報告にうつります．現状報告 1 として，「京都から見える東北大学 AO 入試」としまして，京都大学大学院法学研究科教授の木南敦先生，よろしくお願いいたします．

木南敦教授：ただいま紹介いただきました木南でございます．倉元先生とは以前からいろいろと話をする機会があつて，ここで話をするように依頼を受けました．以前にフォーラムに出席した時は座席に座って聞いていましたが，今度は発表の壇上に引きあげられました．いまから話していくうちに下に降りるようにいわれないかと心配しています．

さて，私の自己紹介につきましては配布資料のとおりです．大学での仕事として，教授の仕事にはティーチング，リサーチ，サービスというのがあります．学内で依頼をうけて委員会などで委員をすることがサービスと呼ばれます．平成 15 年頃から，京都大学における入学選抜方法の研究の仕事をしてきました．この仕事をする中で，先ほど申しましたように倉元先生とお話する機会がありました．さらに，2014 年秋から京都大学で理事補という仕事をしております．理事補というのは理事を補佐する役目ですが，教育担当の理事の補佐をしております．2016 年 4 月に京都大学に高大接続・入試センターが設置されました．教育担当の理事がセンター長に就任され，私



はこのセンターの副センター長として仕事をしております．このように，大学においてサービスと呼ばれる仕事をする過程で入学選抜に関して種々検討してきました．今日はそのような仕事をする中で思いついたことを，東北大学の AO 入試，特に AO II 期に関連してお話をしたいと思います．

東北大学と京都大学の入試について

先に京都大学の話简单にします．京都大学では平成 28 年度の入学選抜から，それぞれの学部がその方針に基づいて、AO 入試，推薦入試，後期日程入試というものを始めることにしました．これをひとくくりにして特色入試と呼んでいます．しかし，特色入試という概念から始まったかのように誤解をうけやすくなって、そのためにご批判がありますけれども，特色入試というコンセプトが先にあったのではなくて，特色入試はこのような名称に過ぎないということをこの場でも繰り返しておきたいと思います．京都大学の特色入試のうちで AO 入試と推薦入試の大部分は、東北大学 AO 入試Ⅲ期に似ています．似ているところは，

合格者の決定に大学入試センター試験の成績を利用していることです。毎年文部科学省から発出される大学入学者選抜要項の表現を使いますと、大学入試センター試験の成績を合格者決定に利用することは、「大学教育を受けるために必要な基礎学力の状況を把握するため」、「大学入試センター試験の成績を出願要件（出願の目安）や可否判定に用いる」ということです。

ここで、東北大学の AO 入試を見ますと、AOⅢ期ではこういうふうになっていますけれども、AOⅡ期ではこのような扱いにはなっていません。東北大学の平成 29 年度入学者選抜では、文学部をはじめ、いくつかの学部が AOⅡ期で学生を募集されています。さらに、これまで予告されているところによれば、AO 入試Ⅱ期は、平成 30 年からは医学部の 2 つの学科、歯学部、平成 31 年からは法学部でも実施されます。そうしますと、平成 31 年度には AOⅡ期では 252 名の学生を募集され、AO 入試Ⅲ期では 308 名の学生が募集されるということになります。平成 31 年度と現状とを比較してみますと、AO 入試Ⅱ期の募集人数が 20%あまり増え、AO 入試Ⅲ期の募集人数が 5%あまり増えます。こういうふうに、AO 入試Ⅱ期で募集人数が増大されていることがよくわかります。

京都から見ると、東北大学では AO 入試Ⅱ期が成果を上げているからであろうと推測しております。本日のフォーラムで里見総長のお話にもありましたように、AO 入試導入以来、学力重視の AO 入試を掲げてきたということです。さらに、すでに発表されているとおり、AO 入試による募集人員を 3 割に拡大する方針が打ち出されています。学力重視の AO 入試を掲げて、この方針がどのように実現されるかというところが非常に興味深いうえに、AO 入試Ⅱ期の成功が続くことを、本日の私の期待とし

てまず申し上げておきたいと思います。

入試の課題：人口減への対応

さて、スライドを 4 枚用意しました。皆さんのお手元の資料にも入っているかと思いますが、最初のスライドは、学校基本調査の結果によって、18 歳で大学あるいは短期大学に入学した人を地域別に分けたものです。文部科学省は三重県を近畿に含めるという地域区分を用いますが、このスライドでは、それとは地域の区分を少し変えています。スライドに示しましたように、東北という地域は、全国の大学の進学者のうちの 6%を占めます。これは東京の約半分です。

次のスライドは東北地区における 18 歳人口の推移を県別に表したものです。少し凹んでいるところがありますが、その部分を見無視してまっすぐ線を引いてみると、福島県と宮城県では、第 2 次ベビーブームの人たちが高等学校に進学する頃に少し増えていたように見えますけれども、他のところではなだらかにずっと減り続けていることが示されます。これから数年後、東北地区の 18 歳人口は 8 万人くらいということになります。その 8 万人のうち、東北地区の大学進学率は 40%台であろうと思われますからそれをかけてみると、大学進学者が減っていくことが示されます。

その次のスライドをご覧くださいと思います。この 2 枚は、京都大学と東北大学の入試出願者のデータを大学紹介冊子から集めたものです。京都大学のものは一般入試のもので、前期日程に限られています。東北大学は AO 入試もその他もすべて含んだ数字として発表されていますので、それを使いました。東北大学については別のデータを見ますと、平成 28 年度の志願者は、一般入試が 6,129 名、AO 入試が 1,444 名、その他が 56 名と発表されて

います。このように数値の算出にやや異なるところがあります。志願者で示したスライドで東北大学の志願者のうちで 40%は東北地区という値は、AO 入試のⅡ期、Ⅲ期と一般入試とを全部志願することも可能であることが反映していますから、志願者よりは入学者で見たほうがよいように思われます。入学者で示したスライドで見直してみますと、東北大学では入学者の 39%が東北地区から来ています。これに対して、京都大学では入学者の 51%が近畿地区から来ています。関東とか甲信越とかひとまとめにしていますけれども、県別に特徴が見られます。甲信越地区では、新潟県、長野県では相当程度東北寄りです。東海地区では、静岡県は東北寄りですが、愛知県、岐阜県と三重県は京都大学寄りです。地域的特性がありますが、東京はどちらからみても特異な地域に見えます。高校生の数からこうなるのだろうと想像されます。このように、京都大学と東北大学は入学者に関する限り競合関係にないといってほぼ間違いはなさそうだといいように思います。

それだけではなく、東北大学の AO 入試、特に AO 入試Ⅱ期が成功をしている状態が続いていますと、そこから京都大学が学び取ることがあって、それを京都大学が上手に実行に映したとしても、東北大学に悪影響が及ぶということはないと考えられます。今後東北大学の AO 入試、特にⅡ期がどのように進んでいくかをよく見て、そこから学んでいきたいと思います。

入学者選抜をめぐる 3 つの状況

話を続けていきたいと思います。大学は受け入れる学生数をあらかじめ決めています。毎年、予算という計画があって、受け入れる学生数はそれから決めているのだと思います。学生が計画のとおり入学しな

ければ、学校は成り立たず、赤字になっていけば資産を食いつぶすことになります。予算の計画から目標にする入学者数を決めることになります。あそして、アドミッション・ポリシーを策定していると思っています。

さて、ここで入学を希望する者が数の上で受入予定者の数よりも多いとして、次の 3 つの状態を想定したいと思います。1 つ目の状態は、志願者全員の高校時代の学業成績及び標準テストの値がわかっているものの、個々の大学が独自に志願者に対して学力検査をすることができない事情があるとしめます。さらに志願者の数が所定の入学者数を大きく上回っているとすると、受入予定数の 2 倍あたりのところであっても、学業成績及び標準テストによってはどの人が良いのかということを十分に識別できないということが考えられます。学業成績については、学校ごとに評価基準が異なります。学校間の差と言われることがありますが、ここでいう差は生徒たちの差ではなく、学校が使う尺度そのものが異なるから学校間に差が見られるということが考えられます。標準テストも、大量にテストを受ける人がいるとなると、上位の人の点数が非常に良くなることが考えられます。そうすると、高校の学業成績で受入予定者の 2 倍あたりでは、おおかたの志願者が在学高等学校のトップ 1%程度、標準テストの値で見てもほぼトップ集団という状況になるとしたら、高校の学業成績及び標準テストの値という 2 点以外の特徴に着目して入学してもらう者を決めるということはやりやすくなります。そうするほうが大学にとって良いということにもなります。高校の学業成績及び標準テストの値ではあまり変わらないのですから、学業以外のことに着目して入学者を決めるということができると思います。こういう状況はよくあること

ではないでしょうが、ありえないとはいえないでしょう。

これに対して、志願者全員に対して高校の教育課程に準拠した学習内容を試す試験をするという状態にあるとします。日本の現状にあわせてみると、共同で実施する部分と個別大学が実施する部分があることになります。この状態で次の2つの場合を考えることができますと思います。一つ目の場合では、試験の結果、受入予定数よりも相当多い志願者が、その大学で学ぶ条件を満たしているから、受け入れても支障がないと思われるとします。そうすると、大学で学ぶ条件を満たしているという観点では、誰を受け入れてもほぼ同じになります。ランダムサンプリングという言葉がありますが、ランダムに決めることができます。このとき、ランダムに決めるのではなく、志願者の試験結果以外の特徴に注目して決めることもできます。これに対して、二つ目の場合では、試験結果の点数の高い順から受験者を並べて受入予定数が満たされまで入学者とすると方法を用いることも考えられます。どちらの場合であっても、入学者はいずれも、この大学が期待する最低限のものを備えていることは担保されていることになります。

このうち前者の場合には、試験結果の点数が上がっても、一定の点数以上であれば点数が高くて入学につながらないことになります。そうすると、このような扱いでよいかが問われます。試験の結果以外の志願者の特徴という、このような特徴の多くは時間とお金をかけないとなかなか身につけません。試験のために勉強をするにしてもお金と時間が必要ですが、これが一番安上がりという人たちは世には相当数存在します。高等学校に在学している間に

課外で活動をする機会は選ばれた人たちに限られることも問われることになるでしょう。

後者の場合には、点数が上がったら入学できるチャンスが上がるということになりますから、試験に取り組むのに励みがあるというインセンティブが生じますが、点数のわずかの差で入学かそうでないかが決まります。これは、理不尽といえれば理不尽です。ある試験日の問題ではそういう結果であったけれども、翌日に別の問題を使って試験をすると、受験者が同じ順番に並ぶ保障はありません。しかし、こういう方法が日本では受け入れているということができます。現状は、この3つのシナリオのうち、最後のものに近いものになっているように思います。そうすると、努力したら報われるというイメージがもたれるように工夫しなければなりません。このようにするには、どういう試験問題を用意するかが大切であると考えられます。きちんとした問題を作るということが、試験をする限り非常に重要な課題になろうと思われれます。

東北大学のAO入試について

最後に、東北大学AO入試Ⅱ期とAO入試Ⅲ期との違いに注目したいと考えます。AO入試Ⅲ期では大学入試センター試験が必要とされていますが、AO入試Ⅱ期ではそうではありません。この違いはどれだけ重要なのでしょうか。どのような特徴をもった人たちからなる志願者が集まるようにするかが本当のところ、決め手ではないかと思えます。試験がなくても勉強するような人は必ずいます。大学入試センター試験を受けることが必要かと無関係に、個別の大学の学力検査に備えて勉強し続ける人がいます。このような人たちが志願者である限り、入学者の選びかたは3通り用意し、最後の試験では大学入試センター試験も個別

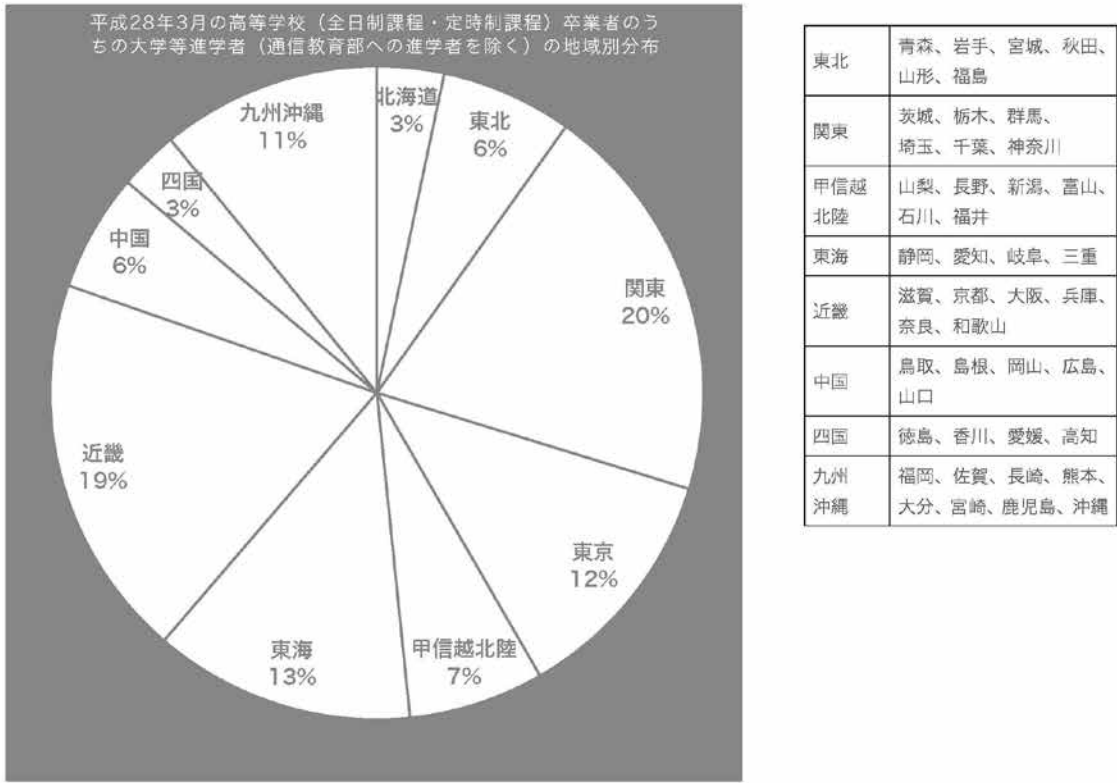
の学力検査を用いるけれども、その前の 2 つでは、大学入試センター試験を使ったり使わなかったりしても、このような志願者の集団から入学者を決めることができれば、入学者選抜全体としてはうまくいくであろうと考えられます。なかなか難しい課題ですが、東北大学がこれをどうこなされるのか、これを京都から見ていきたいと思っています。しかし、本当に難しいことは、どのように入学者を決めたとしても、志願者の大学生になってからのビジョンは測りようがないことです。面接をしても、このビジョンは測ることができません。高校の生徒は、大学に入る前には「どここの大学に入りたい」ということを目標にしていることでしょう。大学に入ってからにはこれに代わるビジョンが大事ですと、学生たちに考えてもらう場として大学が機能していかなければならないと思います。学力検査に備えて努力をすればそれが報われるという、インセンティブは大切であり必要です。インセンティブが働くように仕組みを用意するか、これは入学者選抜の課題であって、また大学入学後の課題です。これは、これからも人口が減っていく日本において非常に重要な課題だと考えております。早口で話してしまいまして申し訳ございませんでしたが、これで私の報告といたします。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

石上正敏特任教授(司会)：

木南先生、ありがとうございました。ご質問等につきましてはお手元の質問票をご利用ください。ここで短い休憩をはさみたいと思います。会場右前方にデジタル時計がありますが、14 時 25 分から再開をしたいと思います。ご協力をお願いいたします。

資料

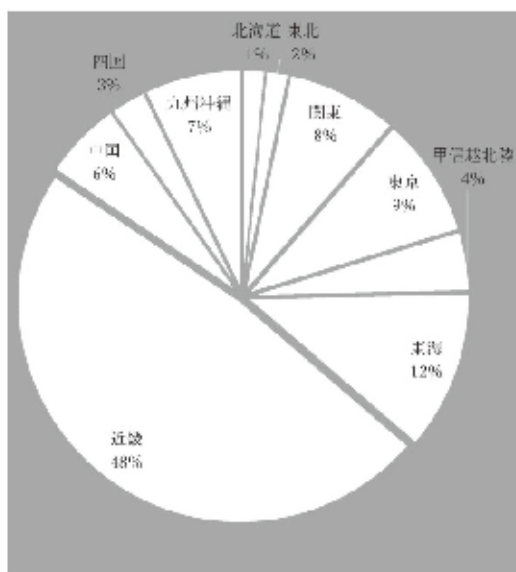


文部科学省平成 28 年度学校基本調査、高等学校（全日制・定時制）卒業後の状況により作成

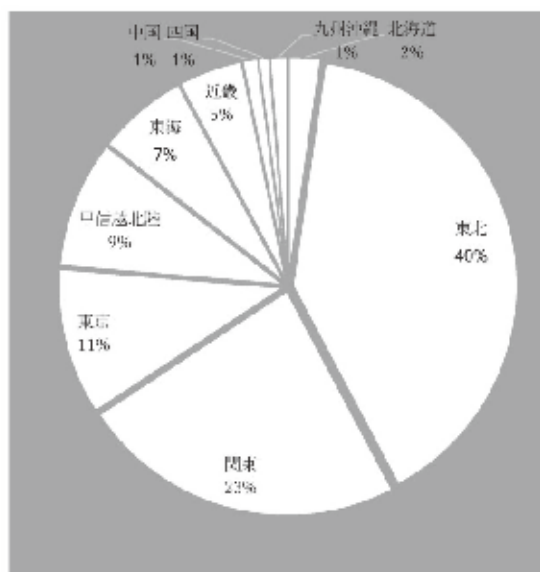


文部省・文部科学省『学校基本調査』により作成

出願者が在籍していた高等学校の所在地



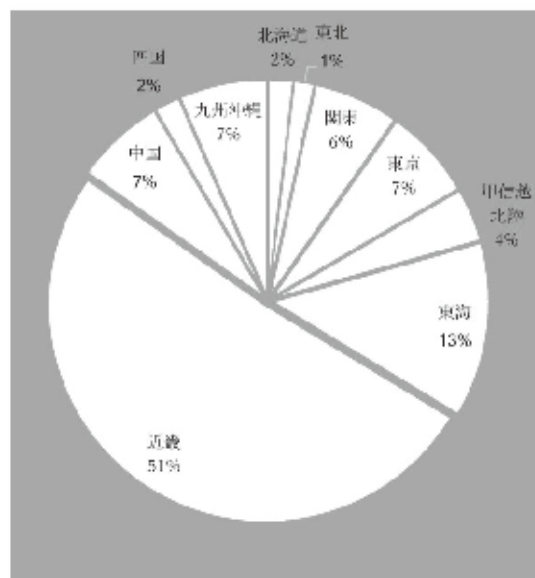
平成28年度京都大学
一般入試出願者



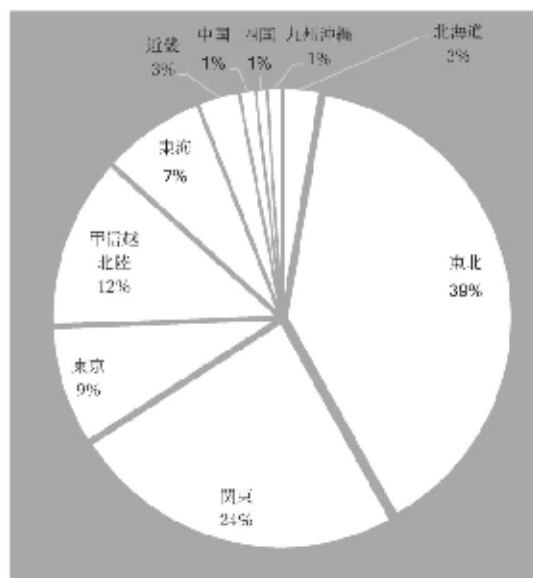
平成28年度東北大学
入試出願者

2017年度東北大学案内の19ページ、京都大学大学案内2017の82ページにより作成

入学者が卒業した高等学校の所在地



平成28年度京都大学
一般入試入学者



平成28年度東北大学
入学者

2017年度東北大学案内の19ページ、京都大学大学案内2017の82ページにより作成

現状報告 2：新しい入試制度に向けた高校の取組

秋田県立湯沢高等学校 校長
阿部 淳 氏

〔講師紹介〕

石上正敏特任教授(司会)：

それでは、予定の時間になりました。現状報告 2 に入ります。「新しい入試制度に向けた高校の取組」。秋田県立湯沢高等学校校長、阿部淳先生、よろしくお願いいたします。

阿部淳校長：

皆さんこんにちは。秋田県の湯沢高校の阿部淳と申します。よろしくお願いいたします。今日は「新しい入試制度に向けた高校の取組」ということで、紹介するつもりで張り切ろうと思ったのですが、自分の学校で何もしていないのにどうしようかと思ひまして、私の経歴を見ていただければわかりいただけるのですが、元々私は岩手県の高校教員として採用になりまして、岩手県のほうで 50 歳まで働いていたのですが、その後秋田県のほうに転勤になりまして、10 年目になります。そこで、岩手と秋田で働いていたという自分の経歴を生かそうと思ひまして、この学力評価テストに対する岩手と秋田の進学校の取組の状況についてまとめることで、皆さんに何か紹介できるものがないかと思っております。

アンケート内容と対象校

せっかくの機会ですから、東北大学の前期試験、個別試験に関して、高校の先生はどのような意見を持っているかというのもまとめようと思ひまして、アンケートをお願いしました。年度末の 2 月から 3 月に自分の個人的な知り合いを頼って、アンケートを 10 校ずつお願いして回答を得ています。それについて整理をして、皆さんと情報を共有しながら、さらにご意見、ご助言などいただけたらと思います。校長宛に



文書を書くとき、大体校長がそれを下のほうに命令のような形で書かせるので、割と型にはまったような答えが得られる可能性がありましたので、そうではなくて、資料の 2 ページ目のところにありますように、回答者は校長ではない人たちです。副校長とか教頭とか教務主任、進路指導主事、それから様々な先生方の個人の意見が集まっておりますので、学校を代表するというよりも、学校の中での集計だというふうにとらえております。

「学力評価テスト」に対する取組状況に関するアンケート結果

学力評価テストに関しましては、どのような対策を取っていますかということで、話題になりましたかというふうにアンケートを取ったわけですが、20 校の中で 1 つのグループとしては、学校全体の話題になっていると、管理職からの話題提供とか、対応などの指示があったのは、20 校中 6 校です。この数字を多いと見るか少ないと見るか。岩手と秋田の中の進学校です。その中で学校全体の話題になっているのが 6 校ということです。

それから、個人的あるいは文章的な話題になっているのは半分の 10 校。あと、話題としては出ていませんというのが 4 校でした。ですか

ら、いわゆる受け止め方としては、学校全体のものになっていないというふうになっているのですが、実際は、具体的なものは何も見えていない状況であるので動きようがないというのが本音ではないかと思いました。ただ、その中でも、箱の中の上のところには、学校運営委員会から新テストや新教育課程を踏まえた学校運営や、カリキュラムの見直しの提案が出され、これを受け、検討委員会を立ち上げ平成 30 年度からスタートできるように検討中であるというような積極的な学校の意見も寄せられております。

もし何かあったらお書きくださいという 2 つ目のアンケートについては、結局、上の内容を受けると、特にありませんというのが 20 校中 13 校でした。ですからこれも対応が遅れているとはいえないのではないかと思います。一方で、明確な取組例としては、いわゆる教科での取組、進路指導での取組の中で、学校で今行われていることを、学力評価テストの中に当てはめていけるのではないかという意見もありました。

今の状況で、学力評価テストに対してどういうふうに対応できるかお考えですかとアンケートを取ったところ、十分対応できるのではないかと、それから従来の対応で心配ない、教職員の指導力で大丈夫だといったような意見を寄せられた学校では、日常的にすでに生徒の記述力等を計画的に行っているという自負が感じられました。さらに授業改善や考查問題、実力テストなどで技術力を高める工夫を行うという回答はあったのですが、資料の 3 ページ目、不安な点としては生徒の記述力の低下というのがありました。これは高校の先生方がいらしていればお分かりかと思いますが、何となく生徒の記述力が下がっているのではないかというような実感を受けて、やはりそれに対しての不安ということがありました。

それから考える力とか表現力、あるいは基礎知識が足りないのではないかと、それをどうし

ていこうかという不安というものも述べられています。さらには、私が言っているのではなく皆さんが仰っているのですが、どうしても教職員の力量の差があるということは様々な方が実感されているのではないかと思います。やはり非常に意識が低いなどということを挙げている方もいらっしゃいます。この学力評価テストというのが導入されることによって、さらに学校が多忙になるのではないかと危惧しているのは当然ではないかと思います。

さらに、このテスト自体への疑問というのは当然寄せられておりまして、[4](#)の上のあたりに、記述力が必要な能力であることは理解できるが、全国一斉のテストとして実施することにはやはり疑問を感じる。それから採点や処理日程など大丈夫なのかということはありませんが、これはやると言っているのだからきっとやるのでしょう、大丈夫なのでしょうというふうにしかな見えませんでした。それと、具体的対策を取るとすればどのようなことが考えられますかということでは、ひとつは授業です。授業においては演習型ドリル型のトレーニングを減らして考える時間を確保するとか、思考や論述など、生徒の様々な能力を伸ばせる授業を教員個々が行えるかどうか重要ではないかとか、グループワークなど生徒同士が話し合うような学びを取り入れるとか、低学年から一層記述を念頭にするとか、3 年間の見通しとか、アクティブ・ラーニングとかそういったもの、あるいは総合的な学習の時間、いわゆる教科外の活動においてそういった時間を使うほうがいいのではないかというようなものがありました。ただ、私自身は、記述力を高めるためには、教科書の基礎事項の十分な理解が必要である、身につけさせる内容の精査が今まで以上に重要となってくる、これはある学校の回答にあったものですが、もう一回、実はこういういろいろな入試形態が生まれても、我々はやはり教科書に戻るべきではないかというような感じを持ちました。

それから考查や実力テストなどの記述式の導

入ということになります。ただその記述式を、例えば自分たちの考査や実力テストなどに入れたとしても、果たしてその内容が深まるのかと、深い内容を書くことができるのかというような根本的な不安を持っているということは、よくわかります。この学力評価テストに関する私の考察ですけれども、高校の先生方がかなりいると思いますが、高校では対応できるというのが私の考えです。それはなぜかという、高校の教師集団というのは、生徒の進路達成のためなら何でもするからです。高校教師の力を最大限に生かす努力を各校ではすると思います。それにはまず校内の意識をもう一度統一し直すということが大事なのではないかと。同僚性という言葉はよく言われますが、先ほどの中でもあったように、やはり意識の違いというのがそのまま生徒の指導の差に表れてしまう、これが一番大きな問題です。ですからどういうふうに意識を共通に持って行けるかが大事ではないかと思っています。ただ、高校で対応ができると言っているのと進路で実績を上げるというのは別です。対応しても駄目でしたというのは対応したことになるのかどうかというような検証をどういうふうにやっていくのかということが、大事になってくるのではないかと思います。

特に、東北のほうは公立の高校が大半ですので、申し訳ないのですが中学校からの継続的な指導というのが果たして期待できるのかということを考えれば、やはり高校の中でやっていくしかないでしょう。私たちが中学校の方に、記述力についてお願いしますという機会があるかどうかというのは、私は非常に難しいと思います。あと、ひとつだけ言えるとすれば、採点、本当に記述で全員が正確に弁別してくれるのかということです。読売新聞には民間に委託などと書いてありましたが、読まれましたか。問題はセンターが作って採点は民間。高校入試の採点に携わった先生方もいると思いますが、本当に大丈夫なの？と、いわゆる弁別性を取れる人たちをそんなに何万人も確保できるのか？というの

は非常に疑問です。

特に、岩手や秋田のトップ高で働いたことはあるのですが、生徒はそれっぽい答えを書きます。一見すると丸をつけたくなるような解答を書くわけです。それと、本当に理解して、分かっている解答を弁別してできるのかということに対して、どれほど専門的な方が採点に携わるのかというのは、私は疑問ですけれども、やると言っているのだからやるのでしょう。そういうふうに思うしかありません。

東北大学の個別試験について

あと、せっかくですから東北大学の個別試験のことについてもふれます。先ほど倉元先生からお話がありまして、高校教師側と合致するかと思ったのですが、やはり東北大学からのメッセージとして受け止めています。大丈夫です。東北大学の入試問題というのは、東北大学にとって欲しい生徒に対するメッセージだけではなくて、我々高校教師が高校の現場で指導をするうえでの指針になっているという意図がありますので、ぜひ今のような形を堅持していただければと思います。これはエールでもあります。よく練られた良問という評価が非常に高かったです。ですから東北大学の入試問題、前期試験から私たちは自分たちの授業を構成していくと、その中に授業の展開のヒントが得られる。そういうふうな内容であってほしいと思いました。

ただ、最後のところに高校側からの要望というのを書いたのですが、大体、高校の教員の言うことは聞かないのではと思うのですが、とりあえずお話をいたします。ひとつは採点の透明性です。これは東北大学入試説明会などの場面がありますが、私も何年か前に行ったことがあって、やはり採点について公表してくれないかと言ったら、こういうふうな説明会をしているので不要ですという、極めてつまらない回答を寄せていただきまして、東北大学が望む生徒を取りたいのであれば、ぜひこういうふうな点においてもう少し慎重に解答できるような生徒

をいかがでしょうかというようなことを出していただければと思いました。

いくつかの教科においては、こんな難しい問題、できる生徒がいるのかと、作っても無駄ではないかという意見も寄せられています。恐らく誰も手をつけない問題を作って出して何をするの？と、何かしているのだろうとは思いますが、それならやはりどの程度の生徒がこれに食らいついてきているのかということを示すことによって、我々高校教師に対して、あるいは生徒に対して、指針を示していただければと思いました。それから、設問によっては少し解答時に誤解を与える表現、指示があるのではないかと、自分たちは分かって作っているけれども、それを理解できない生徒は駄目なのだというのはちょっといかがかなという意見もありましたので、今のうちに、今この場でお話をさせていただきました。個別の意見に関しましては、大量な枚数がありましたので、読んでいただければと思います。

基本的には、先ほど申したとおり、教師に対してのメッセージであり、生徒に対してのメッセージでありますけれども、東北大学の場合は、基礎・基本をしっかりとやって、私が教師として働いていた時の東北大学というのは、やはり生徒が努力して入れる大学だという、それを自分たちの支えにして生徒たちと一緒に勉強してきたという思いがありますので、そういった点に関しまして、ぜひ堅持していただければと思います。雑な発言ですけれども、読めば分かっていたかというものであります。どうもありがとうございました。

(拍手)

石上正敏特任教授(司会)：

阿部先生、どうもありがとうございました。ご質問等につきましては、お手元の質問票をご利用ください。

第 26 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える〔14〕）
〔現状報告 2〕

新しい入試制度に向けた高校の取組

秋田県立湯沢高等学校
校長 阿部 淳

1 はじめに

平成 29 年度の中学 3 年生が高校 3 年生として大学受験を迎える平成 32 年度（2020 年度）入試〔＊入学試験は明けて平成 33 年（2021 年）〕から、大学入試センター試験に代わり、仮称ですが『大学入学希望者学力評価テスト』（以下『学力評価テスト』と呼ぶ）を基軸とした新制度が始動します。文部科学省からは、平成 29 年度初めに『学力評価テスト』の実施方針と問題例が示されることになっています。その中では、マーク式問題に加え、国語では 80 字程度の短文記述式解答や数学での記述式解答を課すということが言われています。また、国立大学協会は、国立大学の 2 次試験で全受験生に長文の記述式問題を課す方針をまとめ、200 ～ 300 字程度の長文で答える記述式問題が想定されているということも報道されています。

そこで、今回の『東北大学高等教育フォーラム』において、『学力評価テスト』に対する高校の取組の現状を報告するとともに、『東北大学の個別試験問題（前期）』に関して、高校側はどのような意見をもっているかを紹介し、これから高校が取るべき方策について、多方面からご助言をいただきたいと考えました。

2 アンケート内容と対象校

（1） アンケート内容

アンケート項目は次の通りで、記述式で行いました。

1 『学力評価テスト』に対する取組状況に関して

- （1） 今年度末の反省と来年度へ向けた対策会議等で『学力評価テスト』〔＊あるいは『新テスト』〕に対する取組が話題になりましたか。自校の現状をお書きください。
- （2） すでに決まった具体的な取組や予定などがありましたら、お書きください。
- （3） 自校の生徒の記述力や教職員の指導体制などを勘案した時、『学力評価テスト』の実施に対してどのようにお考えですか、お書きください。
- （4） もし、具体的対策を取るとすれば、どのようなことが考えられますか、お書きください。

2 『東北大学の個別試験問題（前期）』に関して

今年度（H29）の個別試験問題（前期）に関する意見、感想、今後の個別試験問題に対する要望、意見をお書きください。各教科ごとに回答をいただければ幸いですので自校の教科担当者にご依頼をお願いします。もちろん、すべての教科・科目に回答が寄せられなくともかまいません。

【 国語 英語 数学〔文系＋看護学〕〔理系（看護学を除く）〕
物理 化学 生物 地学 ＊該当教科・科目に○を付けてください】

- （1） 今年度（H29）の 2 次試験問題に関する意見、感想等
- （2） 今後の 2 次試験問題に関する要望、意見等

(2) 回答校

回答の協力をお願いしたのは、岩手県と秋田県の公立高等学校各10校で、回答者は、副校長、教頭、教務主任、進路指導主事、各教科担当教諭となっています。

岩手県（10校）

盛岡第一高校 盛岡第三高校 盛岡北高校 花巻北高校 黒沢尻北高校
水沢高校 一関第一高校 遠野高校 宮古高校 釜石高校

秋田県（10校）

大館鳳鳴高校 能代高校 秋田高校 秋田南高校 秋田中央高校
本荘高校 角館高校 大曲高校 横手高校 湯沢高校

3 「『学力評価テスト』に対する取組状況に関して」への回答結果について

(1) 「今年度末の反省と来年度へ向けた対策会議等で『学力評価テスト』〔*あるいは『新テスト』〕に対する取組が話題になりましたか。自校の現状をお書きください」について

回答は、各校一人の意見に留まらず、複数人から寄せられた高校もありましたが、高校ごとにまとめ、次のように分けました。1つのグループは「『学力評価テスト』が学校全体の話題になっている高校」で、「管理職からの話題提供や対応などの指示がある」「職員会議などで取り上げられている」と回答した高校が20校中6校でした。もう一つのグループは「『学力評価テスト』が学校全体の話題になっていない高校」で、「教科内、分掌内（主に進路指導）、職員室の中では話題になっているが全体のものになっていない」と回答した高校が10校、そして「話題になっていない」と回答した高校が4校でした。

個人では『学力評価テスト』に関心をもっていても、全体のものになるまでには至っていないようです。自分の所属する『教科』や『分掌』では話題にしていると回答しても、他教科や他分掌で話し合われていることには言及していません。また、「『学力評価テスト』の具体的なスケジュールが公表されてから、全体で協議する予定」という回答は、多くの高校の考えを代弁していると感じました。その中で、「学校運営委員会から、新テストや新教育課程を踏まえた学校運営やカリキュラムの見直しの提案が出され、これを受け、検討委員会を立ち上げ、平成30年度からスタートできるよう内容を検討中である」という高校もありました。

(2) 「すでに決まった具体的な取組や予定などがありましたら、お書きください」について

これに対する回答で最も多いのは「特になし」の13校です。上記(1)で、『学力評価テスト』の具体像が見えず、学校全体のものになっていない現状の回答がありましたので、理解できる結果です。

一方、取組例としては、教科での取組〔国語、数学、英語〕、進路指導での取組、『総合的な学習の時間』や『探究活動』、学校の研究活動〔SGH、SSH〕と連動した取組のほか、「まずは情報収集と校内向け広報活動」「新たな適性テストを実施する予定」「アクティブラーニングや情報端末の活用」「教育課程の検討」などが上げられています。

(3) 「自校の生徒の記述力や教職員の指導体制などを勘案した時、『学力評価テスト』の実施に対してどのようにお考えですか、お書きください」について

「自校の指導で十分対応できる」「従来の指導で心配ない」「教職員の指導力で大丈夫」といった意見の学校では、生徒の記述力を養成する指導を日常的、あるいは計画的に行っており、その指導が教職員の中で定着しているという自負が感じられます。また、「国語科、英語科以外にも、地歴公民科で、平素の授業や添削において記述答案作りの指導が行われており、当該教科の教員はOJTによって指導力の向上に努めているほか、各種研修に積極的に参加することで、さらに指導力を自己養成しているため、指導に関しては不安はない」という回答もあり、授業改善や考查問題・実力テストなどで記述力を高めるための工夫を行うことで対応できるということでした。

一方、不安な点として、「生徒の記述力の低下」「生徒が自ら考える力、考えを表現する力、自ら考えるために必要な基礎知識の醸成」を課題として上げる学校も多くあります。教職員の指導体制として、『記述力』や『学力評価テスト』に対する意識の差、温度差、低さ」「教職員間の連携不足あるいは連携時間の不足」「さらなる多忙化」「指導体制の確立ができるのか」が上げられました。もちろん、『学力評価テスト』の全容が見えていない状況なので、「すべてに不安である」という回答も複数ありました。また、「高校だけでは指導は難しい。すべてを変えるには時間がかかる。多様な生徒すべてに対応するのは負担も大きく、『学力評価テスト』だけに向けて対応するのはいかがか」「生徒の学力差が非常に大きく、東京大学や東北大学志望から就職・公務員希望まで、進路は多様である。一部の方向性だけを見た急激な現状変更は、生徒の混乱を招くだけである」といった意見もあります。

さらに、『学力評価テスト』自体への疑問もあり、「記述力が必要な能力であることは理解できるが、全国一斉のテストとして実施することに『？』を感じる」「教職員の指導体制は十分組めるとは思うが、採点や処理日程など、文科省や入試センターの方がこちらの満足できるような対応ができるかが疑問である」といった回答も寄せられています。

(4) 「もし、具体的対策をとるとすれば、どのようなことが考えられますか、お書きください」について

『記述力』を意識した『授業（改善）』『考查問題』『教職員研修』『情報収集』が上げられています。

『授業』においては、「演習型ドリル型のトレーニングを減らし、考える時間を確保した授業を展開する」「思考や論述など、生徒の様々な能力を伸ばせる授業を教員個々が行えるかどうか重要ではないか」「グループワークなど、生徒同士が話し合うような学びを効果的に取り入れる授業スタイルの改革」「低学年からより一層記述を念頭にした指導をするしかない」「3年間を通して、『言語活動の充実』に対応する必要がある。AL（アクティブ・ラーニング）の充実に向けて学校の指導体制を整えていくことが急務である」といった意見がありました。また、『総合的な学習の時間』を、今以上に『考える』『書く』『調べる』など多角的な活動のできるものとして計画する」として、教科授業以外の時間の活用も提言されました。私自身は、「記述力を高めるためには、実は教科書の基礎事項の十分な理解が必要である。身に付けさせる内容の精選が今まで以上に重要となる」という意見に共感しました。

『定期考查』『実力テストなど』においては、「『記述式』に対応する問題を意識し、作成していく」ということになりませんが、『記述力』をどう試すのかイメージが持てないので対策の立てようがない」という意見もありました。

『教職員研修』を通して、『論文』の読み書き指導を念頭に、全教科一致して指導にあたる。大学は、論文の読み書きをする場であるから、当たり前のことを当たり前に進める。新テストを新傾向と捉えず、当たり前のことと納まると考える」「予備校や進学塾の講師を招きノウハウを取り入れる」「教科内での協力体制を早期に形成する」「教職員の指導に対する意識を変える」「指導力のある教員による実践演習を繰り返す」といった意見に加

え、「先進校での取組を参考にする」といった『情報収集』や「教育課程の変更」「対策委員会の立ち上げ」を上げる学校もありました。しかし、「記述に重点を置いて、内容が浅く今後多くの対策が必要である」という不安は絶えずつきまとうのではないのでしょうか。それを克服するためには、「授業改善の中で、『研修→実施→改善』というように、確実に改善できるパターンを作る」とか「授業で記述させる機会を増やすとともに、（生徒の）相互評価の場面を設定するなどして、よりわかりやすい記述内容にブラッシュアップさせるための授業研修を国語科を中心として学校全体で行う」といった具体策は参考になります。

（５） 考察

『学力評価テスト』の明確な姿が示される前ですが、これまでの高校での学習指導に大きな影響を与える大学入試改革になるとしても、高校側では対応できると考えます。なぜなら、教職員集団は生徒の進路達成のために努力することを惜しまず、対策を講ずる時間を確保する方向に進むからです。この場合、まず、校内での「意識の共有」から始めることになります。各校が生徒の実態に合わせながら、「今できること、できないこと」の把握〔現状分析〕、「これから（あるいは最終的に）できなければならないこと」の把握〔目標設定〕、「できるようになるための方法と実施期間」の把握〔指導計画〕、そして「実践と評価と改善」へと進んでいきます。時間が少し経てば『学力評価テスト』対策先進校の実践例が外部からもたらされるかもしれません。さらに、『対応マニュアル』や『出版物』などが出てくるかもしれません。

しかし、「高校で対応ができる」と「進学で成果を収める」は別物です。「進路志望が多様な高校〔※『学力評価テスト』の受験を必要としない生徒もいる高校〕での指導の難しさ」や「教員の授業力、問題作成力と採点力の差」などは課題となるでしょう。大学入試に関することですから、高校入学後からの指導ということになります。近頃、「教科書を読んで理解できない生徒が増えているのではないか」と言われる中で、進学を志望する生徒に対する受験指導において、地域間でさらに格差が拡大するということも想像できます。「教職員の仕事量は増え、さらに多忙化につながる懸念」もアンケートの回答にありました。

もう一つ、「果たして採点は大丈夫か」という心配があります。高校入試の採点に実際に携わって多くの苦勞を感じてきているからでしょうが、大学入試では、高校入試とは比べものにならない大人数の答案を、弁別性をもって均質に評価〔採点〕できる人材を本当に一定数確保できるのか、その採点者の資質は「誰によって、いつ、どのように」確認されるのかということです。「１点刻みの入試」が批判されていますが、結果は「１点刻み」にならないのでしょうか。『学力評価テスト』の目玉となる『記述力』の評価が、「『マニュアル化された型通りの解答』を書ける力」の評価にならないことを切望します。

４ 「東北大学の個別試験問題（前期）に関して」への回答結果について

- （１） 「今年度（H29）の２次試験問題に関する意見、感想等」について

（２） 「今後の２次試験問題に関する要望、意見等」について

今年度（平成 29 年度）の東北大学の個別試験（前期）に関する意見もお願いしました。各校で非常に熱心な分析が行われ、まとめたものは膨大な量となりましたので、ここでは、各教科・科目において共通する意見を紹介します。

（１） 高校側からの意見

まず、高校側では個別試験問題を東北大学からのメッセージと受けとめています。東北大学が求める生徒の教科学力を示す目標として、高い評価があるということです。東北大学を受験する生徒にとって「入学できるために日常の学習で深めるべき内容」なのです。

生徒にとっての学習目標は、教員にとっての指導目標〔指標〕でもあります。教科の『基礎基本』をしっかりふまえ、『知識』に基き、日頃の授業において深めるべき『読解力』『思考力』『想像力』『実験過程と結果』などをまとめる『記述力』『表現力』が問われているのです。東北大学の個別試験はまさに「よく練られた『良問』」という評価です。「今後も是非この出題を堅持してほしい」という意見が圧倒的であり、すべての関係者が頷くところ です。

（２） 高校側からの要望

高校側から要望する機会があるのかわかりませんが、少し紹介します。

まず、『採点の透明性』という視点です。『採点基準』『正答率』を公表することで、東北大学が求める生徒の答案がより良くなると思います。さらに、いくつかの設問で「指示がわかりにくい」という意見がありました。もちろん、毎年反省をして、作題に生かしていると思いますが、『設問の妥当性』などを外部に聞く機会はあるのでしょうか。また、「せっかく作ったのに、あまりに難しすぎて、誰も手をつけられなかったのではないか」という『難易度の妥当性』もあるようです。さらに、「すべての問題に答えられないので、部分点を狙う」とした『解答時間の妥当性』に対する意見もありました。

（３） 考察

高校教師は大学入試問題に対して、『教師の視点』と『生徒の視点』をもって解答し、分析します。ワクワク感をもって教師としての自分の力を試しながら、「我が校の生徒は、ここで迷うだろうなあ」とか「ここで勘違いしなければいいなあ」とか「これはできないなあ」という生徒の解答過程を思い、今後の進学指導や授業指導につなげます。東北大学の個別試験はまさに生徒に提示すべきモデルです。「教科書をしっかりやっていればできる」「基礎基本をしっかり身に付けていれば解ける」「授業や問題演習で何度も繰り返した内容である」「日常の授業で十分対応できる」という意見が寄せられるのも理解できます。

６ 結びに

今回、東北大学フォーラムで発表する機会を与えていただき、『学力評価テスト』と『東北大学の個別試験』について、岩手県と秋田県の２０校の皆さんから意見を集めて、整理することができました。また、ここにお集まりの皆さんからご意見やご助言をいただけることを幸いに思います。今後の進学指導に大いに役立てたいと思っています。

お忙しい中、アンケート回答に協力していただきました２０校の皆さん、そして、お集まりの皆さんに感謝申し上げます。

現状報告 3：多様化する大学入試と高校現場

——主に国語教師の立場から——

福岡大学附属大濠中学校・高等学校 副校長

清水 和弘 氏

〔講師紹介〕

石上正敏特任教授(司会)：

引き続きまして、福岡大学附属大濠中学校・高等学校の副校長、清水和弘先生から、現状報告 3 として「多様化する大学入試と高校現場—主に国語教師の立場から—」ということをお願いいたします。なお、配布資料がありません。清水先生、よろしくお願いいたします。

清水和弘副校長：

こんにちは。福岡大学附属大濠中学校・高等学校の清水と申します。よろしくお願いいたします。今日はこういう発言の場をいただきまして、東北大学の関係各位に心から感謝申し上げます。ありがとうございます。せっかくなのですが、大した話ができないかもしれませんが、通り一遍な話になるかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

福岡大学附属大濠中学校・高等学校について

本校はこういう建物でして、これは福岡市の中央区にある大濠公園です。環境としてはNHKの放送会館、美術館、武道館、大濠公園、气象台という、環境としては非常に良いところにあります。7年前に全面的に建て替えて、こういう校舎になっています。もう少し詳しくお話をしますと、福岡市の中央区にありまして、全日制普通科で中高一貫コース併設型、中学校は各学年4クラスずつあります。3学年で500名ほどです。高等学校にスーパー進学コースと進学コースがあり、中高合わせると全部で2,340～2,350名いる、大変大きな規模の学校です。7年前に男女共学にしまして、今年の春、すべてのコ



ースで男女共学生が卒業したということになります。最近では、春に野球、甲子園で引き分け再試合を戦いまして、1人のピッチャーが投げたということで話題になった学校です。

甲子園の話をする大体拍手をいただきますのですが、(拍手)ありがとうございます。強要したわけではありません、ぜひその辺は付度していただければと思います。付度を強要するという変な話ですが。

それで、進学の方ですが、今年の春の実績です。北海道から東北も今年1名行きました。九州大学49名、そして九州管内の国公立の大学に、全国各地に散らばる状況があります。私大のほうも、関東にももちろんたくさん出ていっていますし、関西のほうも相当お世話になっているというところで、幅広く全国の大学を受けるという状況があります。

それから、ここ何年かは特に特徴なのですが、医歯薬系に進学する生徒が非常に多くて、今年は総計で49名が医学部医学科に、そのうち九州大学の医学部には8名合格もしましたけれども、去年、薬学部は78名でしたか、本年度は75名で、特徴としては相当医歯薬系の進学者が急増しているという状況があると思います。

3 年次の文理型国語の授業の主な進度展開

少し話は変わりますが、高校3年生だけの話になります。国語の授業の内容をどういうふうにしているのかということです。1年生の話は長くなりますので端折りますが、特に我々が考えているのは、理系と文系とで1年間を通してマークの演習をいつから入れるかという問題です。もちろんこれは全部マークをやっているだけではないのですが、主にマーク型の演習を組んでいる状況があります。そして文系のほうは流石にこういうマークばかりというわけにはいきません。これはもちろん国公立の個別試験、要するに二次試験の関係で、理系のほうは、医学部などを省くと記述の問題には国語が入ってきませんので、センターを中心に対策を練るというやり方をとっています。そしてこの小論文の話はまたあとで少ししますが、このように大体、文系・理系というふうに大きく流れがくめる、そしてセンターに対するマークの対応ができるのは、ここをやっているのです。放課後の演習で、志望校別の、講座別の補習です。すべて希望制にしていまして、しかも担当教師を発表するのです。

例えば東北大学の文系の国語は清水というふうに誰が講義をするのかということまでを確認して発表する。そうすると生徒は、清水ならやめておこうとか、選択権が彼らにある。それを1週間に一度、1時間組んでいって、1時間は70分なのですが、実質大体皆さん90分とか100分とか延長延長でやられています。この個別の対応ができるので文系にもこういうマークの演習を組むことができるし、医学部や東大や京大などの理系のほうに国語があるものに対してもこれだけで授業中は主にマークの演習ができるようなシステムを組んでいます。

問題はこの小論文です。この7月の頭にこの小論文などが入ってくるのは主に私大の推薦です。そして志望校の志願理由書みたいな非常に簡単な小論文が多いのですが、中には

AO入試などで夏休みからの課題として、1冊読んでレポートを出しなさいなどという重いものも含まれています。その状況があるのですが、当然この文系のこの辺のところになると、国立系の、先ほど東北大のAO入試等話題になっていますが、この辺のところに対象がくるわけです。これがどんどん規模が大きくなってきている。後期の入試を廃止して、そのぶんをAO入試に持っていつているという大学が増えてきたからですが、その影響で国語がどんどん重くなってきている。そうするといくつかの問題が出てきます。

国語の受験指導における近年の傾向

整理をしておきますが、国語の指導における近年の傾向として、マーク問題を始める時期が早くなった。これは生徒が早くしてくれということもあるのです。そして、業者のマークの試験も、2年生の終わりぐらいから入ってきているわけで、そういうこともあって、早くマークの形式を生徒がしたがるということもあります。

もうひとつは分量が非常に大きい。本文も長く選択肢が3行もあるようなものがたくさん出てきました。そうするとその80分の中で読み果せるスピードというものを持っておかないと、なかなかすべて消化できなくなっているということもあって、スピードを早くつけさせたいということになります。結果的には、マークの問題を演習する時間が相当長くなってきています。ところが、結果としてスピードはつくのだけれども、どうしても本文を読み飛ばす、正確に読もうとしない、という傾向が出てくる。そして、早くマークの答えの攻略法というか、どこをどう見ると誤答がわかるのかという質問が飛び交うようになる。先生たちも、この設問のこういうところ、例えば選択肢の中に、絶対とかという言葉が入っているやつははねろ、みたいな教え方をし始める。本文の問題よりも、テクニックの問題になってしまっている。そういう傾

向が出てくる。

他に本文全体の趣旨問題から解こうとするのです。大体国語の問題というのは評論とか6問の中に全体の内容を問うた問題があるのですが、それを先にやろうとする。それをやることによって本文の全体の内容が先に理解できるからです。こういう裏技といいますかテクニックを要求するような状況になってきている。読解という意味では、非常に、懸念をしています。そのこともありまして、先ほど言いました放課後の志望校別の講座、これは個別試験の対応ということで行くのですけれどもやっています。

AO・推薦入試における学力テスト導入の「功罪」

それから先ほどの推薦、AO入試が重くなってきたという話の中で、少しお話しをしたいと思います。実は、功罪とつけて、「功」はいいのですが「罪」とつけるのにちょっと罪悪感がありました。怒られるかもしれないと思って、長短にして逃げておこうかと思ったのですが、気を悪くなさる方がいらっしゃったら申し訳ないです。少し口が滑ったということにして勘弁していただきたいのですが、「功」のほうは、学力テストをなくして安易に進学している学生生徒が多いということ。これは現場の先生は実は相当前から気になってたわけです。ですからその意味で今回の大学入試の改革等も含めて、学力の保証といえますか、これがやはり高大接続の非常に大きいポイントであったわけです。ですからその意味では、小論文などをAO入試に課されることの意味というのは大変あると思います。

もうひとつは、きちんとした本文があるような小論文であれば、こうした読解力というのは非常に身につく、論理的に文章を読むという能力が非常に身につくという意味では、これは大変な効力があると。ただ、逆に小論文の分量が多過ぎるし重過ぎる。先ほど言い

ました、一冊夏休みに読んでそのレポートを書かせるみたいな、あるいは高校から入ってきてずっと積み重ねてきたものをすべてレポートにしてまとめよ、とか、要するに夏休みを、棒に振るといって少し言葉が酷いかもしれませんが、本格的に受験の体勢に入った段階で小論文のことしかなくなるような生徒というのは必ずいるのです。この子たちが、AO入試が駄目だった場合の修正はもう効かないです。そういう意味では大変重い小論文はいかなるものかと。

それから先ほど阿部先生もおっしゃっていましたが、採点基準が定かではないものというのは非常にあります。これは東北大学のAO入試のことを意識しているわけではないのですが、知識だけではなく、多様な能力を図りたいといってAO入試をなさっているのに、なぜセンター試験を課するのか。宙ぶらりんな形でセンター試験が終わるまで待っているわけです、生徒は。その感覚がどうもわからないと言いますか、子どもはともそこが腑に落ちない、ある意味ではひどく言うと犠牲になっている可能性、危険性がある。もう少し考えられたらいかにかというふうに考えています。

所謂「小論文」の傾向

小論文の話、大きく分けるとテーマ型と課題型と、最近は資料読解型がどんどん出てきました。東大のAO入試の問題も、木南先生のところの京都大学の特色入試もそうですけれども、こうした資料読解型というのが、私は基本的にはこの形を非常に、好んでいって言うと変な言い方になりますけれども、あるべきだろうと思っています。

採点基準が分からないのはこういうことです。「○○についてあなたの考えを述べなさい」。私がいつもやり玉にあげているのはこの辺の地区の大学ではないので言いますが、とある大学で、あなたの青春についての考えを述べなさい、と。どんな採点をするの

でしょう。青春について、要するに何か書けばいいという、作文なのですね。そうした採点基準の問題というのは非常に多いということです。それから今度は本文を読んで筆者の考えに対してあなたの考えを述べよという、その、筆者の考えに対してというところが問題で、筆者の考えを否定するにはそれだけの材料は、高校生にはないですよ。まともな論文であるならばです。これを言われると、なかなか一方的には、否定できかねるということなのです。

そしてもうひとつ流れとしては、こういう資料読解型の問題になるだろうと、資料をいくつか、この資料がグラフであったり様々な資料です。要するに非連続の状況で論文を書かせるという、こういうことが多いだろうと思うのです。ただ、やはりこれも分量の問題がある。長崎大学の多文化の資料が大変重いわけです。読むのも大変ですが、書くのも大変で、こういう重いものはともかくとして、そういう方向に、流れとしては行くだろうと思います。そしてそうなるとひとつ懸念されるのが、合科目あるいは科目横断型の論述問題が出てくる危険性というか可能性がある。日本文、英文、グラフ、数値、科学的資料とかいうものを合わせた形で。そうすると一体誰が指導をするのか。高等学校に小論文という教科、科目はないです。

いつも私がこういうところに出てきて大学の先生に訊いているのですが、試験科目、英語・数学・小論文、小論文は教科でも科目でもありません、小論文で何を問いたいのか、どのような能力を問いたいのかということを明記してくださいといつも言っています。その問題がどうもディスカッションされていないのではないか。高等学校の先生方がこの小論文に対する捉え方をしているのと、大学の先生方が出題なさっている時のその出題の意図といいますか、本当にきちんとしたマッチングがあるのかという問題。ディスカッションすべき点ではないのかという感じがし

ています。そもそも小論文の指導は誰がするのでしょうか。ほとんどの学校が、全部とは言いませんけれども、国語の先生が大体中心になられていると思います。でも本当に国語の先生だろうか。これ、免許がなくて、私が例えば世界史とかやってしまうとアウトなのです。これをどう考えるか。先ほどのこの問題、もう少し検討される必要があるのではないかと。

教科指導と進路指導の今後

こういう状況になってくると、新しい入試の問題などまたこれから話題になると思いますが、思考力を問う問題、そもそも思考を問われているのは教師のほうになっています。嫌味なのですが。

そしてもうひとつ、私たち国語の教師としては、こうした文学的な文章を、表に出てこないのですが、では小説の問題はどうなるのか、共通一次の時に問題になった漢文はどうなるのか、というような話は一体どこでなされているのか。ここは国語の教師の言い分は相当あるだろうと思います。ここをぜひ発言する機会といいますか、ディスカッションする機会があるべきだろうと。

結論としましては、こうした大学の入試が、センターそれから個別の入試、そしてAO入試、というふうが増えていけばいくほど、何を基準にして学力を見計らっているのかというところが、なかなかその基準が見えにくくなる。ということは生徒一人一人の学力の位置が見えにくいのです。それは良いことなのかもしれません、一方では、あるひとつの杓子定規に決めるのではなくて、様々な観点から見ようという点は、決して悪いことではないのかもしれません。しかしその結果、進路指導が非常にやりにくい、という現状が起りつつあるというふうに考えています。

大変まとまりのない話で、各方面の方々、気分を害されたかもしれませんが、そのために資料をあえて作らなかったということでもないのですが、ご清聴ありがとうございました。

た.

(拍手)

石上正敏特任教授(司会) :

清水先生, どうもありがとうございました.
ご質問等につきましてはお手元の質問票をご利用ください.

資料

多様化する大学入試と高校現場

— 主に国語教師の立場から —

[illegible]

本校の紹介

所在地: 福岡市中央区

課程・学科: 全日制普通科 中高一貫コース併設型 男女共学校

中学校、高等学校コース・在籍者数

・中学校	1学年4クラス	160名在籍
・高等学校	中高一貫コース 1学年4クラス	170名在籍
・高等学校	スーパー進学コース 1学年2クラス	90名在籍
・高等学校	進学コース 1学年 8クラス	360名在籍

・中、高等学校 全校生徒 **2340名在籍**

国語の受験指導における近年の傾向

- マーク問題を始める時期が早くなった
根拠: センター試験分量を読み込むスピードを早い時期に習得させたい
- マーク問題を演習する期間が長くなった
結果: マーク問題を始めるとスピードはつづが読み飛ばす傾向に陥る
結果: 攻略法を知りたがる生徒が増えた
結果: まず各選択肢の末尾を比較して絞ろうとする生徒が増えた
結果: 趣旨問題から解こうとする生徒が増えた
結果: 記述をやりたいがらない生徒が増えた — 私大型へ
対策: 放課後 志望校別講座開講(個別試験対策)

2017年春の主な大学合格者数と特徴

国公立大学:	北海道大学3名	東北大学1名	東京大学1名	東京工業大学1名
	京都大学5名	神戸大学3名	大阪大学3名	九州大学49名
	熊本大学12名	長崎大学20名	広島大学5名	
私立大学:	早稲田大学11名	慶應義塾大学13名	上智大学6名	
	同志社大学29名	立命館大学65名	関西学院大学14名	関西大学20名

医 歯 薬 系: 医学部医学科合格者数49名
(九州大学医学部医学科9名) その他公立医学部11名)
(私立大学医学部医学科30名)
薬学部国公私立大学合格者数73名

特徴1: 全国の大学に分散している。
特徴2: 医歯薬系進学者数が急増している。

A・O、推薦入試における学力テスト導入の【功罪】

- ・【功】
 - ・「学力テストなし」で進学する安易さが減少する
 - ・所謂「小論文」が課せられると資料読解力と自らの意見を組み立てようとする能力が育つ
- ・【罪】
 - ・所謂「小論文」の分量が重すぎて夏休みはその対策で追われる
 - ・採点基準が定かではない「小論文」が出題される
 - ・多様な能力を測ると言いながら「センター試験」も課す

[illegible]

所謂「小論文」の傾向

- ・テーマ型 → 「〇〇」について、あなたの考えを述べよ。
- ・課題型 → 本文を読んで、筆者の考えに対してあなたの考えを述べよ。
- ・資料読解型 → 資料1～5を読んで、〇〇についてあなたの考えを述べよ。

※ 予測： 今後は 図、グラフ、日本語、英文等を含む
合科目・教科横断型論述問題が増えるだろう。

→懸念： 高校における小論文指導は誰(どの教科)がするのだろうか？

教科指導と進路指導の今後は・・・

- ・むしろ、**教師の「思考力・判断力」**が求められる
- ・「文学的な文章(小説・詩・随想等)を鑑賞する」態度が希薄になる
- ・生徒の「**学力**」の位置が見えにくく、**進路指導が困難**になりつつある

ご清聴有り難うございました



福岡大学附属大濠中学校・高等学校

現状報告 4：センター試験・新テスト・高大接続

大学入試センター 試験・研究副統括官

山地 弘起 氏

〔講師紹介〕

石上正敏特任教授(司会)：

続きまして、現状報告の4つ目になります。
「センター試験・新テスト・高大接続」と題しまして、大学入試センター 試験・研究副統括官 山地弘起先生からよろしくお願いいたします。

山地弘起試験・研究副統括官：

みなさん、こんにちは。大学入試センターの山地でございます。よろしくお願いいたします。最初に、おそらく新テストには非常にご関心が高いことと思いますので、私どもの現状を一言で申し上げますと、うちは今まな板の上の鯉だということです。しかもこの鯉は全然静かにしていなくてジタバタしているんですが、ちょっと力づくで押さえられているようなところがあります。新テストの実施主体となる新センターの構想が高大接続システム改革会議の最終報告に出ていまして、大学入試センターは抜本的に改組するんだという方向で検討が進められているはずなんです。ところが、これがどういうイメージのセンターになるかということはまだ全く出てきていません。それから高校生を対象にする基礎学力テスト（大学入試のためのテストではなく）についても、一体どこが主体となってやるのか、どういう形でやるのかということも、我々には全く見えないような状況です。文科省から新テストの実施方針案がやがて出てくると言われておりますが、それを見まさんと、実は内部にいるはずの私でさえ今一体どういう状況なのかということが極めて分かりづらいのです。



センターの目的と業務

そうした前置きの上で、まず大学入試センターは何をすることかということですが、この点は昨年に共通試験がテーマになってこの会が催されましたときに、大塚統括官の方から詳しく述べられておりますし、その時の報告書に詳しく記載されておりますので、今回は目的と業務だけご紹介したいと思います。

目的は、大学が共同して実施することとする試験、つまりセンター試験ですが、これに関する業務等を行うということです。かつては国立大学だけが使っていましたから、国大協の第2常置委員会、今は入試委員会ですけれども、そのもとで大学と一緒に問題を作り一緒に実施するという共同の業務を支える組織としてつくられたものです。

ですから、業務の最初のところには、高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定する試験に関して、問題を作成し採点しその他一括して処理することが適当な業務を行う、となっています。作題には1年ちょっとをかけます。大学の先生方に二年間の作題委員をお願いしていますが、問題の点検委員等も含めると、全体で約六百数十名の方が作題に関わっています。さらに、試験後に

問題を公開しますから、それに対する社会からのいろいろなフィードバックもあります。

それが一番重要な業務なのですが、2 番目に、大学の入学者の選抜方法の改善に関する調査・研究とあります。これが実は新センターとの関係でクローズアップされているんですけれども、個別選抜への支援をこのセンターが新たなミッションとして担うようになるということで、では具体的にどういう支援が可能かということを今探っているような状況なんですね。このセンター法というものが変わらなくても、個別選抜の支援ということも含めて、新しい状況に対応していくことは可能ではあります。ただそれにしても、大学が共同して実施するというこの部分が若干性格が変わってきて、後でも述べますけれども、大学に入ってから学習をちゃんと予測できるような試験というよりは、高校以下の学校教育に好影響を与えるような、そういう役割をもっと果たす方向に新テストの設計が進んでいるわけなんですね。ですから、この部分がこれまでと違う、違った形で解釈しなければいけないというような状況になっています。

センター試験への参加大学数と志願者数の推移

続いてセンター試験について詳しく述べますと、センター試験にはこここのところ 850 ぐらいの大学・短大が参加しています。全体で言えば 8 割程度の高等教育機関がこれに参加しているわけですから、全国的な共通試験と言って間違いはないと思います。今年は確定数が 848 ということで若干減っていますが、国立はもちろん 100%、公立も 97%、私立大学も 90%は参加しているというような状況です。

それから志願者数ですが、今年は 57 万 6 千人が志願をして、その内の現役志願者が 47 万人ということです。これは皆様もご存じのように、2018 年問題で今後減っていくということは容易に想像できるのですが、高校の卒

業者数がずっと減っていても、現役の志願者率が伸びているために、現在のところセンター試験の志願者はまだ増えているような状況です。

新卒志願者の出願類型と 2 層構造

この新卒志願者が一体どういうふうな受験形態を取るかということなのですが、これについては 4 つに分けてみると分かりやすくなります。まず国公立の専願 20%、約 10 万人という数は過去あまり変わっていない。それから私大併願、これがまた約 10 万人くらいいる。それから私大専願、これは 12 万ぐらい。それから未利用者。この未利用者というのが我々にとっては謎のグループでありまして、また後で戻りますが、ほぼ 10 万人いる。我々は得点調整というものをやる必要があります。理科や地歴で科目間の平均値の差が一定の範囲を越えたときに得点を調整するんですが、未利用者の得点は平均値に少なからぬ影響を与えますので、得点調整をすべきかどうかという判断のときに効いてくるわけです。このグループに対して我々はどういう態度を取るかということがまだ決まっていなような状況でして、いくつか違った集団が混在していそうだということは分かっています。

受験者層の変化をみますと、センター試験が始まった平成 2 年以降、この下のところはほとんど増減なく推移しているということが分かります。我々はマジカルナンバー 20 万と呼んでいたりしますが、これは国公立の受験者層、中核受験者層ということで、センター試験でも高得点を取る受験者層であります。それに対して新参入受験者層というのは、私大専願のケースが多いわけですね。参加する私大が増えていくにつれてこの受験者層も増えていきまして、今に至っているということです。この飽和期では、浪人の受験者が減っているんですね。今はもう現役を中心にとずっと推移しているということです。新参

入層の内訳の推移はこちらのグラフです。

新参入層の新傾向

新参入層のみの推移を詳細にみると、こうして上がっているのは私大の専願の受験者層です。この緑は未利用者なんですけど、この未利用者は最初はずっと伸びていて、その後減って来て、最近また伸びているということが分かります。ちょっと質の違うグループがここで入って来て伸びているんですけども、私大の参加が大体 50%を越えたあたりで、この未利用者と私大の専願のグループが交差しています。この未利用者が増えているということなんですけれども、これはどうも AO とか推薦で決まって、それで実際にはその合格・不合格には影響を与えないんだけど、一種の高校の勉強の総括として受ける、あるいは学校での勉強の総括のために敢えて 5 教科を受けるということがあるようです。5 教科 8 科目というのはさすがに減っているんですけども、5 科目、6 科目、7 科目受験者というのは最近微増の傾向にあります。

科目ごとに見ますと、これは英語の筆記試験なんですけれども、こちらに示したのは国公立大学の専願のグループ。それから私大も併願しているグループです。それから、こちらにありますのが私立大学の専願で、緑が未利用者です。こういうふうに見ますと、それぞれのグループの平均的な値がどこに位置しているかということがわかるかと思えます。未利用者がかかなり下の方に来ているということなんです。こちらは、全くランダムに各設問に解答した場合に起こるであろう分布を示していますが、それとほぼ同じようなところに平均値が来るということが、この未利用者の傾向としてわかるわけです。

それから、これは数学のⅠAとⅡBなんですけれども、この場合も未利用者が低い方へずっとたなびいてきます。それから、数学のⅡBに関しては、もうはっきり双峰形を示してしまっていて、ほとんどランダムに答えている

集団とある程度ちゃんと答えている集団とに分かれているということです。こうしたことは、我々が新テストの議論をする際にこれまでの総括として分析していなければいけない事柄なんですけど、残念ながらその総括というものを最近ようやく始めているようなところなんです。新参入層については、内田照久さんという研究開発部のスタッフが中心になって分析を進めてくれています。

新テストになっても得点調整の問題とか受験パターンの問題とかはこのまま残っていきますので、大きく受験行動と言ったらいいんでしょうか、そういうものの推移やその背景等についてはきちんと押さえておく必要があると考えております。

新テストへの移行

さて、新テストへの移行ですけれども、展望が良く分からないまま、それから一体センター試験のどこが具体的に問題で、新テストでその改善ができるのかという、そういう議論がほとんどないまま進んでいると言わざるを得ないわけです。

最初に申し上げましたけれども、今は大学に入ってから後の方向を見ながら入試を捉えるのではなくて、むしろ高校教育に好影響を与えるということに主眼を置いて、記述式を入れるであるとか、マークシート改善であるとか、4 技能の外部試験活用であるとかが議論されている節があります。センターの中の組織としては、去年の 6 月に新テスト実施企画本部というものがつくられて、さらに今年 4 月からは新テスト実施企画部という事業部に並ぶような組織が一つ新設されているんですね。併せて、先程も申しました個別入試支援です。どういうミッションがあるかを列挙していますが、これらは中教審の答申や高大接続システム改革会議の最終報告の中で言われていたものです。これを我々がどうやって引き受けて具体化していくかということが、今後の大きな課題となっています。

高大接続とは言っても、センターの場合は入試を通しての高大接続ですので、本来の高大接続の議論と若干離れているところがあるんですけども、これまでのところ高校にとっても大学にとっても得心がいくような入試改革をどうしたら実現できるかという議論が不十分なまま進んでいるように思います。

記述式の採点にかかわる課題

ここに記述式に関わる課題を挙げています。先程清水先生からも、論述についてどういうふうな採点でやるんだというようなお話がありましたけれども、少なくともセンター試験について言うと、五十数万の受験者に対して極めて短期間の内に、しかも公平・公正な採点をしなければいけないとなると、おのずと作問の仕方も本来の記述式とは言えないんじゃないかというくらい機械的に採点が出来るものが望ましく、しかも、本来の自分の意見を組み立てるというよりは、与えられた資料なり材料なりから問いに応じた形で素早く情報を引き出して整えるような、そういうスキルが求められる問題にならざるを得ません。ですから、記述式導入の本来の目的を遂げるのであれば、やっぱりこれは個別試験の課題というふうに考えざるを得ないわけです。

まだまだこの辺をどう解決するのかということについては確かなことが言えません。センターでは、フィージビリティ・スタディを文科省の委託で去年の11月と今年の2月にやっています。去年の11月にやったときには大学1年生400名くらいを対象にして、それから2月には600名程度を対象にしまして、国語と数学の記述式の問題がどのくらい実際に使いものになるのか、どのくらい時間がかかるのか、自己採点ができるものなのかどうか、それから採点者間がどれくらい一致するのか、等々を検討しています。しかし、その結果も実はセンター内には知らされていないというような状況でして、この辺も本来は高大接続システム改革会議の最終報告

で、テストの専門家も含めてきちんと検討するということが書かれていたにも拘らず、それはまだ行われていない状況です。

マークシート問題にかかわる課題

マークシート問題についても、より思考力・判断力を重視するような作問を、という提言を受けています。より学習指導要領準拠の作問をせよということになってはいますが、これまでは、作題に実際に関わる先生方には40日から50日センターに来ていただいています。

今後、高校関係者も入って作題するということになりますと、問題漏洩等の問題がありますので現職の先生というわけにはいきません。例えば教育委員会や管理職の先生方に加わっていただいて、作題体制自体を大きく変えるということが予定されているわけなんです。この思考力・判断力を一層重視した作問を、どのくらいサステイナブルにやっていけるかということも一つの大きな問題なのですが、いずれにしても、人材確保を含めた作題方針・体制を抜本的に見直すというふうに言われたまま、実際にこれはどういう形になるのかということをお我々も見守っているような状況です。

今後の予定ですけれども、5万人規模の事前プレテストをこの11月にやる予定です。さらに来年度には10万人規模でやることになっています。実際の試験が五十数万でやりますから、実施運営面での予行演習としてやってみるものです。31年度はどうなるかというのは未定です。去年の11月と今年の2月は国語と数学の記述に焦点を置いてやってきたのですが、今年と来年については主要な科目を網羅してやるという方向です。

今、主要な科目と申し上げましたけれども、センター試験は現在30科目程あります。この科目数を減らすということが最終報告では打ち出されていたんですけど、今のところそういう気配はなく、これも実施方針がどう

いうふうになるかですね。我々の方としては、別冊科目と呼ばれる、例えば簿記とか情報関係基礎であるとか、それから外国語の中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語、この辺りをどうするかということが、まだクエスチョンマークのままです。作題委員の先生方も大変心配されていて、次の委員を推薦していただかなければいけないということもあって、非常に今困っている状況です。

今後に向けて

最後に今後に向けてということなんですが、とくにセンターの研究開発部に関して、文科省主管の独立行政法人という組織の中でこれまで以上にミッション・オリエンテッドな研究開発体制が求められています。

また次世代テストに向けて、これは CBT とか IRT を使って複数回実施ということも当然視野に入ってくると思いますけれども、そういうことが実際どの程度可能なのか、そしてどういうふうにすれば可能になるのか、ということを実体的に検討する研究もいっそう必要です。さらには個別入試支援を実際に進めていくスタッフも必要なわけで、研究開発という側面でも、今のセンターの体制ではなかなか太刀打ちできないテーマが目白押しになっているような状況です。

いろいろな課題を抱えたまま困っているという、非常に恥ずかしい状況ではあるのですが、現状をその通り報告させていただいた次第です。どうもありがとうございました。

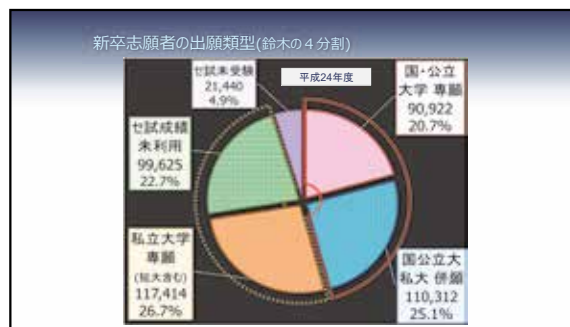
(拍手)

石上正敏特任教授(司会)：

山地先生どうもありがとうございました。これまでのご講演に関するご質問等につきましては、お手元の質問票をご利用ください。ここで少し長めの休憩を取らせていただきますが、休憩中に質問票を回収させていただきます。

ます。スタッフが数名通路を周っておりますので、お近くのスタッフにお渡し下さいますようお願いいたします。前方の時計で 15 時 45 分に再開いたします。

資料



センターの目的と業務 (独立行政法人大学入試センター法)

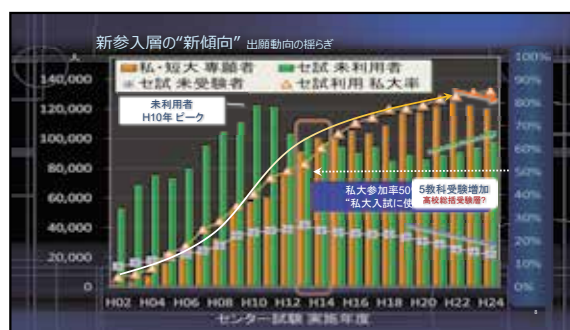
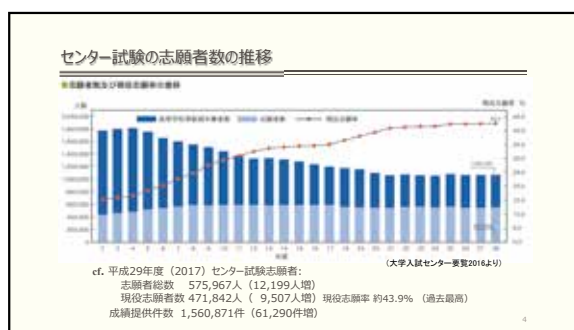
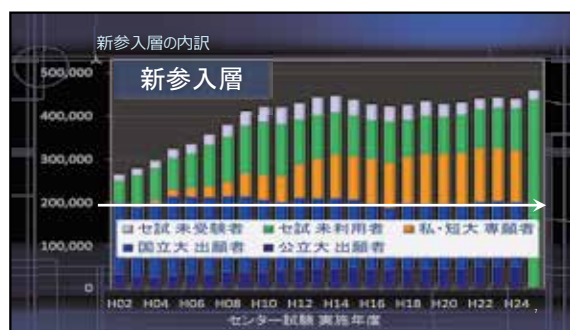
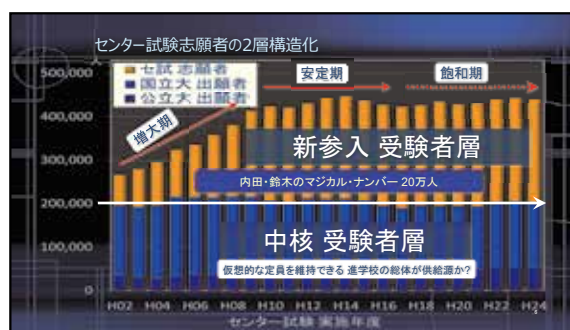
- (センターの目的)

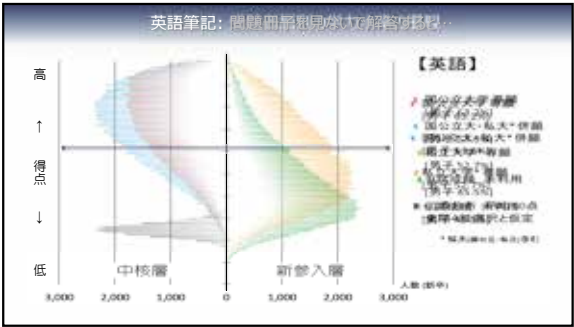
第三条 独立行政法人大学入試センター（以下「センター」という。）は、大学に入学を志願する者に対し**大学が共同して実施することとする試験に関する業務等を行うこと**により、大学の入学者の選抜の改善を図り、もって大学及び高等学校（中等教育学校の後期課程及び特別支援学校の高等部を含む。以下同じ。）における教育の振興に資することを目的とする。
- (業務の範囲)

第十三条 センターは、第三条の目的を達成するため、次の業務を行う。

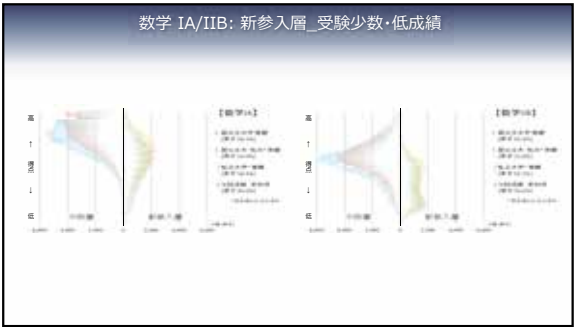
 - 一 大学に入学を志願する者の**高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度**を判定することを主たる目的として大学が共同して実施することとする試験に関し、問題の作成及び採点その他一括して処理することが適当な業務を行うこと。
 - 二 **大学の入学者の選抜方法の改善**に関する調査及び研究を行うこと。
 - 三 大学に入学を志願する者の進路選択に資するための大学に関する情報の提供を行うこと。

2

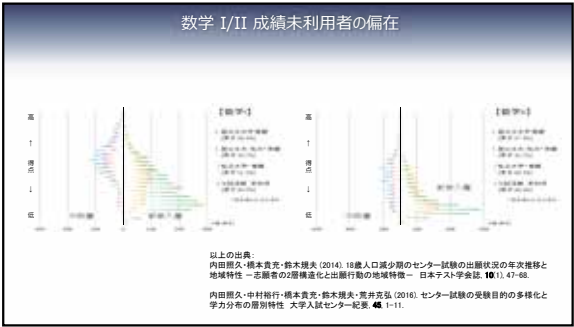




- ### 記述式の採点にかかわる課題
- 大規模・共通一斉・選抜試験の記述式採点を短期間でできるのか？ どの程度の期間が必要か？
 - センターが段階別成績表示を提供する場合、民間はどのように採点業務にかかわるのか？
 - 選抜試験として信頼性の高い採点はできるのか？
 - 受験生は自己採点できるのか？
 - 条件付きの短文記述式で、求められる能力が評価できるのか？
 - どのような内容（素材、文字数、問題数、難易度など）の問題になるのか？
 - 出題方法、試験時間は？ 記述式だけ取り出して行うのか？
 - 段階別成績表示を各大学がどのように活用するか？



- ### マークシート問題にかかわる課題
- 思考力・判断力を一層重視した作問
 - 各教科・科目の特性を踏まえつつ、学習指導要領改訂を見据えた作問
 - これまでも学習指導要領・教科書準拠の作問であるが、大学教員が大学の視点から問題作成
 - 作問傾向の「固定化」「専門分化」の改善
 - 学習指導要領の趣旨・内容との連携をよりの確に確保
→ 高校の授業改善の契機となるような作問
- cf. 「センターにおいて…**作題委員構成の見直し、作題委員の人材確保を含めた作題方針・体制の抜本的見直しが必要**」(平成28年3月31日 文科省公表資料)



「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の導入スケジュール（検討中）

	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
大学入学希望者学力評価テスト（仮称）の導入	28年度前半 （仮称）大学入学希望者学力評価テスト（仮称）の導入	29年度前半 （仮称）大学入学希望者学力評価テスト（仮称）の導入	30年度前半 （仮称）大学入学希望者学力評価テスト（仮称）の導入	31年度前半 （仮称）大学入学希望者学力評価テスト（仮称）の導入	32年度前半 （仮称）大学入学希望者学力評価テスト（仮称）の導入
実施者	アイジベリ ティ検証事業 500人	事前プレテスト 5万人規模	プレテスト 10万人規模	確認プレテスト 未定	
対象者	大学1年生	高校3年生・大学1年生	高校3年生	未定	
対象教科 科目	国語、数学、 理科（物理）、 地理（地理 A）、英語	国語、数学、 地理・歴史、 理科、英語、 情報・倫理等 （選択）	国語、数学、 地理・歴史、 理科、英語、 情報・倫理等 （選択）	未定	
実施時期 （仮定）	11月、2月	11月	12月	未定	

- ### 新テストへの移行
- センター試験の総括や今後の展望が不十分なまま
 - 大学ではなく文科省主導 ← **高校教育への影響に主眼**
【記述式の導入（国・数）、マークシート問題の改善、英語4技能の外部試験活用】
 - センターでは昨年度に新テスト実施企画本部が活動、今年4月に新テスト実施企画部を新設
 - センターに求められる個別入試支援 ← 多様な高校・多様な大学の間で望まれる高大接続とは？
 - ・ 個別選抜やアドミッションオフィス強化等の方法開発
 - ・ 面接や集団討論等を含むテスト方法開発
 - ・ 調査書の評価等を含む評価に関する方法開発
 - ・ 専門的人材の育成
 - ・ 入学希望者や学力評価についての新しい方法の開発
 - ・ 以上に関わる国内外の調査等
- 高大接続改革に関する中務審判（2014年12月）及び高大接続システム改革会議の最終報告（2016年3月）より

- ### 今後に向けて
- センター改組（？）に伴う研究開発体制の刷新
 - 新テストにおいても、持続性のある作題・実施体制や科目選択・時間割・得点調整・妥当性確認等の課題は継続 → センター試験の総括と新テスト設計へのフィードバックが不可欠
 - 次世代テストに向けた検討 → CBTやIRTによる試験方法の実践研究
 - 個別入試支援への取組み → 各大学のアドミッション・オフィス等との連携の模索
 - 入試の適切性評価と受験者の追跡研究
 - 高校へのワークショップ効果等についての実証的検討
- ご清聴ありがとうございました

第Ⅲ部 討議

ーパネルディスカッションー

討議—パネルディスカッション—



石上正敏特任教授（司会）：

お待たせいたしました。それではこれから第3部、討議に入ります。ここからは担当にマイクを渡します。

宮本友弘准教授（討議司会）：

それでは討議に入らせていただきます。司会のほうは私、東北大学の宮本と田中が担当させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。ではまず討議の流れですが、最初に倉元先生の基調講演をベースにした議論をしていただき、そのあと、皆様から寄せられた質問票、これに対して答えていただきます。最後にフロアの皆様のご意見を拾っていく、そういった形で進めさせていただきます。

それではまず倉元先生のご発表に対しまして、現状報告のところで阿部先生のほうからいくつか要望があったのですが、要望のひとつとして、採点の透明性というような視点で採点基準、正答率を公表することで、東北大学生が求める生徒の答えがよくなると思いますとご意見があったのですが、これに対して倉元先生いかがでしょうか。

倉元直樹教授：

実は、先ほど阿部先生と「この話を壇上でするのはできればやめましょうね」と話題にしたところなのですが……。正直に言います、採点の透明性云々……。ということですが、要するに問われているのは「結果がどうだったか」ということです。出題した意図と、返ってきた答案の内容、それは我々の中でもっと検討すべ

きことと理解をしています。実際、つまびらかにはできないのですが、そういうことを検討するための体制を整えつつあります。ただ、これを公表するかどうかというのは話が別で、私どもが求めているのは、・・・「育成の原則」という言葉を使っていましたけれども、・・・高等学校で学ぶべき事柄をきちんと勉強してくれることであって、要領よく一部に特化して点数を取るテクニックをつけてくるということではないわけです。したがって、その点を勘案すると、正直、内部では「いろいろな検討資料はどう考えても出すことはできない」というような議論になっています。つまり、そこをすべて高等学校に預けることはなかなか難しいというのが現状です。

お互いの信頼、それぞれと一緒に、将来を担う若者を育てるという意識は共通ですけれども、やはり、互いの立場の中でそれなりにやり取りというか、せめぎ合いはあります。そういった意味で、もし、高等学校側がそういう要望を出されるのであれば、私どもも、やはり高等学校側に若干厳しい要求をせざるを得ない、ということになります。そういったことです。回答になったかどうか分かりませんが。

ただ、要は、試験問題をどうやって子どもたちのために良くしていくかという議論は、非常に大事なことですし、そこに焦点が当たったということに関してはうれしく思っています。以上です。

宮本友弘准教授（討議司会）：

阿部先生、いかがでしょうか。

阿部淳校長：

確かに私も高校入試の採点をしていて部分点などを出せと中学校に言われても絶対拒否しますね。自己矛盾を抱えながら出してみたのですが、ひょっとしたら透明性を求める大学であれば、と思いましたが、いろいろな先生方からうかがってもやはり、私たちがやるのはどうしても授業では合格テクニックに走ってしまうと。それは根本的に学問を教えている人間がすることではないと思います。ですからそういったことよりも、それを上回るような能力といえますか、学力や好奇心など知的なものを育てられることを、私たちが高校教師として求めているかなければならないのではないかと思います。これを書かれた方にはそのように伝えます。ありがとうございます。

宮本友弘准教授（討議司会）：

ありがとうございました。あと、清水先生のほうから、AO 入試なのにセンター試験を課するのはいかがなものかという問いがありましたがいかがでしょうか、倉元先生。

倉元直樹教授：

これは本当に、「入試設計の問題」だと思います。私も講演の中で伝わったかどうか分からないのですが、私どもは少なくとも一般入試、AO 入試で求める学生像は、学力の側面では違いはない、と表明しています。ただし、AO 入試に関しては東北大学を第一志望とすること、ということですので、基本的に子どもたちに異なる準備を求めているわけではないのです。それはそれぞれの大学の考え、様々な原則に従って、・・・「募集の原則」、「育成の原則」、「継続性の原則」、「公平性の原則」、・・・諸々ありますけれども、それぞれの大学がお考えになることではないかと思います。ですので、私自身は清水先生のご指摘は、私どもの大学に向けられたものではないというふうに考えます。

宮本友弘准教授（討議司会）：

清水先生いかがでしょうか。

清水和弘副校長：

実はあと 10 ヶ月ほどで定年を迎えまして、ここで敵を作りたくないというのが本音です。ただ、生徒の立場に立って見て、12 月の当初に AO 入試や推薦入試の試験を受けて、切り替えてセンター試験の勉強をして、いざとなったら一般試験も、という気持ちで頑張ろうとするのでしょうかけれども、どうも見てみると、そこに、ひょっとしたら AO 入試でうまくいっているのかもしれないという気持ちがずっとある、そのことを考えると早く結果を出していただいたほうが、子どもたちにはよいのではないかという感じもします。

今、倉元先生が奇しくもおっしゃいましたが、制度設計の問題だと。だとするのなら、そうした基礎学力も含めたうえで、小論文が出来る子を取るという、そうした判断をその段階でなすることはできないのか、という感じは残ります。少しやわらかく反論したつもりですがよろしく願いいたします。

宮本友弘准教授：

倉元先生どうですか。

倉元直樹教授：

他大学の皆様、どうか今のお話をお耳に残してください。私どもの場合は、元々が前期日程試験に向けて準備をしてくるということを前提にメッセージを出しております。それは先ほどご紹介いたしましたパンフレットの中にも書いてあります。4 番目のところで、「AO 入試の志願者の照準は一般入試、前期日程に定めて勉強を進めてください。そのうえで、第一志望の受験者のためだけに特別なチャンスを与えます。」というのが AO 入試の主旨ですので、結果的に AO 入試を不合格になっても、一般入試

を突破して本学に入学してくる学生がですね、募集人員総計約 2,500 名のうち、毎年 200 名は超えます。そういう状況ですので、私どもに対して向けられたものではないと、理解をしています。もし、そうでないとすれば、これからこの場ではなく、丁寧に東北大学の入試説明会等でお話をさせていただこうかと考えております。

宮本友弘准教授（討議司会）：

ありがとうございました。これはフロアからなのですが、これもダイレクトに東北大学に対しての質問なのですが、小中高と連続して次期学習指導要領で強調されています、主体的・対話的で深い学びというような学習者を主体とするような学習設計のあり方を東北大学の入試改革ではほとんどくみ取るメッセージを感じませんでしたと。東北大学は知識を多く習得した高校生を入学させたい方針でしょうか、というご質問があるのですけれども。

倉元直樹教授：

これは、たぶん、木南先生も同じお考えだと思うのですが、現状、大学に入学しようと思ったら、そんなにぎりぎり頑張らなくてもできる状況になっています。その中でこれだけの試験問題を課せられて、そこをある程度のレベルで突破してくるという、そういう受験生が、主体性がないとは到底思えない。ですので、私どもはそこに関しては、私どもが求める学生像を変える必要があるとは、今のところ一切議論として出ていません。

京都大学のほうはいかがでしょう？

宮本友弘准教授（討議司会）：

類似した質問がもうひとつあるので、具体的な質問をします。受験生の主体性、協働性、学びに向かう力を見たい場合、大学側ではどのようなテストを考えますかということなのですが、いかがですか。

木南敦教授：

答えになるかどうか心配しながら答えていますが、言及されたこの 3 つのことがらは、テストで測ることでしょうか、という問いから出発していく必要があるように感じられます。高等学校が入学者選抜をされる時に、この 3 つのことがらをどのように測ろうとされるのでしょうか。学校教育法の規定からいえば、小学校について定められていることが中学校、高等学校、中等教育学校に準用されています。高等学校段階だけでなく、小学校でも、中学校でもおなじように特に意を用いなければならないことです。そうすると、どの入学者選抜でもこのようなことを測るテストするか、それとも、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、大学に入っても引き続き持ち続けるようにするかというと、後者が正しいような気がします。大学はこれについては、教育で応えるべきであるということになります。本当は態度に関わることがらについてテストをすることはふさわしくないとも考えられます。

人間は一人ひとり異なるわけで、この 3 つの要素というのはどういう形で現れてくるかは差が大きいこともあり、何か代わりになる指標を使っているにとどまりまると考えざるを得ません。

経路依存という言葉がありますけれども、過去を引きずって学力テストを用いていて、知識をどれだけ活用して答えを導きだせるか、そこで要求している知識の内容と水準、そして活用の度合いで、大学によって求めるところが異なっているということになると思います。共通のテストにあまりたくさん盛り込もうとすると、大学が個々にやるところが減っていきます。共通の試験と個別の学力検査をする限り大学間の差異がありますから、きちんと住み分けていかなければいけないと思います。何のために、何を問うて何を見て、どういう人を選ぶのかについて、大学は今までたどってきた経路の中でできることをやっていますが、態度に関すること

を評価して入学者を決めるというのは大変難しいことと思われます。というのは、大学に入った人は入ってから態度を変えるかもしれません。そして、先ほど申し上げたことですが、大学に入ることは目標であって良いのですが、入ったら次に何をするかに切り替えていく、そういう能力というのが求められると思います。これがテストして分かるのかというと、分かるという人のほうが少ないのではないのでしょうか。私は少ないと思います。

宮本友弘准教授（討議司会）：

それに関連しまして、先生がご発表の中で、入るまでのお話と入ってからのお話、ビジョンとして、大学に入ってからどういうインセンティブを作るか、ということもおっしゃっていたと思います。その点とは具体的にどういうことでしょうか。

木南敦教授：

ここは、入ってからのことはなんとも言い難いと思います。大学では法学部に属していますので、以前の司法試験という例を見ますと、司法試験の累積合格者を見ると、私立大学のいくつかはすごく多くなります。いくつかの国立大学を上回っていますけれども、このような私立大学の入学者選抜は難しいのかというと、著名な大学であるけれども学生をたくさん受け入れられますからそうではありません。大学に入って何をやるかということによって、相当差がでてくるということになります。あることを目指して、はっきりとフレッシュなスタートをできる能力かどうかということについては個人差が大きいと思います。これは、たとえば、入学試験の数学の点数を見て分かることではありません。ちなみに私立大学の法学部では入学試験で数学を課しているところはほとんどありませんが、国立大学の法学部で入学試験の個別学力検査で数学を課しているところは多くみられます。

大学に入ったら次のステップがあるので、入ったら一旦お休みではありませんという雰囲気をつくるのか、ここは個々の大学が入ってきた人の顔を見ながら、努力せざるを得ないと思います。そういう点では、大学が GPA を算出してみるとかなにかの形で学生の動きをある程度指標として見られるようにするとか、出席状況を確認するなどをして要注意フラッグが立てばその学生はどうしているかを気にするようになってきていると思います。

宮本友弘准教授（討議司会）：

ありがとうございました。それでは会場からのご意見にうつります。

田中光晴講師（討議司会）：

質問票は毎年、数多く寄せられるのですが、すべてをなかなか使うことができないということと、それと、例年、私の質問が読まれなかったというクレームもよくいただきますので、先に謝罪から始めるような形になるかもしれませんが、やはり今年も多くの質問を寄せていただきました。今は、なかなか不透明な状況ですので、様々な情報をここに求めてお越しいただいた方も多いかと思いますが、ここで曖昧なことについて議論を進めることは生産性がないので、今与えられた情報の中で様々な議論をしていきたいと思います。

質問があるテーマに集中しておりますので、そこに絞って進めたいと思います。そのうえで最後にフロアの皆様に振りますので、是非これだけは聞いておきたいということはそこで発言いただきたいと思います。

まず初めに、山地先生に質問があります。「新テストについて決まっていなかったことが多そうですが、そうは言っても決まっていることとお話できることは他にないですか？」と。これはおそらく最初に聞いておかなければならないのだと思います。いかがでしょうか。

山地弘起試験・研究副統括官：

まずこれまでのセンター試験に比べれば、マークシート問題についてはさらに思考力・判断力を測れるような問題に変えるように、これはたぶん動かない。この部分は、今回の新テストや高大接続の議論よりも前から、単なる暗記で解けるような問題ではなくて、きちんと思考力・判断力を働かせて解けるような問題に、というのは作題委員会で共有されてきたことですから、そういう意味では方向性としては同じであるというふうに思っております。

それから、ここから先は、例えばマークシート式の中に記述式を入れると決まっているのかなども、私の立場では何とも言えないというか、先ほどの議論に戻りますけれども、本来のシステム改革会議のまとめの段階では、実はペンディングになっているわけです。引き続き検討する、と。フィージビリティ・スタディを踏まえて専門家も含めてきちんと検討して結論を出すのだという方向が示されていたということでありますから、今の段階でそれが一体どういうふうな形になっているかというのは非常に見えにくいと言わざるを得ないような状況でございます。いずれにしても近々実施方針案が出るということになっておりますので、待ちきれないという方もそんなに待たなくてもいいのではないかと思います。とりあえずこの辺でご勘弁いただきたいと思います。

田中光晴講師（討議司会）：

難しいお立場のなかでのご発言、ありがとうございます。そこで先生がご報告の中で、レジュメでいうと3ページ目くらいですか、記述式の採点に関わる課題ということで、いくつか示されています。今の先生のご回答にもありましたが、やはり記述式というのが、まだ難しさを抱えている中で本当に実施されるのかということに対するご質問が非常に多いです。そもそも新テストで記述式が求められる根拠というのは本当にあるのかという前提のところからの質問

や、あるいは記述式の課題が指摘される中で、本来、元々言われていた記述式が測りたいとされていた能力とそもそも今測れるとされている能力にずれがあって、それをずっと記述式という単語で使ってきていますので、従来の記述式と少し変わってきてしまっているのではないかと。先生がここに書かれている記述式の課題が、現時点でどの程度克服されているものなのか、そのあたりを少し教えていただきたいと思います。

山地弘起試験・研究副統括官：

記述式というひとつのラベルでいろいろな範囲のことを言いますので、40字とか80字とか、あるいはそれ以上であるとか字数に関わった議論もありましたし、それから以前日経新聞で高大接続システム改革会議の中心におられた安西祐一郎氏が、記述式というのはこういうものであると意見を述べられた論稿があったりもしました。そこで述べられていた「本来の記述式」というのは、ただ単に書かれているものを読み取るというだけではなくて、自分の意見をきちんと構成して述べる、先ほど清水先生がおっしゃったような、何々について述べよといった問題できちんと自分の考え方を根拠づけて述べられるような、そういうところまでを指すのであるというような言い方をされています。

以上はもちろん正確な表現ではないのですが、ただ少なくとも数十字で、しかも採点があり疑義照会を生じない形でなされるような記述式問題とはかなり質が違うなという印象を持ちました。その記述式ということについて、いろいろな考え方があるということはそのご質問の中にあつた通りでありまして、そして少なくとも今、共通試験の中でできるのではないかとということで検討がなされているこの記述式というものの中でも、この資料に示したような問題についてはフィージビリティ・スタディでやってみて検討している段階というふうにしか言えないのです。

そもそも論に戻りますけれども、最初のご質問にあった、なぜ記述式を入れようとしたのかということについては、私自身は答えられる立場ではないのです。少なくとも、センターから提案をして、センター試験の改善をするという中で出てきた議論ではないですし、それから、記述式で本来見ようとしたもの、思考力・判断力というようなもの、あるいはひょっとしたら先ほど質問にもあったような主体的で対話的で深い学びに関わるところが、今提案されているような、センター試験で行えるような記述式に期待しうるかどうかということは、個人的にはクエスチョンマークでありますけれども、今のところどこまで解決されているのかについては、これは検討段階というふうにしか私の方からは答えられません。大変歯切れが悪いですがそれでも。

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございます。この記述式について、従来型の記述式とやはり新テストにおける記述式とでずれているのはどうなのかということもあるのですが、倉元先生、この記述式等の問題についてどうお考えでしょうか。

倉元直樹教授：

昨年度というか、今年ですか、私は本に書かせていただいたのですが、要するに、現在、国立大学で出題されている個別試験と比較して、さらに考えを形成し表現する能力等、よりの確に評価することはできるような記述式を出していただけるという前提で、その利用を考えるとというのが私どもの立場です。

ひとつ大事なことは、先ほど、現在のセンター試験の位置づけに関して、山地先生がおっしゃいましたけれども、元々国立大学が共同で実施をするものとして始まった共通1次が今のセンター試験に引き継がれているので、大学というのは実施主体なのです。それが新しい制度の下でどうなると書かれているかというところ、「大学

入学者選抜として大学共同実施する性格のテストである点については変更がない」と、「抜本的に改組した新しいセンターが新テストの実施主体になる」と書いてあります。つまり、使うのなら大学も共同して一緒に実施しましょうというスタンスなんだろう、というふうに素直に読もうと思えば読み取れるわけです。

いずれにしろ、私ども東北大学の立場としてはAO入試Ⅲ期の実施に支障がないように、センター試験に代わる新テストの成績というのを提供していただくというのがまず大前提です。それは、当然、今までのセンター試験が担ってきた役割をカバーするもので、その上で、我々の個別試験では実施できないような、そういったものを新たに加えていただければ、それは非常にありがたい。

ただし、それは「利用できる形で」というのが前提になります。もちろん、そういう形でお考えいただいているというふうに理解していたわけですが、現時点でそうではないということになると、ずいぶん話が違うじゃないかというのが正直思ったところです。そもそもが、・・・これはもうだいぶ前に出した本に書かせていただいたのですが、・・・劇的に変わること、しかも、それを知らされる時期が遅いということ自体が、もう、「改悪」として受け取られる条件なのです。

ですので、そもそも、・・・山地先生は今のセンター試験の共同実施になっている大学入試センターから来られているので、これは山地先生に向けてお話しすべきことかどうか分からないのですが、・・・その辺、どういうお考えなのか、というのを、正直、知りたいところではあります。私どもとしては、やはり、私どもの大学に将来来てくださる可能性がある受験生に向けて、最大限、今の時点で発することができるメッセージを発したいわけなのですが、その前提条件が曖昧だということに関しては、私どもは非常に困りますし、高等学校はもっと困るだろうし、一番困っているのはたぶんその時期に

受験を迎える受験生なのではないかということを思います。

少し、質問と外れてしまったような気がするのですが、そういうことをどうしても申し上げたくなってしまうので、すみません、余計なことだったかもしれませんが。

田中光晴講師（討議司会）：

山地先生いかがでしょうか。

山地弘起試験・研究副統括官：

受験生だけでなく保護者の方、それから高校の先生方も非常に不安でいっぱいだというのは、その通りだと思います。これは実は大学の先生もそうでありまして、作題に関わっていく先生方が今後一体どういうふうな問題を作っていけばいいのかということで、我々に聞かれることもよくあるわけです。それについても、方針がまだはっきり出ていないので、という答え方でこれまでやって来ざるを得なかったのです。将来的にどういうふうに記述式が入るのか、実際に個別試験に間に合うように得点を提供できるのか、疑義照会があったときにきちんと対応できるのか、こうしたところは、私が理解している範囲ではセンター内でもまだ詰められていませんし、文科省との間でそれらを詰めるはずの国大協の入試委員会などでもあまり議論が進んでいないように思われます。

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございます。木南先生いかがでしょうか。

木南敦教授：

まず、これをどういうふうにかえるかというと、制度上、決定者というものがあるわけで、決定のプロセスがあって、決定の結果というのがあるとみることができます。決定者は山地先生のスライドにもありましたけれども、法律で制度がどう書かれているかで決まるわけで

す。どういうふうに大学入試センター試験あるいは共通テストを実施するかは、実施大綱という形で文部科学省が決めることになっています。この内容にしたがって、センター試験やそれに代わるテストの実施を担当するところが大学入試センターです。大学入試センターは独立行政法人ですが、これは実施機関というか実行するための機関ですから、大学入試センターの人に尋ねてどのようなことが分かるのでしょうか。決定者は別にいます。その決定がどのようなプロセスで行われているかということがよく分からない限り、決まっていることがあれば知りたいと尋ねても知りようがないのではないかと思います。

つぎに、個々の大学としてどうするかというと、文部科学省から内容についての提示があるのかを待つことになります。6月にはあると書かれています。発表内容を見て、どこが変わるかが分かると、変わる場所についてどうすることができるのかということを考えることになります。そして、決めたことはできるだけ速やかに発表することになります。一般的なルールで2年前予告ルールですけれども、文部科学省が2年前予告ルールによるというか、それとも3年前に予告することが望ましいと打ち出してくるかによって、発表までどのようにするかが決まると思います。

記述式の問題について言いますと、これまでのところ、共通テストの記述式の問題例を見たことがないわけです。プリテストでは実際にテストで使われそうな問題がどんなものであるかということが示されます。今までのサンプル問題ではないはずですから、例えば80分なり100分なりの時間に収まるようなテストとして実施されます。プリテストの結果どのような点数が出るかなど結果を示されて、大学としてどう使うか、大学が利用を決めるための情報があって、それを参照して決めることができることが望ましいと思います。このようなプロセスにならないと、慎重な態度で利用について決めざるを得

なくなりそうです。

つまり、問題がどんなものか、これまでと変わるところはどのように変わるのかについて、変わったものがもたらす効果について、決定に必要な情報がある程度まで提供されないと、決めにくい状況にあるということです。サンプル問題も示されるということですが、サンプル問題を高校3年生対象に使って、20万の人たちの試験の結果はどんなものなのか、そのようなことを知ったうえで、十分なことを決めることにはできればよいと考えます。このようなことが分からない状態で、大学の中で大きな影響を持つような扱いをすることに慎重な意見が出てきたら、それはそうですがなんとかというふうにはいいにくいではないかと考えられます。

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございます。やはり新テストについてはまだまだ課題が多いというのは確かにわかるのですが、今日のフォーラムはそういうことも踏まえたうえで、個別大学の入試改革はどのように進めるべきか。この状況の中で我々大学と高校の現場から見て、大学入試を考えていこうというのが本日の趣旨です。そういう意味でいうと「小論文」というものの扱いということについての質問がかなり寄せられています。

小論文について、大学の先生お2人には、小論文で測れる力というのはどういうものなのか、特に東北大あるいは京都大ではかなり小論文という用語を使いながらも特色のある内容を問うていますので、「小論文」で受験生に求める力というのはどういうものなのかということを伺いたい。また高校の先生方には、小論文の指導をどのようにしていらっしゃるのかということ、小論文に対応するためにはどのような対応をされているのかということについて伺いたいと思います。まずは倉元先生のほうから小論文について伺いたいと思います。

倉元直樹教授：

少なくとも、京都大学と同じように、東北大学も決まった枠の中で試験を実施するという点に関しては変わりません。

さて、今の小論文という話ですが、実は、私どもの今まで実証してきましたAO入試の中で、一番早急に手をつけて変えなければいけない部分だというのが、「名称問題」です。実は、東北大学のAO入試は元々が推薦入試・・・当時の推薦入学・・・から始まったものです。当時は小論文試験という名前にふさわしい設問を出していたのですが、その後だんだん変わってきた部分がございます。今まで、逆に、「名称を変えると混乱するのではないか」という議論があってそのままで来たのですが、平成30年度入試に向けては、やはり、東北大学の入試ということに関してあまり深い理解がない受験生や学校に向けても誤解を与えないように、という配慮が必要だろうということで、中身を変えるのではなくて、「小論文試験」と呼んでいたものの名称を基本的に「筆記試験」と変えるということは決まっています。その筆記試験の中身がどういうものであるかということに関しては、現時点では平成29年度のものしかないのですが、Webで東北大学が出してきたもの、出題したものを公開すると同時に、募集要項の中で「こういった能力を測る意図だ」ということをできるだけ書き込むような形で、今、変更しているところです。

ですので、先ほど清水先生がおっしゃられた小論文に対する意見は全くその通りだと私は聞いておりました。それと同時に私どもの細かいところの配慮が今まで足りなかったということを反省して、少しずつそれを修正しようとしております。

木南敦教授：

京都大学で小論文という形でタイトルをつけた学力検査というのは、法学部の後期日程で実施していますが、特色入試のうちでAO入試と推薦入試の一部でも論述式の試験問題を用いて

います。それぞれがどういう役割を果たしているのかは、それぞれの入試の他の部分と比べてみなければなりません。

法学部の問題の内容を見ると、英文が含まれていますが、日本語の部分に限っていえば国語の延長であるけれども、小説や評論に関する問題というもののうち小説ではないということは確かです。近代以降の文章を読むけれども、文章の内容にみられる特徴について要約というものを求めて、要約のうえで何らかの論評を求めるという形式であると思います。京都大学では他に経済学部が、最近まで論文式という入学者選抜の方法を使っていました。データを散りばめた文章というものが問題文として出ていました。これは今の言葉で言えば、合教科型ともいうことができます。

論文と言っているものは、受験者が求められる記述作業の形を指していて、問題文の内容から見れば教科の区分を超えたことを求めているように思われます。この点では英語もおなじように見えます。英語で表現されている内容は英語に関するものではありません。英語の試験を見た場合に、そこに書いてあることが英語の歴史であるとか英語の言語学であるといった試験問題は少なく、英語で表されている内容は他の教科の内容であることが多いということになります。このような問題に英語という表示を貼って「英語」の問題だと扱っているだけだという面があるように思います。

論文というと、普通の論述式よりもたくさんの量を書いていて小さな論文のようになっているのかというと、800字程度で論文にあたるとは思われませんが、それが短め目であることから小論文と言われているかも知れません。しかし、そこで問われていることは教科の区分を超えた合教科的課題のようです。高等学校学習指導要領に基づく教育課程を前提として試験問題を作ると言われても、これは教科別に出题しなければならないということまで要求されていないと考えられます。合教科がいけないかとい

うと、現在でも合教科とすることは許容されるという理解が可能であって、こういう問題を作っていることになります。

つぎに、先が質問の後半部分に関わって、高等学校で指導すべきかどうかというところに繋がってきます。指導できない問題を出してはいけないということはないのだろうと思いますが、行き過ぎてくると、高等学校の先生にはいくらか混乱が生じるかと思いますが、生徒たちが混乱してその混乱が高等学校の教育の混乱を招くとなると、それは大いに気を使うべきこととなります。先生について言ったことは、指導についてできないことはできないと言いうことができるところで、できるかのような言い方をすると問題があるのではないかということです。分からないものは分からないといい、そのうえであなたならどうするかということをおうことも重要なことでしょう。この点については、大学の入試試験というものはやっていけば満点に近い答えが出るものだという発想を打ち破ってみる、ここまで書いてあったらこの点数というように点数をつけるということに対して大いなる疑問が提示されているのだと理解しております。

田中光晴講師（討議司会）：

阿部先生、いかがですか。

阿部淳校長：

大学の先生方がおっしゃっていることは、取る側からすればそうですけれども、だからといって高校が何もしないで、まず自由にやりなさいというわけにもいかないのです。確かにできるふりをしながら、私はやっています。他の方はどうか分からないですけれども。だから国語の先生ばかりではなくて、うちの高校の場合であれば、あるいは多くの高校では全職員があたりますよというような言い方で行くしかないというふうには思っています。

例えばある大学における小論文等の題材の分

野ごとに対して、それに近い専門性のある先生方が指導するというのは、恐らくどこの高校でもやっていることではないかと思います。実際に指導の中で感じることは、いわゆる知識とか読書をしていないねとかそれだから書けないよねという話になるわけですが、私がいつも思うのは、本を読ませているのですかあなたたちはと、自分は棚に上げて職員に言っているのですが、課題を与えてほとんどの時間ずっと勉強をさせていて、読書や新聞を読む時間はあるのかと。それで最後、3年生の時になって小論文を指導して、本当に本を読んでないなと。何で今ごろ言うのかと。もっと前から分かっているでしょうというのは、実はいわゆるトップ校ではない学校に勤務した人間の本音であります。でもそういう中でもやはり時間を見つけて本を読んで、様々な事実や知識を積み上げている子たち、それから大学が求めているものに対して耐えられるような子たちが、そういったものに挑戦していくと。その中で私たちができるものというのは、例えばある程度の書き方の決まりや、こういうふうに書いたほうが分かるのではないかとといったようなところに、いわゆる高校教諭としてできることについて指導しているというのが、現状です。私は、話は変わりますが、例えば志望理由書などというものを見る時でも、これまで何をしてきたのかという事実をどれだけまとめあげられるかと、それからこれから何をしたいかという未来の想像性、想像を実際に述べて書けるか、そういったところをやはりぎりぎり高校生としてできることではないかと。事実と想像をどういうふうにアピールできるかということを加えて、あとは課題に対してどう取り組むかという選択肢を指導していくことくらいかと思います。恐らくフロアの皆さんのほうがたくさんご意見があるのではないかと思います。

田中光晴講師（討議司会）：

清水先生、お願いしたいのですが、清水先生

の今日のお話の中で小論文の指導の具体例を少し出していただいたのですが、例えば小規模校、例えばトップ校ではないようなところでは、指導体制の組み方というのも難しいのではないかと。というご質問をいただいております、そのあたりも含めてお答えいただきたいと思います。

清水和弘副校長：

おっしゃる通りだと思います。ほとんどの学校が小論文委員会みたいな体制を取られていて、そして傾向が変わった問題などを集めながら冊子にされて、1年生の時のある一定の時期に小論文の指導をなさいと、大体夏休みの前が多いと思うのですが、1年生の夏休みに課題を出させる、あるいは小論文コンクールみたいなものを開催するということで、啓発をされているという状況だと思います。

それで、これは妙な話ですが、小論文の指導に非常に長けた、最先端に行く学校を訪問すると、異口同音おっしゃることは、無理をしないほうがいいですよ。つまり全員の先生たちを対象にして小論文をがんがんやると、先生たちが追い付かなくなる。その反動を考えた時に、もっと緩やかに指導することを考えないと、長続きしませんよと言われました。確かにそうですね。

また別の学校の例ですが、非常に小論文に熱心な先生がひとりいらっしゃって、その先生ががんがん生徒を引っ張る。そしてたくさん課題を出されるのです。これも読みなさいあれも読みなさい。知っている知識すべてをその子に注入しようとする。その子は他の勉強をしなくなる。こういう問題が校内であるので、やはり指導体制を組織として組まなければいけなくなる。ところが、うちみたいに現役の生徒だけで450～500名ほどセンターを受ける、つまり国公立に300～350名受けていく、先ほどみたいに全国に散っていく、そうすると、AO入試の問題であるとか面接の問題であるとか、全部報告書を出させています。それを義務付けています。

そうするとうちでは基本的にここの大学のここの学部、ここの学科はこういう面接をしてこういう質問をしてくるなというのが分かってくるのですが、小規模校になるとそれが出来ないのではないか。そうした大規模校とそうではないところの差というのはどうしても出てくるし、先生の熱心さによってまた差が出てくるような気がします。これは、教科の問題ではないからこうなるのです。

ですから私が先ほど言ったのは、これは合科目にしる、合教科にしる、教科横断型にしる、そのようになっていくであろうと思うのですが、懸念されることは、これが主流になっていくのか、そこがもっと高等学校の先生の現状と大学の出題される先生方との意見交換といえますか、きちんとした意見のすり合わせが必要なのではないかという気がします。特に、こういうふうな後期だけの問題ではないのです。今、生徒が後期を受けたがらないのは小論文がめんどくさいからです。本当に後期を受けたがらないのです。出願はさせるのですが受けないで、前期の試験の段階で気持ちが切れてしまっているのです。その中に小論文の指導を、わずか10日～2週間の間で叩きこもうとするわけですが、それは無理な話です。そして結局その小論文が大変重荷になってきているという現実、否めないのではないかという感じはします。大変苦慮しています。

木南敦教授：

この点については、すべての人が小論文に向いているわけではないので、全受験者に小論文を課すという方策を取った大学は、志願者が減ることになります。これが歯止めとして作用します。同じ大学の学部で募集の一部分については小論文を課していることは、賢明な選択をしていることになります。これに向いている人が出願してくようになってきます。前期日程より先に実施することもひとつの手でとしようし、後期で実施するのも手だと思います。不得意な

人が大勢小論文の課される試験を受けると、それで合否が決まらなくなります。センター試験の点数で決まってしまうことになります。

このように考えてみれば、小論文あるいは論文は、ゆとりのある受験生がそのゆとりを活用して、リターンを得るための方法であるということが担保されていないと、現状では大変なことになるのではないかと思います。京都大学法学部では後期日程で小論文という試験をしていますけれども、志願者が多く試験会場を確保することに困らないように、実際は15倍くらいのところで第一段階の絞りをかけていて、欠席者は多いものの大勢が受験しています。募集人員20名に対して、去年は約130名が、今年は100名弱が受験しました。このような受験者は、前期日程で小論文のない試験を受けています。心配されるのは、すべての大学が、小論文が望ましいと思って個別試験に導入すると大変なことにならないかということです。また、新テストの記述式の問題で問われることが、教科を超えた幅広い内容が日本語で与えられて、日本語で答えるとなると、これは全受験者が小論文に相当するようなことに解答するように求められます。まだ決まっていませんけれども、新テストにおいて国語の記述問題の素材がどのようになるかということのほうが、国語の先生は心配されているだろうと思います。

清水和弘副校長：

木南先生に喧嘩を売っているわけではもちろんないのですが、小論文がいけないと言っているわけではないのです。そしてこれは子どもたちが、例えば自分が小論文の力があるとかないとかいう判断自体も分からない状況でいるのです。ですから、当然全員に指導してみて、その中で本人たちに、AO入試に行くのかどうかという選択をさせることになるわけです。なので、出来る子たちだけ集めればいいのかという問題ではないということがひとつ。それとそもそも高大接続で問題になったのは、ボリュームゾーンの

子どもたちの学力の保障ではなかったか。

私は個人的に小論文の「小」という言葉が非常に嫌いで、論述と言ってくださいとあちこちで言っているのですが、ここではとりあえず小論文としておきます。その小論文のレベルといえますか、もっと分かりやすいといえますか、その基本には読解力が必ずあるはずで、ですから読解力をきちんと問うたうえでの論述という問題がありうるのではないかと。そしてその論述という場合には、必ずしも記述ではなくてもいいのではないかと。読解力の問題です。読解というのが必ずしも記述でなくてもいいのではないかというふうに私は考えています。ですからひとつのパターンとして複数の文章を読ませて、そしてその内容をマークで問うてそしてその総合的な内容を記述で述べさせる。それも非常に優しいといえますか、多くの子どもたちが対応できる論述の問題というのが、開発されてもいいのではないかと考えているのです。ですから、得意な大学の特殊な学科を受けさせるためにという意味ではないということだけはぜひ考えていただきたい。

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございます。それではフロアの方々から意見を伺っていきしたいと思います。発言の際は所属とお名前をおっしゃってください。それでは挙手をお願いします。ご意見、ご質問のある方は挙手をお願いします。

宮本友弘准教授（討議司会）：

いかがでしょうか。

田中光晴講師（討議司会）：

よろしいですかね。それではもう少し質問票に沿って続けさせていただきます。最後に先生方に一言ずつ伺いたいということなのですが、今日、倉元先生の方から、いわゆる新テストの導入もそうなのですが、個別大学の入試改革を進める上で、やはり共通テストとのセットとい

う意味で、テクニカルな問題が提起されていました。それは日程の問題です。この日程というのは、いわゆる共通テスト、新テストの方の結果がいつ分かるかによって、大学の方のやはり試験の形態っていうものが、あるいは時期も変わってくると。それに対する質問が少しありましたので、これについて最後にご意見を伺いたいと思います。これを大学がまずどう受け取るのかということと、高校の方では、前期日程をこれ以上後ろに下げるとは可能かということですね。前期日程を後ろに下げた時に、どのような影響を指導におよぼされるのかということも、少し最後、簡単に触れていただきたいというふうに思います。

倉元直樹教授：

どういう立場で答えるか、ということになってしまいうんですけれども、結局、先程申し上げましたように、日程を決めているのは国立大学協会であり、それは最終的に入学者の確定は年度内に行うというのは原則なので、そこから遡って日にちが決まっているわけですよね。それを個別大学の立場でどうということ、今、私の立場で言うことはなかなか難しいですし、実際、他大学、国立大学全体の事情を知らないもので、どこまで引き下げるかということに関しては、なかなかちょっと責任を持ってお答えはできないところです。

ただ、今の仕組みに関して言えば、センター試験にしても私どもの AOⅢ期にしても、かなりそれなりにギリギリに詰めて考えて出来上がっている日程です。この後、もしかすると国立大学協会の方で議論があるのかもしれませんが、それに応じて稼げるのが何日か、というような話になってくるんじゃないかなというふうに思います。

繰り返しになりますけれども、そもそもの入試改革の前提というのは、私どもの仕組みを一つかなり参考にして考えられてきたというところがあるので、基本的にはこれを崩されること

はない、という前提でものを考えたいと思っています。その中で、もう一度、よい試験問題の在り方とはなにか、全体として「相互関係の原則」、「育成の原則」というものを重要視した仕組みがどうなっていくのか、というようなことは、今後、多分、様々な立場から色々な意見があがってくるし、私どもとしては、そこの制約の中でものを決めていくしかないかな、と考えます。

直接的な答えにはなっていないかもしれませんが、けれども、そんなところかなと思います。

木南敦教授：

国立大学の入試日程は国立大学協会で決められて、文部科学省の大学入学者選抜実施要項に国立大学協会実施されるとされていますので、なにか言っても仕方がないことだと思われま

す。それよりも記述式問題には自己採点という課題があります。受験生が自己採点なしに共通テストをきちんと使うことができるかということです。受験生の側が上手に使えなければ、それに伴う影響は、良いものも悪いものも大学にもすべて及びます。本来はテスト成績を通知してから出願できるようにすることが一番だと思います。そうしようと思ったらできそうでも、そうしていないと言ってもいいかもしれませんが、そのようにしていませんから、自己採点は極めて重要になっています。自己採点の結果を見てから、どの大学に出願するかということを決めている人は相当数いるでしょうし、同じ大学でも学部を選ぶ人がいます。こうする人たちについては、その行動というのはもっともな行動なのですから、どういうふうにしてこれが今後も続けられるようにするは、やはり日程の問題の中でも一番重要になります。

共通テストが終わって本人に成績を開示したあとに出願ができるのが正しいやり方のようにも考えられます。こういうことを抜きにして日程の話をしてもしようがないような気がしてきます。もう一つは、大学は年度と言いますけれ

ども、現在、大学入学者選抜実施要領には4月20日までに合格者の決定発表と書いてあります。4月1日に入学者が確定していなくても差し支えないとされていますから、そういうことも活用して大学のカレンダーを立てることも不都合が生じるものの、できないことはありません。こう考えていきますと、日程の根本問題は、いつから何を始めるのかということについて考え直そうということではないかと思います。

阿部淳校長：

高校でどうかって、やれって言われた通りにやるしかないわけですけど、高校にあるのは、3月に卒業式と高校入試があるってことです。だから、今いる生徒たちだけじゃなくて、大学もそうかもしれないけれども、新しく来る生徒たちを迎える準備っていうのも我々にとっては大きな仕事です。これが例えば、いわゆる二次試験を受ける生徒たちの指導を、一切しなくてもいいような環境におかれている高校っていうがどれだけあるかって言ったら、まあないでしょう。もし我々がそれを拒否したとしたら、それ自体が非常に問題があるのではないかなというふうに思います。

しかしながら、本当に短期間の中で自己採点をして、その自己採点さえ怪しい生徒たちに進路指導をしているわけです。これが記述式で採点基準が公表されて、そして「先生、これはどうなの？」「これはどうなんですか？」と、いちいち全部に「これはどうなんですか？」って。しかも、80から120字が3問程度、数学では数式等を3問程度予定しているという、5月10日の読売新聞にありました。そして、24年度からは地歴公民や理科にも導入すると。これは本当に自己採点やった後に何日でこれ、っていうことをされたときに、おそらく学校の、高校の行事をまた考えなきゃならないんだろうなというふうなことを思いますし、もともととして、東北地方の公立高校の教員として、いわゆる塾とか予備校の数が限られる中で、あらゆること

をしているというふうに私たちは思っています。ですから、ひょっとしたら出席日数等も全く考慮しない学校が、いや、ないとは思いますが。でも、ひょっとして11月の試験で終わったら、あと60日くらい休んでも大丈夫な生徒たちは学校に来ませんよ。でも、そういうことをするのは公立の学校の使命じゃないじゃないです。やっぱり最後まで一緒に勉強したいっていう、そここのところを考えてもらいたいなと。ですから、日程、今の1月だって本当はギリギリ譲りたくないところで、本当はもっともっと勉強しなきゃならないところの部分で、センター試験というところで一区切りさせられているっていうのは、つらいものであると。そこにこういうふうなものが加わる。しかも、誰も何も見えない段階で話をしているのは不思議なんですけれども、でも本当に困っているなというふうに思います。しかも、さっき中学校の話をちょっとしたんですけれど、やっぱり中学校、基礎力って高校でつけるものなのかって。中学校とか小学校の協力がなくてはならないものに対して、でも中学校の先生方はもっと大変だろうなというふうには思いながら、この後中高の連携っていうのはどうなのかなと。一貫校はいいなとずっと思っているんですけど、大胆なことができるんだろうなと。

清水和弘副校長：

小心者ですから大胆なことが言えないのですが、やっぱり日程の問題がその問題であるよりも、その記述の問題が問題だということなので、そもそもの高大接続の問題点は、要するに大学入試センターの問題とか個別大学の問題とか、同じその学力値を問うているのではないかという問題であったはずで、そこにもっと思考力とか判断力だとか、要するに知識だけじゃないものを問うべきだという議論が最初にあったはずなんです。それは記述でないとできないのか。三十数年教師をやっていて、マークで十分対応できるし、PISAの問題にしろ、お隣の韓

国が行っている大学修能テストですね。ああいう問題を見ても、決して知識だけの問題じゃない問題がマークできちゃんとできているわけですから、それはそれで僕は改革はすべきだと言っているんです。

そういう意味で、読解力の範疇が変わっているということ。これは素直に認めなければいけないし、それを広げていく努力を我々はしなきゃいけないというのは言っているんです。ただ、それが記述なのかとなると話は違う。ですから、もし仮にまだ発表されていないですけれども、今回みたいな叩き台みたいな問題が出てくると、記述としての対応は先程僕があえて言ったことを変えないと思います。あえて言うなら、設問をよく見て答案に入れる言葉を先に書きなさいというぐらいの程度ですか。そういう思考力ではなからうという気がするんですね。ですから、そのことも含めて、その日程の問題ではなくってやはり出題の形式の問題、これはやっぱりネックになっているのではないかと。そのように考えています。

山地弘起試験・研究副統括官：

個人の立場でお話させていただければと思うんですけども、記述式が前面に出てきた背景にあるのは、センター試験を刷新したいという力だと思うんですね。しかし、毎年センター試験を実施した後に、関連した学協会や高校の先生方から各科目の試験問題の評価を受けていますが、そのときに、思考力を測っていない問題だから変えた方がいい、という意見はほとんどないんですね。とりあえず共通試験として条件は満たしているといえます。もちろん改善点がないわけではないので、そういうところはいろいろ出してもらいますが、少なくとも、記憶だけを試しているというような、つまり思考力・判断力を見ていないというような、そういう批判はほとんどないということです。もちろん科目によって温度差はありますが、

逆にその記述式、今のような形で五十数万人

の採点が公平にできるような記述式をやるということになると、そういう記述式のトレーニングが始まったときに、それこそ思考力ではなくて、やはり効率よく得点するための技術が重要視されて、先程ありましたような攻略志向に行かざるを得ない。ハイスタークな競争試験でありますから、その方向はやっぱり強まってしまう。高校時代の生徒たちはやることはいっぱいあるわけですから、十分それらがやれるには、こういうフィルターをかけるような機会にはコンパクトであればあるほどいいというふうに個人的には思っていますので、そういう高大接続のあり方を展望できればと願っています。

いずれにしても、今の方向ができるだけ混乱のない方向に行くように、実施方針案が出て来たら、それに対して高校や大学の側から積極的にフィードバックを返していくということが非常に大事ではないかと思っています。以上です。

宮本友弘准教授（討議司会）：

ありがとうございました。議論も尽きないところなのですが、そろそろお時間なので、最後に倉元先生お願いします。

倉元直樹教授：

ちょっと全体のまとめをするつもりで考えていたんじゃないんですけど、試験問題をどういうふうにするのが良いのかと、それがどう機能しているのかということに、今、意識が行っているというのは、非常に重要なことだと思っています。ただ、即効性がある話ではないので申し上げなかったんですけども、実は、私どもが受けた委託事業の国語の中で、既に 1,200 名ほどの高校生に協力をしていただいて、今までのオーソドックスなセンター試験の問題、それから個別試験の問題、今のところ新テストの例がないので、「イメージ例」として公表された問題を実際に解いてもらって、それがどのぐらいの成績として返ってくるのかということと同

時に、子供たちに実際この問題は何を計っているのかを聞いています。

再来週、富山で行われる・・・入研協と呼んでいるのですが、・・・「全国大学入学者研究連絡協議会」というところで田中先生が発表予定のもので言うと、確かに、実は清水先生がおっしゃっていたように、記述式でなければ思考力を計れない、というような結果にはなっていないです。

私自身、東北大学に来る前に大学入試センターの研究開発部にいて、一番最後に実施した研究が「合教科・科目」の研究でした。客観式の問題を作って、やっぱり実際に解いてもらって、受験者に「何を計っているか」について聞いたときに、・・・「作る側」というのは色んなことを期待して作るわけですけども、・・・「解く側」は、結局、これは「知識しか測ってもらっていない」と受け取った、というような結果も出ています。・・・もし、そういった類の研究を大学入試センターで続けて実施してきて下さっていたら、現状は、また、少し違った状況になっていたのかも知れませんが、・・・今度は、私どもも含めて、「そういった研究をしましょう」というようなことで、文部科学省の方も（委託事業という形で）後押しをして下さっています。これが、今の状況に即効性があるかどうかは分からないんですけども、今後、今私たちが直面している状況、・・・もしかしたら、大変な困難かもしれない、・・・これを教訓にするような財産を残していけるんじゃないかな、というようなことは期待をしております。

全体のまとめということにはならなかったかも知れませんが、最後にこれだけはお伝えしたかったということをお話させていただいて、私の方はマイクを置きたいと思います。どうもありがとうございました。

宮本友弘准教授（討議司会）：

ありがとうございました。これで討議を終わらせたいと思います。どうもありがとうございました。

ました。5名の先生方には長時間に渡り大変ありがとうございました。

(拍手)

閉 会 の 辞

東北大学理事

花輪 公雄

【閉会の辞】

石上正敏特任教授(司会)：

それでは、ちょうど大体皆様のご協力のおかげで予定通り閉会を向かえることが出来ました。最後に、閉会の挨拶を東北大学理事 花輪公雄より申し上げます。

花輪公雄理事：

ご紹介いただきました教育担当理事の花輪でございます。閉めるにあたりましてご挨拶させていただきます。今日は午後一杯、1時から5時まで本当に熱い議論ありがとうございました。壇上の机の真ん中あたりで火花が散っていたような気がするんですけども、とってもいい議論ができたと思います。

この入試問題に関するフォーラム、3回目なんです。1回目の時は、今日の倉元教授の発表にありましたように、私はどうも議論が本当に子供たち、あの当時は中学校一年生の生徒なんですけれども、本当に威張れる議論をやっているんだろうか、そういうことに非常に疑問を感じまして、大学もやっぱりこういうふうにくんだ、ということを示さなければいけないのではないかということを、最後の挨拶で言った覚えがあります。昨年です。昨年は、議論が全部共通テストに限られているんですね。共通テストと個別大学のテストというのは補完し合うもので、お互い別の切り口で見る。こういう学生に入ってきて欲しいな、ということを見るのが個別学力テストのはずなんですけれども、その議論が置き去りになっているのではなかというコメントをさせていただきました。それで今日、この東北大学はこういうふうになりますということが倉元教授の方から話されたと思います。結論は共通テスト、多少は変わるんですけども、そんなに大きな変化はないんじゃないの



ということで、私たちは今までやってきた東北大学の入試制度を堂々と、多少変わるにしても続けましょうというのが基本だったと思います。

やっぱり私はこの間の議論というのは、中等教育、高等教育の歴史の中で、どうもまずいことをやっているんじゃないかって思えて仕方がないんですね。ちっとも透明でないし、ちっとも建設的でないし、非常に小手先のところだけで議論しているような気がいたします。今日の議論という意味ではありません。流れがそんなふうになるんですね。今中学3年生の生徒が大学入試になるときに変わります。本当にその子たちに今、我々はここにいるんだよと、これから議論するところはここで、その結果はこういう時期に分かりますって胸を張って言えるようなプロセスでやっていくべきではなかったかなと。やっていくべきであろうと。これからも。そんなふうに思います。これが私の一点目です。

木南先生の方から出た、東北大のAO志望者群どうやって作っていくんだ。今から3割まで東北大学は増やしたい。それを成功させるといのは、やはり志望者群を作ることだと思うんですね。じゃあ一体それはどうやって作るのってことなんですけれども、倉元先生のスライドの中に規格外のオープンキャンパスって書いてあったと思います。本学、7月の最終の週に二日間に渡りオープンキャンパスをやります。昨年度、64,000人来ました。これは国立大学で

はダントツです。その他に色んな説明会等々で本学の考え方を示しています。でも、それは表層的なものだと思うんですね。やはり、抽象的ですけども、東北大学が日本の中で、世界の中で、尊敬される大学、これになるのが一番だろうと思うんです。高校生が「あ、東北大学に行ってみたい」。それを聞いた親が「あ、いいね。東北大学、いいよ」。あるいは進路指導の先生方が「うん、東北大学、きっと伸ばしてくれるよ」。そういう大学にしていくのが一番かなと。それはもう大学の総力を上げてやっていくべきことだろうなというふうに思います。その通り順調にいけるかは分かりませんが、木南先生の質問に対しては、そんなふうな大学総力を上げて東北大学が尊敬される大学になることで、受験者を確保していきたいと、そんなふうにお答えしたいと思います。

ということで、今日は本当に、北は北海道から南は沖縄までと聞いていますけれども、多くのみなさんがこのフォーラムに参加して下さいましてありがとうございます。こちら、主催者側としても大変嬉しく思っています。今日の議論が今後の議論のなんらかの有益なものになるのであれば、主催者側としてはこんなに嬉しいことはありません。みなさん、どうもありがとうございました。

(拍手)

石上正敏特任教授(司会)：

以上をもちまして、本日のフォーラムを終了いたします。なお、アンケートの回収を受付で行っておりますので、ご協力をお願いいたします。お忘れ物のないよう、お気を付けてお帰り下さい。

講評

講評 1：第 26 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

青森県立青森東高等学校

教諭 宮本 直

1. はじめに

今回のフォーラムは、5月16日の文部科学省による新共通テストについての概要案（高大接続改革の進捗状況について）が発表される直前に実施された。新テストの詳細がわからないということが、濃すぎるまではいかなくても薄くはない霧でフォーラム参加者を包み込んでいた状況を作り出し、その中での手さぐり状態での発表や質疑であると感じた。

今回のテーマは『個別大学入試改革—東北大学の入試設計を事例として—』であり、大学ごとの二次個別試験やAO入試がどのように変化していくのか、その情報を求めて多くの参加者があったと思われる。

2. 基調講演

「新共通テストの下における東北大学学部入試の展望について」倉元直樹氏（東北大学）

東北大学高度教養教育・学生支援機構の倉元直樹教授の基調講演は、長年東北大学の入試設計に携わってきたキャリアに裏付けされた自信に満ちた、しかも分かりやすい基調講演にふさわしい内容であった。

冒頭に、「東北大学では現在まで積み上げてきた入試改革とその方針を今後も継続することになるだろう」という大局を示され、そしてその後の「東北大学の入試設計」についての中で、入試改革のモデルが東北大学のAO入試であったからと理由付けされている。このことは私も含めフォーラム参加者を安心させたに違いない。

東北大学の入試設計について、AO入試には5つの特徴があると説明され、それは東北大学のAO入試のパンフレットにも同じ文言で示されていた。また求める学生像について、一般入試とは差別化するが、学力水準は多様化させないと説明され、この考えが学力重視のAO入試

を支えていることを知ることができた。その1番目である「入試は思いを伝える場」という考えは、AO入試の得点開示にも表れており、出願書類、小論文試験、面接試験の区分ごとに得点を知ることができ、たとえ不合格でも自分の思いがどの程度伝わったのかを推測することができる。

倉元氏のように、長く入試選抜に携わってきた方にはすこぶる当然なのであろうが、基調講演の中で私が興味を持っていたのは「大学入試の諸原則」について触れられたところである。上述したAO入試についてと同様、アドミッション・ポリシー等の入試選抜において基本的考えがあることは当然であるが、それを完遂するための原則がいくつかあることを知れたのは、有意義であった。選抜が意味をもつための条件を示されたあと、募集優先の原則、育成の原則、妥協の原則を整理されて示されて、たいへん参考になった。

3. 現状報告について

はじめに、「京都から見える東北大学AO入試」というテーマで発表された京都大学の木南 敦氏は、京都大学と東北大学が競合関係にないことを話された後、大学に入ってからビジョンが大切であるとまとめられた。

次に秋田県立湯沢高等学校校長の阿部淳氏による「新しい入試制度に向けた高校の取組」という発表は、岩手・秋田両県20校でのアンケート調査の結果に基づく高校現場の現状を代表しうろ見識深い報告であり、感銘を受けた。東北大学の個別試験問題についても調査され、「高校側では個別試験問題を東北大学からのメッセージと受けとめています」という発言は、基調講演での倉元氏の発言と一致して、東北大学の入試がうまく機能しているのだと確認できた。

3 番目の現状報告は、福岡大学附属大濠中学校・高等学校副校長の清水和弘氏によるものであったが、国語教師の立場から主に小論文指導について発言された。AO推薦入試における学力テスト導入の功罪を比較して発表された。

4 番目の現状報告は、「センター試験、新テスト、高大接続」と題して、大学入試センター副統括官の山地弘起氏が発表された。センター試験志願者の2層構造化の話や、受験には使わないがセンター試験は受験するといった層がグラフ上に特徴として表れていることを興味深く聞いた。記述式の採点に関わる課題やマークシート問題に関わる課題や大学入試センターの果たしてきた役割について聞け、文部科学省主導の新テストへの複雑な思いに同感した。

4. 討議について

限られた時間の中、様々な話題について活発な討議が行われた。まず、「主体的協働的な学びを評価しないのか」という会場からの質問について「そもそも大学受験という試験を突破する生徒は主体性がないはずがない」「入試で測るのは難しい」等の大学側からの返答はある意味納得するものであるが、現在、高校現場では、主体的・協働的な学習を取り入れていることが課題となっているので出された質問であると察する。

次に、討議の時間においても、小論文についての意見が出され、多くの時間が割かれた。二次個別試験の受験科目として課される小論文は、受験科目として広く定着している。しかしあらためて考えてみると、確かに様々な問題があることに気づかされた。そもそも小論文という教科科目は学習指導要領上では存在せず、高校ではその指導の基本的なことは国語の時間に行われ、受験科目としての指導は、話題にもあったように各校で小論文委員会で割り振られ、全教科の教員が指導しているのが実態である。出題形式も課題文型やデータ読み取り型などがあるが、受験生にしてみれば明確な分野・範囲設定

されていない内容を出題され、それについての考えを問われる形だ。また、採点についても、限られた短い期間での採点は、内容よりも「指定文字数内で書かれているか」「誤字脱字がないか」等、ルールや条件に従っているか否かが重要視されていると感じている。また文字の上手い下手、読みやすさ読みにくさが採点に大きく作用するなどの話も聞かれ、小論文という入試科目で測りたい力が何なのか、実際それが測られているかは疑問になる点もある。そのような点で小論文が主流になってよいのかという問いかけは刺激的であり、各方面で十分検討してほしいことである。高校側の指導については、「高校は何もしない訳にはいかない」という阿部氏の言葉にすべて含まれている。今までの形のままの小論文が主流になるのではなく、出題にあたっては（例え合科目という考えをとる場合においても）学習指導要領にあるどの教科科目の内容に基づくのかを明確に示し、それについて論述して理解力や表現力をみるなどの観点を示すなど、十分な検討と工夫がなされるべきだ。

新しく導入が予定されている思考・判断を問うための記述式問題について、討議の時間だけでなくフォーラム全体を通して話題となった。現行の大学入試センター試験についても、『「思考・判断」をみていないという反省はない』という大学入試センターの山地氏の御発言を待たずとも、十分に思考力・判断力を問う問題が出題され、それらの力を測るという目的は十分に達していると感じる。またそれが、受験生のみならず教える教員にとってもメッセージになっている。そのような状況でマークシート方式を記述式に変えた場合、その得点分布にはどのような違いがでてくるのであろうか。どのような生徒が多く得点を取って合格し、どのような生徒が得点できずに不合格になっていくのか、そこに改革といえるほどの大きな差が出るのか疑問である。またマークシート方式と記述式で、その問題の得点率・難易度はどう変化するのか、実施する前にその見通しを知りたいところであ

る。

5. 最後に

今回のフォーラムは、昨年度の共通テストに関するものを受け、個別大学の入試改革をテーマとして実施された。参加された方々は、二次個別試験のこれからのありようについての情報を期待しての参加であっただろう。東北大学について言えば、入試改革とその方針は今まで積み上げてきたものと同じということであるが、前期日程の二次個別試験の出題科目になっている国語、数学、英語、理科について、出題の意図・作題の方針についても全く変化がないのであろうか。現状報告の中で話題になったように、東北大学の入試問題は、高校への強いメッセージとなっている。入試問題とその後を示される出題の意図を、多くの教員がしっかりと受け止めている。その中で少しでも変化があるのなら、その情報を少しでも知りたいと考えていた参加者も少なからずいたはずである。

新共通テストの実態が見えないという霏が、議論を共通テストに戻してしまい、フォーラムのテーマから推測する内容と若干のズレを感じたのは残念である。

最後に、このフォーラムに参加して東北大学の入試設計をはじめ、上述した事柄を深く考えることができ非常に有意義な時間であった。東北大学高等教育フォーラムには毎年、参加したいという思いを持ちながらかなえることができないでいたが、今回はじめて参加することができた。

参加の機会を頂いたことを東北大学のフォーラム関係者に深く感謝します。

講評 2：第 26 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

宮城県宮城第一高等学校
教諭 三文字 和史

1. はじめに

近い将来，劇的に社会が変化していくことは誰もが認めるところであろう．そんな社会を担い，そこで生きていく生徒に身に付けさせるべき資質や能力など新たな観点が答申されている．その観点から高大接続改革が進められている．従来であれば学力のみによる入試が主となっていた．しかし，この改革の実施によって多様な大学入試が実施されつつある昨今，生徒を送り出す側の高等学校と受け入れる側の大学との連携や情報共有や議論が大切になっている．そのような中で，入試改革のモデルとなっている東北大学が実施しているこのフォーラムは，大学側と高校側の情報共有・意見交換の場として非常に興味深く有り難い．この講評では，それぞれの発表のまとめは最小限度に留め，発表を受けて感じたままに思うところを書かせて頂いた。

2. 基調講演

新共通テストのもとにおける東北大学学部入試の展望

東北大学高度教養教育・学生支援機構

倉元 直樹 氏

(1) 東北大学の入試と指導

新たな大学入試の実施に向け方向性は理解できているものの詳細についてのイメージがなかなかできない現状にある．新共通テストの実施準備が進行中であるが，個別大学でも入試改革が徐々に進行している．それが大学によって多様な入試が行われる傾向にある．そんな中で高校現場として如何に生徒の希望進路実現に向け取組んでいけばよいのか．従来大学入試は，主に筆記試験による学力選抜が行われてきた．そこから，次第に推薦入試，AO入試による募集定員が増大し，知識のみ

ならず，その知識をいかに活用していくのか，最近では，如何に学習していくのかが問われる入試も見られる．そのような中であって，東北大学は前期入試を軸に学力重視の入試を今までもこれからも実施していくとのこと．また，AO入試にあっても学力重視を基盤に東北大学第一希望の生徒の獲得を狙っているとのこと．このことは，高等学校での我々の生徒への指導と合致するところである．10 数年前，勤務していた仙台市内進学校においてである．東北大学AO入試の出願生徒への志望理由書の作成指導をきっかけに，生徒に志望理由書を書かせることに踏み切った経緯がある．生徒に対して「大学合格がゴールではない．高校よりはるかに学びの多様性を持った大学で何を学び自分を伸ばしていくのか．将来の進路に対して自ら納得できるような根拠を持ってもらいたい．そして，その志望理由書作成過程で自分と社会との関わりを考えて欲しい」などの思いからである．すなわち，東北大学のAO入試が高校教育現場での進路指導の在り方のヒントになったのである．現在も「学力を付ける」と「明確な志望理由を持たせる」という 2 つの指導が私の進路指導の根幹である．

(2) 新共通テスト記述式問題について

東北大学の宮本・倉元両氏の検証から「国立大学の大部分において，80 字以上の記述式問題は課されており，また，『国語，小論文，総合問題のいずれも課さない募集人員は，全体の約 6 割にのぼる』（文部科学省，2016）」という事象だけを根拠にして，あたかも国立大学の一般入試個別学力検査では記述式問題があまり出題されていないかのような認識の下に現状の大学入試の問題点やあり方を議論し

ており、実態から乖離している」との結論を得た。

このことは、我々高校教員の感覚からもこの結論には十分納得できるものであった。改めて、新共通テストで記述式においては、その際に生じる様々な困難や課題を押し切ってまで実施する根拠を考えてしまう。生徒を指導するにあたって被る課題として、採点問題（ブレない採点が可能なのか？ブレない採点のための問題にならないのか？・・・）、生徒の自己採点問題（出願に向けて正確な自己採点ができるのか？・・・）、日程問題（新共通テストを利用したの推薦・AO入試は可能なのか？・・・）など。

3. 現状報告

3.1 京都から見える東北大学AO入試

京都大学大学院法学研究科教授

木南 敦 氏

京都大学の入試や出願者・入学者の出身地区について理解を深めることができた。京都大学の出願者・入学者は近畿地区からが約半数となっており、全国区からの出願者・入学者となっている東大と異なっていることが分かった。そのようなことから、京都大学と東北大学は競合関係にないということであった。後で調べたことだが、東北大学の後期日程試験を実施している経済、理学部を受験している生徒の中には、前期日程で京都大学を受験した生徒も少なくはないようである。

また、「特色入試」については、名称に過ぎず学部毎の入試となっているということであった。確かに、学部によって随分違う入試内容となっていることは知っていたが、学部間の特色入試に関して学内でのコンセンサスはあまりないようである。

3.2 新しい入試制度に向けた高校の取組

秋田県立湯沢高等学校 校長

阿部 淳 氏

新共通テストや新たなタイプの入試に向け、岩手県と秋田県の公立高校の取組についての報告がなされた。他の高校で、その対策はどれだけ進んでいるのか？どのように取組もうとしているのか？など知ることができる機会となった。報告によると、校内で話題にはなっているものの具体的な行動に移行していない学校が予想以上に多かった。個人的には若干の安堵感があった。やはり、具体的な状況が見えない現在、議論の俎上に載せる材料がないのが実態であろう。一方で文科省の掲げた高大接続改革の理念に基づいて、各大学は多様な個別入試を実施しつつある。特に、地方大学を中心に多くの出願書類や多種多様な選抜を実施する大学が多くなっている。例えば、講義を聴講させ、その内容についてのグループディスカッションなどである。高校の授業でもグループ内でディスカッションをさせる活動も行っている。しかし、入試としてのグループディスカッションとなるとそれなりの“訓練”も必要である。つまり、教科学力試験に例えると教科書から問題集による演習や課外講習などによって教科入試につなげている“訓練”である。従来の小論文と同様に教員、生徒双方に大きな負担となっている。授業が進んでいる中で、通常の学習ができずに出願書類やディスカッションに向けた対策に時間を費やされる。本末転倒としか言いようのない状況である。そのような中で、近年の推薦・AOによる入試結果においてSSH、SGH 指定校とで差が大きくなってきていると思われる。以前の学力による入学者選抜であればSSH、SGHの取組が入試結果に影響を及ぼすことがほとんど見受けられなかったのではないかと。

このように考えると、高大接続改革によって高校現場はその教育内容、教育手法を大きく転換することが迫られている。現状、地方大学へ進学者を多く輩出する高校ほど校内の新たな取組などの改革が進んでいると思われ

る。一方、難関大学への進学を狙う高校は、主に学力重視の姿勢で取組む傾向が見られる。今後、高校によってもその取組や特徴が大きくなることが予想される。

3.3 多様化する大学入試と高校現場 ―主に国語教師の立場から―

福岡大学附属大濠中学校・高等学校 副校長
清水 和弘 氏

マーク式及び記述式による入試について、そして推薦・AO入試で課される小論文について学校現場から率直な意見を聞くことができた。1つ1つの発表に気づかされることが多かった。

選択肢から正解を選ぶマーク式試験による弊害についてである。清水氏の報告によると国語で「選択肢に『絶対に』がある場合は正解ではない」など、選択肢を選ぶテクニックを教えるようになる。その結果、正確に文章を読解なくなるとのこと。

以前、次のような話を聞いたことがある。例えば4択問題では、選択肢を一応は全部読ませたいので、正解を①や②にはせず、とは言え④に正解を置くと露骨で意地悪なので、最後の選択肢の1つ前の③となる傾向にある。

近年テクニックを教える傾向が一層強くなってきたと思える。その一因に問題文や問題の分量が多くなり、時間との戦いが大きくなってきたためである。その結果、効率よく選択肢から正解を見つけ出すテクニックに主眼が置かれるようになっていく。以前の共通1次の時のように比較的ゆっくり解答させるような改善はなされなかったのか。

そんな中、小論文が入試で課されることに一定の意味はあるとのこと。しっかりと読ませることが大切であるからである。一方、AO入試等で課せられた小論文完成に際して、日常の時間を費やしてしまう。その割に、小論文の採点基準が明確でない。例えば「青春について述べよ」という課題があったという。

何をどのように評価しているのか？ また、よくある小論文の設問「筆者の考えに対してあなたの考えを述べよ」がある。ここで要求される筆者に対しての根拠のある反論は、かなりの資料や知識が必要であり高校生にとっては無理があるとのこと。小論文を使って何を問いたいのか考えてほしいとのこと。最近、小論文指導をしていて、生徒ではなく教師の思考力や表現力が問われていると言わざるを得ない状況である。そして、入試改革で今後出題が検討されている合教科・科目の問題は誰が指導するのか？ 現在、国語科教員が指導していることが多いが、小論文も高校にはない科目である。推薦・AO入試の拡大により教員の負担も増加している。多様化する大学入試は、進路指導をさせづらくしているとの発表であった。

すべてが頷ける発表であり、薄々感じていた点もあったが、これだけ小論文入試の評価について明確な発表を聞いたのは初めてであり、衝撃を受けた。また、本校でも推薦・AO入試出願生徒に対する指導に対しては、教員の負担が限界に近い状態である。今後、一層の拡大や多様化が進んだ際、指導の質を下げることなく生徒を如何に指導していくのが課題である。

3.4 センター試験・新テスト・高大接続

大学入試センター試験・研究副統括官

山地 弘起 氏

主に大学入試センターから見る新テストについての発表であった。そもそも新テストの実施主体が現存する大学入試センターではない。実際、どこが主体でやるのかわからないとのこと。ただ、新テスト実施に向け文科省との連携協力していく部署として平成29年4月に「新テスト実施企画部」なるものを設置した。センターが新テスト実施に向け、従来のセンター試験の総括が始まったばかりであり、具体的に現行センター試験の何が問題

なのか？次の新テストに向け改善できることは何か？などの議論が全くないままに新テスト実施に向けて準備が進められているとのこと。また、28年度11月400人、2月600人規模で実施されたフィージビリティ検証事業においては、国語・数学の記述式問題を大学生に解かせた。解答の出来、実施時間、自己採点、採点時間などを分析したものを、当初の予定では高大接続システム会議できちんと検討することになっていたが、まだ行われていないとのこと。また、現行センター試験で行われている30科目から新共通テストでは科目数を減らして実施することになっていたが、例えば、別冊問題「簿記・会計」「韓国語」「中国語」などどうするのか？担当者も非常に困っている。新しいものに向かったまま「待った」の状態であり、課題を抱えたままで困っているということ。

以上、報告について簡単にまとめたが、検証がなされないまま実施ありきで進んでいる。日本の教育を牽引する文科省が、PDCAサイクルを無視しての教育改革はいかなるものかと言わざるを得ない。

4. 討議

新入試制度の下で大学の個別試験は、どうなるのかという話題について興味深いところであった。

結局のところ、思考力・判断力・表現力を評価する新共通テストがいかなるテストになるのか？そして、受験生の得点がどうなるのか？ということが分からない限りは、各大学の個別試験の配点や問題について検討することができないとのこと。そのことが早期に提示できないことで困るのは、受験生はもちろん現場で指導する高校教員である。本当に早期に明確な試験例や実施方法について決定して欲しいところである。

小論文指導について、改めて清水氏から刺

激的であり頷ける発言があった。小論文指導は様々な課題がある。熱心な先生も問題である。生徒は教科科目の勉強が疎かにしてしまうからとのこと。また、大規模校と小規模校でも小論文指導に格差が出るとのこと。このような問題が発生する理由は、小論文が高校の教科ではないからである。今後、合教科合科目の出題なども検討されているようだが、これらが受験の主流になるべきではない。印象に残る言葉であった。

5. おわりに

今回の東北大教育フォーラムに参加して、新大学入試制度の問題点や疑問点について気づかされた。また、高校現場は将来を担う生徒を如何に教育して次のステージに送り出すべきかを考える機会となった。特に、多様化する大学入試に向け、高校が取り組むべきことが多く熱意だけで成し遂げることは難しい。学校全体で指導の目標や理念、手法を明確にしたうえで組織を挙げて実行していかなければならない。やがって、高校によってその特徴が一層鮮明になるのではないかと考える。進学校では、難関大学への進学を見据えた指導方針をとるのか、地方大学への進学を見据えた指導になるのかなどの差別化が図られるのかもしれない。また、受け入れる中学生やその保護者などに対しても高校の教育内容や目標を情報発信することになるかもしれない。高校版アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・デュプロマポリシーの明確化が迫られているようにも思われる。

講評 3：第 26 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

岩手県立黒沢尻北高等学校

教諭 及川 恵生

1. はじめに

さて、いよいよ来年度「大学入学希望者学力評価テスト」を受験する生徒が入学してくる。高校現場では、準備として模擬試験や適正テストなどの再考やカリキュラムの再編成などを含めた様々な動きをしなければならないのに、依然としてほとんどその方向性が見えないということは、どうしたものか？と言わざるを得ないと思っていた。

この資料を作成している間に、文部省から具体的な国語の記述問題、数学の記述問題などの例が発表されたが、実感として「本当に実施できるのか、プレテストを早く実施して様々な課題を見つけて欲しいものだ」と感じた。そのプレテストを実施後、「新テストの導入をもう少し見送る・・・」などとならないかなどと、淡い期待をしてしまうのはおかしいことだろうか？

2. 基調講演

新共通テストのもとにおける東北大学学部入試の展望

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授
倉元 直樹氏

倉元先生が言われる新共通テストは1月実施が良いということに賛成である。記述試験が行われたならば、入試センターが採点を行うのはもっともの筋だと考えるが本当に実施可能なのかと疑問に感じる。英語は将来的に資格・検定試験のみを活用していくだろうということだが、本当にその方法で良いのか？

地方と都市の格差もあるが、検定試験そのものにすでに差があるのではないのか？英検やTOEIC など、その生徒の好みや特性などもあるので、ひとつに限定しなくていいのかと

疑問を感じる？また検定料も馬鹿にならないなどの問題もあると感じる。

東北大学の入試は従来と同じく、一般入試とAO入試の2本柱でいくことには何の不平もない。どちらも学力重視であり、第一志望の学生を確保する入試であることは大変良いことだと思う。そして募集人員に対しAO入試3割を目指すとするが、このことにはいささかの要望がある。公平性を重視し、アドミッション・ポリシーに合致した志願者獲得を優先させた入試なので、仕方がないと感じるが、近年東北地区出身者の合格数が減っている現状を見るに、AO入試3割の中の0.5割でもいいので、東北地区出身者だけの枠でのAO入試の実施を検討してはもらえないだろうかと考えている。一般入試は完全に全国区なのでそのことは叶わないが、AO入試ならばそのことは可能だと考える。東北のセンター大学に東北出身者が少なくなっているという現状は、相応しくないと考えるのは間違いだろうか？

新共通テストの記述問題の導入があるが、目指すべき方向は個別試験で課されていない課することができないような能力を測る問題だと考えるということにも賛成ではある。しかし、記述力は何を測るのが目的かが明確に示されていない中での導入には反対である。

AO入試において、全学共通の筆記試験を中心に行っていくことを目指すことにも賛成である。東北大学が優秀な人材を育成している背景には、やはり良間で有り弁別性に優れた筆記試験にあると思っているからだ。全体を通して、東北大学が目指している方向性は大変分かり易く、将来性も備わっており共感できることが多いと感じた。益々、東北大学が日本のトップ大学に向かっていると感じた。

3. 現状報告 1

京都から見える東北大学 AO 入試

京都大学大学院法学研究科教授

木南 敦 氏

京都大学の志望者と東北大学の志望者の出身地域を調べても重なるという実態がないので、今後特色入試や AO 入試の定員拡大をしたとしても、影響が少ないと考えられるということだがその通りだと思う。また、従来 AO 入試にセンター試験の得点を加味した入試をしているが、新共通テストの場合でも導入すること自体には問題はないだろう。

京都大学が特色入試を導入して 2 年目が終了し、2 年間のその入試をまだ総括できる段階ではないだろうが、その答えはいずれ出てくる。東北大学が導入している AO 入試は長年に渡って実施されているので、その成果は素晴らしいものがあると私は感じている。京都大の特色入試で入学してくる学生も、人物学力優秀でグローバルリーダーとなって活躍する人材だと思われるので、今後がとても楽しみだ。

現状報告 2

新しい入試制度に向けた高校の取組

秋田県立湯沢高等学校

校長 阿部 淳 氏

高大接続改革にうまく対応するため、各校がどのような取り組みをしているかを探ることを目的としたアンケートを岩手県内 10 校、秋田県内 10 校に依頼した阿部先生の実行は現場にいる者にとって特に知りたいことであり、大変興味深く講演をお聞きした。

『学力評価テスト』に対する取組状況に関しては、管理職から話題提供や対応などの指示がある、または職員会議などで取り上げられているという高校は少なく、まだ本気で取り

組んでいない実態が分かった。すでに決まった具体的な取組や予定などがあるかという問いにも、決まっていない高校の方が多かった。取組例の中で新たなものとしては、新たな適正テストの実施、教育課程の検討などが挙げられており、本校も同様な状況にあるということが分かって、私自身胸をなで下ろしたのが本音である。そして、阿部先生は各校の生徒の記述力や教職員の指導体制などを勘案した時、『学力評価テスト』の実施に対してどのように考えるか？という問題に対して、「各高校現場での指導で十分対応できる。従来の指導で心配ない。」と断言された。考えてみれば、今までもどのような改革があっても確かに乗り越えてきた歴史がある。しかしそれは、改革しなければならない理由が分かったから、対応することが将来に有益だと感じているからこそその対応であって、今回の改革はよく分からないいううちに対応せざるを得ない感があり、本当に対応できるのか不安である。

そして結局多忙化に繋がり、徒労感が残る改革にだけはなあって欲しくない。そして阿部先生は仮に対応できても「進路実現を保証できるとは限らない」と言われたが、全くその通りだと思う。私が危惧しているのは、地方と都市の格差、中高一貫校と高校との格差が益々広がるのではないかということである。難関大学がよく言われるのは、地方の優秀な学生が欲しいということだ。でも今回の改革は、その実現から遠のいているように思えると言わざるを得ない。

私たち現場は、千差万別である。その現場の声をすべて聞くというのは無理だろうが、もし現場をよく分からない者同士が決めたこととすれば悲劇だとも思ったりする。東北大学が教育界の先頭に立って、文科省にメッセージを常に発信して欲しいと思った。

現状方向 3

多様化する大学入試と高校現場

一主に国語教師の立場から一

福岡大学附属大濠中学校・高等学校副校長

清水 和弘 氏

私立学校である福岡大学附属大濠中学校・高等学校に長年勤務し、進路実績も難関大も含めて相当の実績を上げている事実を知り、どれだけのご苦労があっただろうと察した。近年では医学部医学科や薬学部を目指す生徒が増えて、益々ご苦労が絶えないご様子だ。国語を専門とし、マークへの対応も年々早くから取り組まなければ追いつかないのが現実だと言われていた。確かに 80 分の中で膨大な問題を処理する能力を養うためには、仕方がないことなのだが、熟読する習慣がなくなるという弊害もあると聞き、その通りだろうと納得した。更に教員側も技術を教えることに力を注ぐなど、本末転倒の状況にもなっている実態もあると聞き、これは確かにセンター試験の弊害だなと感じた。

じっくり考えじっくり記述させることを重視した時間として、放課後課外を活用した志望校別の小論文対策を行っているということには驚かされた。どれだけの教員が必要なのだろう？どれだけの準備が必要なのだろう？など、本校では絶対に実施不可能と思ったからだ。そして、最近の小論文問題は重い小論文が増えてきている状況にも対応しているのだから更に驚きだ。

その重い小論文に清水先生は苦言を呈しておられた。膨大な時間と労力を必要とするし、ある生徒はそれをこなすために、他の勉強はせず小論文しか行わなくなるというケースもあるという。また、現在、記述力が叫ばれているので、資料読解型の小論文や教科横断型の小論文問題が多くなると考えられるが、「この複雑で重い小論文問題を誰が指導するのか？小論文という教科はない。そして思考

力をみるといっているが、どうやって見るのか？」とも言っておられた。今後の小論文の問題の方向性で、高校現場がさらなる困難さや課題を増やしていく可能性があるので、「大学側はもっと考えていって欲しい、そもそも小論文は何の学力を測っているのか？大学側がよくよく議論すべき」ということだと思った。私は数学科なので、小論文指導には全くのど素人であるので大変興味深く聞いた。そして清水先生が「小論文指導というのは、あまりぎっちりやらない方が現場としてはいいのだ」と、言われたのが様々なことを示唆していて大変印象的であった。

現状報告 4

センター試験・新テスト・高大接続

大学入試センター試験・研究副統括官

山地 弘起 氏

センター試験の目的は、大学が共同して実施することとする試験に関する業務を行うことであり、業務の一つに大学の入学者の選抜方法の改善に関する調査及び研究を行うことがあるそうだ。学力評価テストの研究は、その業務の一つだと思うが、我々（山地氏）も全く分からずこの時期まで来ているとのことだが、なぜだろう？

学力評価テストが行われるということだけは、はっきりしているということも疑問に感じる。前述したが、なぜ記述問題を導入する必要があるのか？そもそも誰が採点できるのか？その記述力は何を測るものなのか？センター試験に参加する大学は、年々増加している。センター試験の志願者も生徒数は減っているにも関わらず、現役志願者は増加する傾向にある。その中でセンター試験の成績を利用しない受験者（新参入受験者層）が全体の 23%いるそうだが、高校総括受験をしている場合が多いようであり、広く国民にセンター試験が受け入れられた証拠と言えよう。

大規模の共通テストのセンター試験がほぼ完成形に近づいている中、センター試験のどこが悪いのか、何が足りないというのか？個人的には好きな形式の試験ではないが、ビッグデータを扱う共通テストとしてはこの形式で試験を行うことが最善の策だと思う。そして、そこに記述式を導入すべきという本当の意味を理解させることができない以上、記述問題はやるべきではないと考える。

4. 討議

様々な意見が出て、討議されたが、印象に残ったのは秋田県湯沢高校の阿部先生の件だ。東北大学の一般試験について、「採点の透明性」を高くし採点基準を公表すべきという発言に、倉元先生の答えはノーだったが、私はすべての大学においても「採点の透明性」は必要な時代なのではないかと考える。それこそ記述力が叫ばれている中、大学側が求めている記述力というものは、その中から見えると思うからである。

5. おわりに

大学入試を改革することは高校現場には大きな影響を与えるが、小中学校の現場についてもどう変えていかなければならないかを議論すべきではなからうか？

私が住む東北は、高大な面積を持つ県が多く、僻地なども多く、それでなくとも教育格差は大きい。仮に都市部であっても中心部とその周辺との格差もある。小中現場での教育を受けた差は、生徒が歳を重ねれば重ねるほど大きくなり、高校現場にその問題を解消できる訳がない。今回の改革は高大接続改革であるが、私はむしろ小・中・高接続改革を図っていかねばならないと思うのだが、いかがだろうか？

講評 4：第 26 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

秋田県立秋田高等学校
教諭 遠藤 金吾

1. はじめに

今回のフォーラムのテーマは「個別大学の入試改革ー東北大学の入試設計を事例としてー」ということであるので、東北大学による選抜を受けた経験、東北大学の学部、大学院博士課程前期、後期と東北大学での教育を受けてきた経験、高校教員として東北大学を受験する生徒を指導している経験に基づいて本フォーラムの内容について講評していこうと思う。フォーラム自体の内容は本冊子に全て記載されており、各講演やディスカッションの内容は重複してしまうので本稿では詳細には記述しない。それぞれの項目を参照されたい。

2. 募集優先の原則に関して

本フォーラムで東北大学高度教養教育・学生支援機構の倉元氏から、「東北大学の入試設計」を事例に入試に関して備えていなければならないいくつかの原則について説明があった。入試制度論の入門編の講義のようで、大変分かりやすく、なるほどと納得させられることばかりであったが、その中で特に私の印象に残ったものは「募集優先の原則＝オープンキャンパスを基軸とした入試広報の展開」の項目であった。現代の高校生は、オープンキャンパスや高大連携の様々な企画を通して大学を直接見たり体験することができ、その大学の教育内容はもちろん、どういう学生を求めているのか(アドミッション・ポリシー)も詳しく知ることができ、恵まれた時代になったと感じている。私は高校生の頃、漠然と遺伝子に関する研究をしたいと思い東北大学を志望した。当時(1990年代前半)は、インターネットも無く、オープンキャンパスのような大学公開の場も限られていたので、大学

に関する情報収集の手段は少なく、高校教員になって引率として東北大学のオープンキャンパスを訪れるたびに「このような機会が当時あったら遺伝子分野の研究に対してもっと具体的なイメージを持つことができただろうし、勉学に対するモチベーションももっと高まっただろう」と羨ましさを感じている。私はよく生徒に対して「教科書に記載されていることは既に誰かが発見した事項である。勉強とは既に解明されている知見を習得することである。研究とは新しい発見や開発を行うことであり、その過程で勉強も必要になるが、勉強と研究とは違う」と自分なりの考えを伝えている。高校生は毎日授業の中で教科書を使って「勉強」しているので、研究生活というものはイメージが湧きにくい。この冊子を読んでいる高校の先生方には是非伝えたいのだが、東北大学のオープンキャンパスを訪れる生徒さんたちに対して「東北大学は研究大学であり、大学生や大学院生も『研究(＝世界で誰もやっていないことへの挑戦)』をしていて、各学部で学生が自分の研究発表をしているからよく見てきてごらん。そして自分は『勉強』と『研究』のどちらに重点を置きたいのか、研究にはどんな能力が必要になるか、研究を通してどんな能力を伸ばせそうかを考えて来てごらん」と話していただくと東北大学のことをもっとよく理解できるのではないだろうか。また、東北大学入試センターの先生方には高校教員に対する啓蒙活動に今でもかなり力を注がれていると感じているが、是非ともこのまま高校教員に対して「研究とは何か」「研究大学たる東北大学はどういう大学か」といったことを広めていっていただきたい。高校生にとって大人の中でも日常的に接する高校教員からの影響というのはとても強い

らである。

3. 東北大学の一般入試に関して

私が現役生として大学受験した 1996 年入試、浪人生として受験した 1997 年入試のときは東北大学農学部には一般入試しか存在しなかった。今回のテーマは個別試験であるので、センター試験に関しては趣旨から少し外れることになるが、個別入試の設計において共通試験の存在は重要であるので記しておく。浪人生の時に受験した 1997 年センター試験では、新課程の移行措置によって設置された浪人生向けの「旧数学Ⅰ」「旧数学Ⅱ」で難易度が非常に高く、平均点が現役生の試験科目よりも大幅に下回る事態が発生した。得点調整は行われず、国公立大学の出願が終わってから「二段階選抜の取りやめ」が旧文部省から発表され、さらなる混乱を招いたというような年であった。本フォーラムで倉元氏から説明のあった「公平性（納得性）の原則」が実現できていない状況であったと言えよう（本フォーラムで倉元氏から「センター試験や国公立大個別入試の具体的な処理日程」の説明があり、これを聞いて初めて「あの時の事後処理がどうにもならなかったのは処理日程上も仕方のないことであったのか」と理解した）。不利な立場の浪人生としてこの事態に巻き込まれた私は「本来は東大や京大に出願していたであろう受験生が、二段階選抜を恐れて東北大学に志願先変更してきて争うことになるのでは？はた迷惑な話だ！」と憤慨した記憶がある。実際に入学してみると、医学部医学科を志望していた浪人生が「医学部は足切りになりそうだから、せめて生物学の研究ができる東北大学農学部へ…」と入学してきていたケースが見受けられた。このような学生は生物系学部では毎年ある一定数いるものであるが、私の学年では特に目立っていたように記憶している（正確な数字はわからないので主観であることを断っておく）。彼らの中には、「これも運命だ」と受け止めて前向き

に農学部の中で学問に向かっていく者もいたが、休学したり仮面浪人という方法で再受験に向かう学生もいた。「共通試験における試験の公平性（納得性）」が保てないと「募集優先の法則＝アドミッション・ポリシーに合致した受験者の獲得」も保つことができないという一例だと思う。もちろん、このようなことをくり返さないように、その後センター試験の制度や作問の工夫が繰り返されているのだと思うが、そのときの受験生にとっては人生が戻ってくるわけではない。また、1997 年のような事例が「一発勝負の弊害」と受け取られ、センター試験廃止の際の謳い文句の一つとして提示されているのかもしれないが、1 回の統一した試験でさえ科目間の難易度調整に職人的スキルを要するのに、複数回実施でそのようなことが尚更保てるのであろうか。現在のいわゆる新共通テスト議論に疑問を感じる（このようなことは平成 28 年度の本フォーラムでも議論されていることである）。是非とも新共通テストは個別入試も含めた入試全体の土台として十分な機能を持つ試験として設計されていくことに期待したい。

さて、本題の東北大学の個別試験について述べていく。東北大学理系学部における個別試験は英語、数学、理科 2 科目であり、農学部は配点や科目の中の問題数こそ変わったものの、この 20 年以上、試験科目に変わりはない。本フォーラムで倉元氏より「新共通テストへの記述式導入の是非の判断材料として国立大学の二次試験で国語、小論文、総合問題のいずれも課さない学部の募集人員は全体の 61.6%である調査結果が問題の根拠とされており、集計の仕方に問題がある」と発表があった。恐らくこの基準に基づくと東北大学の理系学部は「記述式を課していない」方にカウントされているのであろう。解法をゼロから記述していく数学の試験は紛れもなく記述式であろう。英作文も書いたし、化学や生物でも構造式を記述したり、数十～百文字程度の論述文を記述したりしたが、それも記

述式とカウントされていないというのは驚きである。この他にも大学入試センターの山地弘起氏からは「新共通テストの設計に関連して、作成を行っている組織から大学入試センターに対してこれまでの検証や反省点などを吸い上げるような要請は今のところない」というコメントにもまた驚きであった。これまでの大学入試を正確かつ詳細に分析すること無しにより良い入試は実現できないであろう。不安は募るばかりである。

さて、現在私が高校教員として受験指導に携わっている生物を例に個別試験の詳細な内容について述べていく。東北大学の生物は、私が受験生の頃から一貫して基礎知識を問う設問と思考力を試す問題がバランス良く出題されており、基礎知識の重要性を発信し続けていると受け取ることができる。どんな分野でも研究をするときには先行研究を事前に調べ、既存の事例に基づいて自分の実験や調査結果を判断する。知識のないところに思考はあり得ないし、新しい発見もできない。理系であったら実験の準備すらもままならないだろう。基礎知識とその運用である思考はどちらも重要なのである。新共通テストの議論において「暗記に頼った知識、技能ではなく思考力を問う形に」ということが言われている。かつて、センター試験「生物」で、高校の生物を勉強していなくても解くことができってしまう実験考察問題が出題されていた時期があり、「これでは高校で生物を学んでくる意味が無くなる」ということで、現在はセンター試験生物の出題内容に関しては基礎知識を踏まえた形になるように改善されてきている。本フォーラムの京都大学の木南氏の講演の中で「努力したら報われると思わせるような問題でなければいけない」という発言があったが、全くその通りであり、新共通テストには慎重な設計が望まれる。

次に、東北大学の個別試験の中で思考力を問う部分について記していく。2017 年前期入試で印象的な問題として、集団遺伝の次世代

予測を計算過程も含めてゼロから記述させていく問題がある。単なる公式代入ではなく、その計算がなぜ成り立つのかの根本を理解していないと立式できない問題で、原理原則を理解し、それに基づいて思考していく力を測定するには最適な問題である。出題者が知ってか知らずか、実は東北大学 2000 年前期で誘導付きだがほぼ同じことを計算させるソックリ問題があり、この 20 年近く東北大学が入学者に求める資質というのがほとんど変化していないということがこの事例から読み取れる。しかしながら、作問の仕方については年々工夫が凝らされており、年によっては長いリード文を読み、考察問題を解くことを通して「この生命現象はそもそもこういうことだったのか」と教員となった今でも改めて気づきを得るような美しい問題のこともある。研究大学の個別試験として、ぜひ現在の作問の方針を維持し、私たちを感動させる問題をこれからも出題し続けていただきたい。

4. 東北大学の AO 入試に関して

東北大学の AO 入試の設計については倉元氏の講演の中で詳細は述べられているが、意欲だけを見るような試験ではなく、確かな基礎学力を検査するということで、前述の「知識とその運用力」を見て、研究者としての資質の 1 つを見極める形になっている。本フォーラムで福岡大学附属大濠中学校・高等学校の清水氏が述べたような「一般入試と試験内容がかけ離れており、AO 入試の対策をやっていると一般入試で戦える学力をつける機会を逸する」という他大学の AO 入試とは一線を画する。基礎知識と思考力が一体となった基礎的な学力の重要性は既に前項で述べたが、研究大学として正しい入試設計であると感じる。清水氏の講演の中で「合教科・科目型の試験は高校教員が指導困難だからやめて欲しい」と述べていたが、私の意見は反対である。私の専門の生物に関して言うと、あらゆる生命現象の背景には物理法則や化学法則が存在

することになるので、合教科・科目的に思考しないと非常に浅い思考…それこそ根拠のない単なる暗記の羅列になってしまうだろう。また、実際に生命科学の研究を進めていく際には、得られたデータを統計処理して考察していくことが必要になるので、数学的素養も必要になる。また、「学際」という言葉が近年良く使われるように、様々な分野の複合領域での研究が盛んに行われているので、これからの時代の研究者には自分の専門分野に留まらず多面的に思考できないと異分野との共同研究を進めていくことはできないだろう。実際、物理・化学・生物・地学の教科書が新しく書き換わるたびに、それぞれの境界領域のような単元が次々に付け足されているのが実情である。このようなことを考えると、合教科・科目型の試験で総合的な知識やそれらを連携させて運用するような思考力を測定することが必要であると考えられるし、我々教員も自己研鑽を積み、様々な分野や知識の繋がりを意識した授業を日々展開して、社会からの要請に応えた人材育成をしていかなければならないだろう。

東北大学の AO 入試では、志願理由書や活動報告書、面接を通して東北大学や志願する学問分野に対する理解度を見ることで志望のミスマッチを防いだり、コミュニケーション能力や表現力などを確認することを行っている。大学院博士後期課程まで在籍して研究活動を経験して感じたのは、研究を進めていくためには様々な能力が必要だということである。例えば、「自分は人と接するのが苦手なので研究者になろうと思う」という生徒が時々いるが、実際は研究室では、日々指導教員や周囲の学生と共に考えたり、ディスカッションしたり、時には知識や実験技術を互いに教え合ったりして研究が進められていくので、コミュニケーションを円滑に行う能力が必要になる。また、研究成果を発表したり、研究計画を説明したりする場面でも表現力が必要になってくるので、そのような研究に必要な

様々な能力を多面的に評価する形として東北大学の AO 入試は非常に良くできていると感じている。受験生や高校教員の中には「志願理由書の準備や面接練習が大変である」と否定的な意見の方もいると思う。もちろん多様な人材がいることで社会は成り立つので全員が同じ人物像を目指す必要はないのだが、東北大学の AO 入試で問われている総合的な能力を持つ人物像は現代社会で強く求められているのではないだろうか。よって、このような入試形態が 1 つのモデルとして大学入試全体に波及していこうとしていることはごく自然なことであり、高校教員こそが意識を変えて、これに対応し社会からの人材育成の要請に応えていかなければならないと思う。

東北大学の AO 入試の合格者が入学後の学業成績が良好であることは良く知られたことである。そして、東北大学 AO 入試の初期の合格者は既に社会に出て様々な場面でその能力を発揮して活躍していると思われる。そこで、東北大学入試センターには AO 入試の合格者の学部卒業後、大学院修了後の追跡調査も行い、AO 入試の成果として公表していただくことをこの場を借りて提案したい。これを通して東北大学の AO 入試は研究大学の AO 入試のモデルとしてより広く社会から理解され、大学入試改革に一石を投じる材料となるのではないだろうか。

5. 最後に

今回のフォーラムでは、入試設計というものをも改めて考える機会になった。招待して下さった東北大学に感謝申し上げますと同時に、東北大学が今後の大学入試改革の 1 つの方向性を示す役割を続けていくことを応援していきたい。そして、未来の世界や日本を支えるより良い人材育成へと繋がる入試制度への改革が進められていくことを切に願う。

講評5：第26回東北大学高等教育フォーラムに参加して

山形県立米沢興譲館高等学校

教諭 廣瀬 辰平

1. はじめに

昨年度の本フォーラムで、高大接続システム改革会議「最終報告」（平成28年3月31日）を受け、センター試験を振り返り、「新共通テスト」（以下「新テスト」）のこれからを考えた。そして、教育の改善に向けた学習指導要領の改訂が順調に進む一方、「新テスト」の具体的な姿が見えないまま、いよいよ「新テスト」受験1期生を迎え入れる準備をする年になった。

今年度の本フォーラムは、個別大学の入試改革というテーマであった。共通試験である「新テスト」の具体性が見えない中での難しい議論になるが、個別大学の入試はどうあるべきか、改めて「入試」について考える機会をいただいたと考えている。

これまでの高大接続改革の流れを踏まえ、自分の現場での経験を交えながら、思ったところを記していきたい。なお、今回は個別大学の入試に主眼があったが、「新テスト」への議論も土台にあり、話題にすべきことも多く取り上げられたため、この講評の内容が拡散してしまい、読みにくい点多々あるかと思うが、ご容赦いただければと思う。

2. 基調講演

新共通テストの下における東北大学学部入試の展望

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授

倉元 直樹 氏

高校では、現在の中学3年生が受ける大学入試の仕組みに基づいてカリキュラムをデザインして、中学生やその保護者、教員に向けた説明をしなければならない。そのことを踏まえ、大学側はそのビジョンを示さなければならない。そのような立場を確認し、東北

大学の入試をもとにした講演であった。

倉元先生のお話の中で、大学入試の原則の中で、「相互関係の原則」というものがあった。入試は募集・選抜する側と志願者の相互関係で成立するということである。お話を伺っていて考えたことは、入試が大学と高校生をつないでおり、その仲介役に高校教員がいるということである。東北大学の入試は主にAOⅡ期、Ⅲ期、一般入試である。一貫して学力を重視しており、かつ第一志望の受験生のためのAO入試がある。実際に生徒を指導していて、AOⅡ期受験者は、志望理由について深めることで進学意志をさらに固め、個別に課される筆記試験に向けた学習で一般入試の個別学力試験への力を蓄え、面接で自分を語ることで自分をさらに知る経験をしていると実感している。

私は、高校現場で生徒を指導する際、「受験で使うから」という指導は極力しない。大学側からのメッセージを、アドミッション・ポリシーや実際の入試問題から読み取り、また直接お話しした先生方の考えを咀嚼しながら、生徒に入試に向かう必要性を説く。受験指導をしているという点では変わらないかもしれないが、受験に向かうことがいかに人間的成長につながるのか、大学との出会いがこれからの人生によく作用するか、その物語を語ることが教師の腕の見せ所だと考えている。その点で倉元先生のお話や、東北大学の入試の設計には、共感できること、勉強になることが多く含まれていると感じた。

入試がそのように長い歴史の中で手直しをされ、改善されてきたわけだが、その入試の一部を担っているセンター試験が「新テスト」に変わろうとしている。具体的な姿は見えないが、変化がもたらす影響は正負両面で

大きい。できるだけ負の面を生み出さない変更であって欲しい。

また、倉元先生は、記述式の導入への疑問と期待、日程問題について話された。特に記述式導入の根拠に用いられる、「個別大学の入試で国語、小論文、総合問題を課していない学部の新卒人員の割合」の調査結果（61.6%）に対して、「個別大学の入試で記述式を課している新卒人員の割合」の調査（87.5%）に基づき、前者の、共通試験における記述式導入について、根拠の妥当性に疑問を呈されていた。この調査結果に基づく説明は、納得のいくものであり、深く共感した。これと同じことをセンター試験への評価やアンケート結果にも感じる。それは、センター試験についての質問やアンケートに回答した人の中で、印象論ではなく、実際に問題を解き続け分析している人がどれだけいるのだろう、という疑問である。毎年解いている人にとって、暗記中心で思考力が図られていない、とか、受験テクニックで点数が取れてしまうといった批判が当たらないことは、すぐに気づくことだと思う。むしろ、出題意図が明示的で良問であることが多いため、教材としての機能も多く果たしてきたと言える。不毛な議論を引き起こさないためにも、実態を正しく表している数字なのかどうか、高校生が中心に据えられた議論なのかどうか、冷静に見つめる視点が大切だと、強く感じたお話であった。

3. 現状報告

3.1 京都から見える東北大学AO入試

京都大学大学院法学研究科教授

木南 敦 氏

京都大学の特色入試や入試一般のことに触れた説明と東北大学AO入試の今後について話された。

「努力したら報われるというイメージが大切である」や、「入試と大学進学後の動機

の関係」というお話しが印象的であった。

前項とも重複するが、入試はシステムだけではなく、問題や制度設計の意図を読み取り物語を与える高校教師の存在が必要だと考えている。受験に向かう努力の過程が合否結果に関わらず人間的成長をもたらすことを実感しているし、高校教師の指導が進学後の動機付けの土台にもなるのではないだろうか。システム自体が時間をかけて練られてきたものなら、その蓄積は大きなものだ。その点から考えても、どうしても「新テスト」への改革は拙速に思えてならない。理念は十分理解できるが、それが浸透し、制度が出来上がるまでは時間を要するし、長いビジョンで臨むべき問題だと感じた。

3.2 新しい入試制度に向けた高校の取組 秋田県立湯沢高校校長 阿部 淳 氏

「新テスト」及び東北大学の入試について岩手県、秋田県にとったアンケート結果に基づくお話であった。現場の声に基づき、頭の中が整理できた、非常に為になったお話であった。その中で、「新テスト」については全体のスケジュールが確定してから協議するという回答が高校現場の声を代弁しているという指摘があった。高大接続改革は大きな理念から出発して、多くの変更や霧散があり、現実的な着地点を模索するような形になってきた。拙速な対応で各校が積み上げてきたよい教育文化を崩さないようにするために、当然の考えであると共感した。

「新テスト」導入と個別大学の入試が受験生にとって混乱のないものにしていかなければならないことを考えると、議論の経過を追いつつも、情報を集め、個別大学入試については、高校側からの意見を伝えるなど、入試に対する考え方、情報の共有も図らなければならないと思う。そういった意味で、早く「新テスト」実施に伴う具体的かつ現実的な全体像を示してほしい、と率直に感じた。

また、東北大学の入試については、多くの先生方が、学習目標にすべき良問であると評価しているということだった。同感である。知識理解に基づいた思考力、正しく表現する力を問うた良問は、教材としても機能し、センター試験と補完関係にあると私はとらえている。従って、齟齬なく指導に当たることができているというのが実感である。

3.3 多様化する大学入試と高校現場—主に高校教師の立場から—

福岡大学付属大濠中学・高校副校長

清水 和弘 氏

国語の指導の立場から、実態に即したお話を頂いた。マーク型の問題演習の功罪として触れられていたことが、多くの分量を消化することができるが、生徒はどうしてもテクニックを求め、選択肢の末尾にこだわったり、趣旨問題から解くことで全体理解をしようとしたり、記述式の問題をやりたいがらなくなる、ということであった。思考力を測る問題ではあるが指導の中でデメリットも生じる。そのお話を伺って、教員の指導力向上の視点と、大学入試全体の制度がどのように教育現場に具体的に影響するかという視点の双方を持つ必要があると感じた。もちろん教師の努力として、テクニックがあればいいとか暗記すればいい（実際にそのような力で問題を解くことができるかどうかは別として）と生徒に思わせず、かつ入試で問われる明確な力をつける努力をしていかなければならない。しかし、マクロな視点に立った時、試験対策という指導は間違いなく存在していて、入試のシステムを変えるだけでは、あらたな試験対策を生むだけで、本質的な事は何も解決しない。今回の入試改革の様々な不具合は、その辺の視点の混線にあるように思う。

また、推薦・AO入試で学力試験も課す入試が増えているが、その功罪については、①学力なしで進学を狙う、といった安易な選択が

なくなる。②問題によっては、資料読解力や論理的思考力を測ることができる。③対策に迫られる。④採点基準が不明確。⑤多様化が狙いなのに、なぜセンター試験のような共通試験を用いるのか。を挙げられていた（①・②が功、③～⑤が罪）。また、一般入試における小論文や総合問題は様々な出題傾向があるが、教科を横断するような出題の際、誰が指導するのか、という現実的な問題が残るという話を伺って、やはり教員の指導力向上の視点と、入試の果たす役割という視点をどのように整理すべきか、考えるきっかけとなるお話であった。

3.4 センター試験・新テスト・高大接続大学入試センター研究副統括官

山地 弘起 氏

センター試験について、受験者数、成績利用者数に触れながら、センター試験の役割について総括されていた。その後、新テストについての課題を整理されていたが、主なポイントは、記述式の採点期間や自己採点の問題、各大学がどのように扱うか、などであった。また、センター試験が積み上げてきた、多くの配慮を実現した試験制度は引き継ぐことができるのかも大きなポイントである。まだまだ過渡的で、課題も多く残るが、解決しつつ、高校生へのウォッシュバック効果（正負両面）を検証しつつ、進めなければならないというお話であった。

「新テスト」がどのように具体的な形を持って実施されるかは、今もって不明瞭であるが、センター試験が積み上げてきた良さを引き継ぎ、改善される試験であることを強く望みながら、お話を伺っていた。

4. 討議 発表者によるパネルディスカッション

多くの議論がなされたが、センター試験や大学入試で主体性が図られていない、暗記型

である、など一般的な誤解や入試への限定的な評価に対する議論と、教科に分類されない指導をしなければならない入試（小論文や総合問題）では、学校間の差が大きく出てしまうといった議論が主であったように思う。

一つ感じたのは、選抜側のメッセージと受信側（つまりは高校生と高校教員）の接点をしっかり持つことが全てであるということである。

やや皮肉めいた言い方になるが、現在の入試改革が呼び水となり、多くの議論がなされている意味では、高大接続改革は進んでいると、私は認識している。

5. おわりに

本校では、SSHの計画の主眼として、コンピテンス基盤型の教育の試みがある。生徒の能力・資質、行動特性、意欲などを様々な観点から測定し、それが教育改善になるという仮説のもと進めようとしている。

校内の議論の中で、知識の量やパフォーマンスの評価、積極性や主体性など、本校の目指す教育方針に基づき、教員同士が議論した観点に基づき、具体的にどう評価し、指導に活かすかを考えているところである。その議論では、知識の量か思考力かといった二項対立的な考えはない。また、あらゆる教育活動の中で、入試に向かう学力が養われるし、その先の人生を歩む力を養う機会があると考えている。

校内で行ってきた議論を通して気付いたことは、今までの教育文化の中で培われてきたことは、生徒に力をつけるうえで大切なことであるし、今までの指導法が間違っていたわけではないということである。

今までの良いとされる指導実践の中には多くの学ぶべきものが詰まっている。そのことを考えるたびに、従前の指導と新しい指導法とか、知識・理解か思考力かといった二項対立的議論は不毛に思えてならない。従前の

指導でも良いものは良いし、目新しい指導の中でも空疎なものはあると思う。よりよい教育を目指した議論の積み上げの中で、現在の入試の良さと課題を検証し、具体的に入試がこう変わるとよい、という改革であれば私は賛成である。しかし、実際に可能かどうか、今まで積み上げてきた教育現場の実践とどのように結びつくか、今までの入試ではそれが図られていなかったのか、そういった議論がないまま、理念ばかりが先行し、混乱してきたように見える。その結果、先述した二項対立的な議論が生じたり、変化に対応するための多忙化への不安を招いてしまったりしているように思う。

本フォーラムに参加して、様々なことを考えるきっかけを頂いた。お話を伺って、なるほどと思うこと、今までの自分の考えで良かったと思うこと、反省しなければと思うこと。それだけ入試を考えることは奥が深く、自分の教育を振り替える機会になることに気付く。

教育とは多くの人が関わるもので、急激な改革よりは手直しのなのだと思う。制度疲労や時代にそぐわないことは出てくる当然であると思うが、だから「すぐに改革」ではなく、少しずつ手直しをすべきである。倉元先生がよくおっしゃる、「その年にたまたま受験した高校生が不利益になることはあってはならない」という考えをいつも思い浮かべる。

はじめに、で既に申し上げた通り、論点を整理しきれず、自分の現場での経験や考えたことを交えながら書き散らしてしまった。ただ、本フォーラムを通し、教育について考え続けたいと強く思い、その機会を与えていただいたことに感謝したい。

講評 6：第 26 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

福島県立安積高等学校
教諭 菅野 多美子

1. はじめに

今年度のフォーラムには全国から 400 名を超える参加者があり、東北大学高度教養教育・学生支援機構による大学入試の研究への関心の高さを実感した。高大接続改革の要である大学入学共通テストの概要やスケジュール案が提示されたものの、高校の現場では記述式問題の導入と英語の 4 技能評価にどう対応したらいいのか、動き出せずにいる。ようやく記述式問題の例題や外部の検定試験を活用する案など、具体的になった。しかし、国語と数学の記述問題では採点の基準や誰が採点するのか、大学はどう利用するのか、また、英語の検定試験は複数あり、大学がどの検定試験を指定するのか、受験生はどの試験をいつ受験するのがいいのか、受験機会や受験費用などの点で格差が生じないか、不安がある。来年度高校に入学する生徒が受験する新共通テストは高校や大学だけでなく、いわゆる受験産業にも大きな影響を与えることになる。

高大接続改革は、大学入試を変えることで高校の教育を変えようとするものだ。入試の知識偏重を見直し、思考力、判断力、表現力を測る問題を導入することで、高校の学習指導が変わる。思考力、表現力を評価するためマークシートではなく、記述式の解答を取り入れ、英語では表現力＝ライティング、スピーキングを含んだ評価法が必要になる。カリキュラム、授業や教科外の指導でどのようにして生徒の多面的な力を伸ばすのか、各高校の取組が問われている。

この入試改革のモデルになっている東北大学の AO 入試は、学力、思考力、判断力、

表現力を評価してきた。AO 入試問題を公表し、受験生に得点開示を行い、東北大学が求めている学生像を明らかにしている。また、一般入試でも、試験問題の出題意図と受験生の解答を分析し、大学が求める学力についてホームページ上で公表している。東北大学は様々な方法で高校にアドミッション・ポリシーを伝えており、高校の進路指導、学習指導の重要な指標となっている。昨年度の共通テストに的を絞ったフォーラムに続き、個別大学の入試改革—東北大学の入試設計を事例として—に関心が高まったのは当然だろう。

2. 基調講演

新共通テストのもとにおける東北大学学部入試の展望

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授
倉元 直樹 氏

倉元教授から、東北大学は現在まで積み上げてきた入試改革とその方針を継続するという力強いメッセージを受け取った。入学生を選抜する大学からの視点だけでなく、受験生からの視点も含まれた、大学入試の諸原則が提示された。特に、受験生が入試の可否に納得できるか、公平だと感じるかという観点は、心に響いた。受験生が自分の学習した成果を正當に評価されていると感じられるからこそ、アドミッション・ポリシーに合致する学生が集まることになる。入試の理念を外部に発信することで、高校でも大学が求める水準の学力を理解し、養成することができる。東北大学の AO 入試は、一般入試で合格できる学力を持つ受験

生を選抜しており、Ⅱ期、Ⅲ期ともに、成功している。

国公立大学の一般入試では、センター試験で幅広い基礎学力を測定し、個別試験で思考力、表現力を含む高い学力を測定している。国公立大学で「国語、小論文、総合問題」を課さない募集人員は6割を超えるが、2015年度一般入試個別試験問題の全科目を分析すると、記述式設問は87.5%あり、全く記述式を課されなかった募集人員は8.9%という報告だった。センター試験と個別試験を組み合わせた現在の選抜方法は、機能していると思われる。

記述式問題に対する期待と問題点も報告された。国語、数学の文章表現による記述式問題で測りたい能力と測れる能力はどのようなものか。出題者の意図とその採点・評価を受け取る大学の求める力は一致するのか。大学で分析・評価の研究が進められている。今後、プレテストの結果などに注目しなければならない。また、新共通テストには日程の問題も抱えている。大学入試センター試験は決して知識だけを問うものではなく、運営、実施面でも精巧に作り上げられたシステムである。「従来の財産を最大限生かし、迅速に方針を」という最後のスライドは参加者の賛同を得るものだった。

3. 現状報告

まず始めに、京都大学大学院法学研究科教授、木南敦氏が「京都から見える東北大学AO入試」を報告された。京都大学は特色入試を実施して2年になる。センター試験で基礎学力を担保し、総合問題、論述試験、学力試験など、各学部のアドミッション・ポリシーに基づいた2次選考を実施する。京都大学では、入学後の大学での学びを重視し、さらに卒業後の社会につなぐことを目標としている。『学びの設計書』が特徴である。高校で何を学んだか、大学で何

を学びたいか、それを社会でどう生かしたいかを具体的に書かせるものである。京都大学も東北大学も、AO入試で求める人材は、一般入試でも合格する学力を有し、自ら学んだ経験があり、将来を見つめ、チャレンジする意欲のある生徒である。

次に、秋田県立湯沢高等学校校長、阿部淳先生が「新しい入試制度に向けた高校の取組」というテーマで、岩手県と秋田県のそれぞれ10校にアンケートを実施し、回答を報告した。結果は、どれも同感するものであった。新共通テストへの取組についての現況は、学校として取り上げられている高校が6校、一部で話題になるものの全体の話題になっていない学校が10校、話題になっていない高校が4校という結果だった。十分な情報が得られない現状で、具体的な対策をたてることができず、様子を見ているしかない現状である。とはいえ、決定事項の記述式の問題への対策として、思考力や判断力を高めるために、授業でできること、学校でできること、それをどう実践していくか、検討しなければならない。意識の差が指導の差になり、結果となって現れることも懸念される。加えて、東北大学の個別試験問題についてのアンケート回答も報告された。東北大学を受験する生徒が多い学校では、東北大学に入学できる学力を日常の授業や学習で身に着けることが目標になっている。東北大学の個別試験は、高校に入学してほしい生徒の学力を明らかにしているという回答が多く、同感である。

3人目の報告者は清水和弘氏。福岡大学附属大濠中学校・高等学校副校長である。

「多様化する大学入試と高校現場」を具体的に生徒の進学指導の様子を語っていただいた。文系・理系それぞれの、センター試験＝マーク対策、二次試験＝記述対策、推薦入試、AO入試対策の時期は、おそらく大半の学校がほぼ同様の指導をされている

と思われる。センター試験対策はスピードが鍵である。ある程度の分量を素早く読み、選択肢を見分ける力が求められる。それに対して、推薦・AO入試の小論文では、資料読解力と表現力が問われる。教科横断型の小論文の場合、教員の指導力も問われることになる。小論文は国語科教員の指導ということではなく、すべての教科の教員が、小論文指導ができなければならない。現実的には一部の教員に偏りがちであるが、指導の体制を整えることが重要だ。

最後に、「センター試験・新テスト・高大接続」のテーマで、山地弘起氏、大学入試センター試験・研究副統括官が報告された。その中で、目を奪われたデータがあった。センター試験への参加大学数の推移を見ると、センター試験の現役志願率は平成21年から40%を超えている。その出願類型は、平成24年度では、国公立専願20%、国公立と私大の併願25%、私立大専願27%、センター試験の成績を利用しない受験生が23%という結果だ。もう一つの受験者層のグラフでは、約20万人が国公立大学を専願か併願で受験をするが、残りの志願者20万人は、私立大専願か、センター試験を利用しない受験者だというデータである。私立大学がセンター試験に参加して、受験者数が増えた。私立大学のセンター試験利用は、受験生をセンター試験の結果だけで合否を判定する。国公立大学の個別試験を前提とした、基礎学力の測定という本来の目的とは異なる用い方をされていることになる。国公立大学の受験生は、二次試験で思考力や表現力を試されている。私立大学のセンター試験利用の入試と状況が異なるのである。そう考えると、今回の新共通テストの記述問題の導入は必要があるのだろうかとか改めて疑問を感じた。さらに、山地氏からは、記述式の採点に関わる課題、マークシート問題にかかわる課題の報告もあり、高

校教員が不安、疑問に思っていることを、大学入試センターも理解しているということがわかった。研究機関である大学入試センターで、評価や測定など、分析を重ねて、記述問題を含む入試の透明性を高めてほしい。

4. おわりに

高校生にとって、入学から卒業までの3年間で心身ともに大きく成長する。高校生活は、限られた時間の中で、生徒を育てなければならない。3年間の先には大学での学びがあり、その希望を実現するには、大学入学試験を乗り越えなければならない。高校の学習指導で大学が求める学力を育成することが、高校の責任である。学習指導要領の変更の時期も、入試制度の変更の時期も、生徒が選んだわけではない。平成30年4月に高校に入学する生徒に対して、新しい入試制度に対応できるよう、十分な体制で受け入れたい。

しかし、現状は心もとない。急がなければならない。そのためには、情報が必要である。英語の外部試験が3年4月から12月までに2回受験可能になると、英語は入学から2年間でこのテストに対応しなければならないことになる。それぞれの大学がどの外部試験を利用するのか、個々の大学の情報が必要になる。本来、目的の異なる外部の試験を活用することで、評価に差はないのか、外部試験を受験する際の地域格差、或いは経済格差は生じないのか、センター試験と併用した場合、公平な入試になるのか、受験生や高校を安心させる情報が求められる。国語及び数学の記述試験に関しても、採点者は誰なのか、採点基準をどう設定するか、段階表示を大学がどう利用するか、などの情報は欠かせない。

これまでも、東北大学は、フォーラムを通して、入試に対する大学の考え方を伝え

てきた。大学も変革を求められ、自ら変革していることを積極的に伝えるこのフォーラムの意義は大きい。今後も入試や教育に関する研究の成果を発信し続けていただきたい。

アンケート・参加者統計

第 26 回東北大学高等教育フォーラムアンケート
(回収数 169, 回収率 %) ¹

1. 御所属

(1) 高校 : 106 名 (62.7%) (2) 大学 : 50 名 (29.6%) (3) その他 : 13 名 (7.7%)

2. フォーラムのテーマは如何でしたか.

(1) よかった : 129 名 (76.3%) (2) どちらとも言えない : 30 名 (17.8%)
(3) 改善すべき : 4 名 (2.4%)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか.

(1) よかった : 114 名 (67.5%) (2) どちらとも言えない : 40 名 (23.7%)
(3) 改善すべき : 9 名 (5.3%)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか.

(1) よかった : 112 名 (66.3%) (2) どちらとも言えない : 42 名 (24.2%)
(3) 改善すべき : 8 名 (4.7%)

5. ディスカッションは如何でしたか.

(1) よかった : 120 名 (71.0%) (2) どちらとも言えない : 27 名 (16.0%)
(3) 改善すべき : 3 名 (1.8%)

6. 時間は如何でしたか.

(1) 短すぎた : 7 名 (4.1%) (2) ちょうど良い : 140 名 (82.8%)
(3) 長すぎた : 13 名 (7.7%)

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか.

(後述)

8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください.

(後述)

ご協力ありがとうございました.

¹ ダブルマーク、無回答は個別の集計から除く.

アンケート自由記述

2. フォーラムのテーマはいかがでしたか²

- 全体設計の観点を意識できた（高校，よかった）
- 多くの関係者が求めるタイムリーなテーマである（高校，よかった）
- 興味と今後の展開が知りたかったため（高校，よかった）
- 3年目ではあるが、やはり必要なテーマ（高校，よかった）
- 他地区国立大、異校種の先生方の意見を聞いた（高校，よかった）
- 東北大学のAO入試、小論文等、入試改革について多くの考えが聞けた（高校，よかった）
- 今、高校現場で問題になっているテーマなので（高校，よかった）
- 新テストが現状であり議論が進んでいない状況がわかった（高校，よかった）
- 現在進行形であること（高校，よかった）
- 新テストで分かっている部分について、大学・高校の立場をみながら議論できていた（高校，よかった）
- 大切なテーマ。もう少し新しい情報がほしい（高校，よかった）
- 東北大学の入試設計そのものが注目に値するので、テーマを見て万障繰り上げて参加しました（高校，よかった）
- 高校として把握しておかなければならないさし迫った問題（高校，よかった）
- 評価テストの話が多すぎでした（高校，よかった）
- 進化の過程を聞くことができ参考になりました（高校，よかった）
- 高校現場が関心の高いテーマだから（高校，よかった）
- 大学入試の本質が見られました（高校，よかった）
- 今もっとも大きな問題の1つなので（高校，よかった）
- 正に、今、知りたい内容でよかった（高校，よかった）
- 今、まさに興味を持っている内容だから（高校，よかった）
- 個別大学の改革をききたかったから（高校，よかった）
- 大学サイドの考えも理解できる内容だと思った（高校，よかった）
- 今後の進路指導にいかせる内容であった（高校，よかった）
- 東北大の入試改革について、その取り組みがよく分かるテーマだった（高校，よかった）
- 各方面の方の立場や考えがよくわかりました（高校，よかった）
- 高校側の立場としては、個別大学の入試改革においては情報を得たいところだと思う。ただし、全国的な流れ（他大学の動向）も知りたいというところだと思う（高校，よかった）
- タイムリーです（高校，よかった）
- 大学入試（もしくは大学入試制度改革）の話なのか、今後の問題点をさぐるのか、今までの問題点から考えるのか理解しづらかった（高校，どちらとも言えない）
- 講演内容はとても良かったが、新テストの方針が決まる前では、どうしてもあ

² 末尾の括弧内は所属，選択された御意見。

いまいな内容となってしまうから（高校，どちらとも言えない）

- 新テストの形がはっきり見えない中である程度実施案が出て話しをすべきなのでは（高校，どちらとも言えない）
- センター試験の改革内容が見えない分、個別は具体的に方向へ（高校，どちらとも言えない）
- 具体的に入試制度が決定していないので（高校，どちらとも言えない）
- 来月にも新テストの実際案が発表されるが、次は個別試験テーマはよいが…発表前だからって感じ（高校，どちらとも言えない）
- 今後のことが、もっと具体的にわかるかと思っていたが、何もわからなかった（高校，改善すべき）
- 今回は一番実りがなかった（高校，改善すべき）
- もう少し具体的なならなおよかったですが。本音など（大学，よかった）
- 高校からの実状をよく理解できた（大学，よかった）
- 新テストが大変混乱していることが良く分かった。高校と大学の現状が良く分かった（大学，よかった）
- 正にトピックだから（大学，よかった）
- 現状を知ることができた（大学，よかった）
- 時宜を得た入試改革の動向に関心があった（大学，よかった）
- 時機を得ている（大学，よかった）
- 時宜にかなっている（大学，よかった）
- 皆の関心があるから（大学，よかった）
- いま入試改革については、とにかく情報が必要です（大学，よかった）
- トピックであった（大学，よかった）
- 大学のかかえる課題に合致している（大学，よかった）
- もう少し後の時期だと具体的な話になったかも（大学，よかった）
- 高大接続について大学、高校それぞれの立場から講演を聞いたこと（大学，よかった）
- 文科省からの発表前の割に、議論として（大学，よかった）
- タイムリーな話題でした（大学，よかった）
- 時宜にかなっている（大学，よかった）
- 新テストに関する新しい情報がほしい（大学，どちらとも言えない）
- テーマから離れた報告もありました（大学，どちらとも言えない）
- 入試改革のスケジュールや改革実施について知りたかった（大学，どちらとも言えない）
- 個別試験のあり方に集中した話題にすべきであった。学力が高い学生が入学する大学の話題が中心であるが、地方の国立大学が選抜をどのように工夫しようとしているかをテーマにしてもよいのではないのでしょうか（大学，どちらとも言えない）
- 入試改革は誰のためか、特任雇用拡大のためか、これからの子どものためか（大学，どちらとも言えない）
- 客寄せには良かったが、実際には東北大以外の方が多い（大学，どちらとも言えない）

- 時期的にまだ分からない事が多かった（大学，どちらとも言えない）
- 入試改革がもっと明確に知りたかった（大学，改善すべき）
- 全体的な問題のとらえと個別の問題の提示を往還していく視点は重要だと思ったので。問題点がより明確になりました（その他，よかった）
- 教育制度改革にかかわるテーマだったので（その他，よかった）
- 入試改革の進捗状況と各大学の取り組みを知りたいので妥当です（その他，よかった）
- 新入試制度に対する各校の取り組みを少し知ることができたことは大きかった。（阿部淳先生の講演）（その他，よかった）
- タイムリーだが新テスト発表後だとさらによかった（その他，よかった）
- 学力評価テストの実施をめぐる現状と全般的な課題が明確に打ち出していただいた内容だったと思います（その他，よかった）
- 個別試験に対する事例が少なかったように思われます（その他，どちらとも言えない）
- 最後のパネルディスカッションの進行(質問の選び方、時間の使い方) そもそも論ですが、今回のフォーラムで誰に何をどう伝えたかったのか？そのあたりの目的がわからなく、ザンネンでした（その他，改善すべき）

3. 基調講演者の発表は如何でしたか。

- 大切なメッセージを具体的に発していた（高校，よかった）
- 東北大学の入試改革への思いがよく伝わった（高校，よかった）
- 東北大学の入試の方式の意図が伝わった（高校，よかった）
- 日程スケジュールへの提言と記述力重視ということがわかった（高校，よかった）
- 入試設計についての大枠は理解できた。もう少し具体的な話があればなおよかった（高校，よかった）
- 特に倉元先生の説明は一つの指針としてとても参考になりました。ありがとうございます（高校，よかった）
- 東北大学の姿勢が改めて理解できた（高校，よかった）
- 東北大学の AO の方向性がよくわかりました（高校，よかった）
- AO について詳しく聞いた（高校，よかった）
- 分かりやすかった（高校，よかった）
- 若干トーンダウン気味でした（高校，よかった）
- AO 入試を中心に入試改革の堅実な進捗が表れていた（高校，よかった）
- 東北大学の入試の動きが見れて（聞けて）よかった（高校，よかった）
- 現状のまとめとして整理されていた（高校，よかった）
- 東北大学の入試についてよくわかった（高校，よかった）
- 論旨狙いが明確、もっとじっくり拝聴したい（高校，よかった）
- 東北大学を中心とした大学入試の見通し（高校，よかった）
- ポイントを押さえ明解（高校，よかった）
- 東北大学の個別試験の方向性がわかったから。(もう少し時間があってもよい)（高校，よかった）
- 大学側の基準が分かりよかったです（高校，よかった）

- 東北大の入試に関する基本的な考えを知ることができた。AO 試験のあり方を変える必要はない（高校，よかった）
- 未発表の踏み込んだ情報もあり、有意義でした（高校，よかった）
- 東北大の方向性がはっきりわかった（高校，よかった）
- 先が少しではあるがみえたので（AO の継続）（高校，よかった）
- 東北大学の方針を明確に聞けてよかったから（高校，よかった）
- 東北大学の取組を再確認することができてよかった（高校，よかった）
- わかりやすく、色々納得できる内容だった（高校，よかった）
- 新テストをむかえるにあたっての東北大が考える入試がわかったから（高校，よかった）
- 現状把握には良かった（高校，よかった）
- フォーラムのテーマに沿った内容であった（高校，よかった）
- 国立大が高大接続にどう向きあっているのかわかりました（高校，よかった）
- 東北大学の求めるもの、目指すものが伝わった。ただし、時間の関係もあり、もう少し聞きたかったと思う（高校，よかった）
- 東北大が入試で求めるものなどをとてもよく理解でき今後の生徒の指導にいかせる内容であった（高校，よかった）
- ですが、もう少し長い時間でもよかったのでは？（高校，よかった）
- 説明が分かりやすかった（高校，よかった）
- 倉元先生の話は、何回か聞かせていただきましたが、わかりやすく東北大の方針を伝えてもらってます（高校，よかった）
- 新テストの現状とそれぞれのお立場での問題点がわかった（高校，よかった）
- 詳細でわかりやすい（高校，よかった）
- AO 入試と数年後の入試の将来像がつながらなかった。（無理でしょうが…）ただ、学力を評価するという態度は是非残していただきたい（高校，どちらとも言えない）
- 講演内容はとても良かったが、新テストの方針が決まる前では、どうしてもあいまいな内容となってしまうから（高校，どちらとも言えない）
- ききとりにくかった（高校，どちらとも言えない）
- 理解できない話が多かった（高校，どちらとも言えない）
- 入試学？（高校，どちらとも言えない）
- 量のわりに時間が短く感じた（高校，どちらとも言えない）
- 話しの焦点が見えづらかった（高校，どちらとも言えない）
- 昨年と比べて新しい情報が少なかった（高校，どちらとも言えない）
- 2.の(2)に同じ、しかし、AO 導入のコンセプトは理解できた（今後も変わらないであろう）（高校，どちらとも言えない）
- AO を理解していない。第一志願者に W チャンスを与えるものではない（高校，どちらとも言えない）
- もう少し時間がほしい（高校，どちらとも言えない）
- 入試スケジュールの話は面白かったが、全体的に新しい情報が少なかった（高校，どちらとも言えない）
- いつも思いますが、前向きなお話はいただけないのでしょうか（高校，どちら

とも言えない)

- 再確認にはなったが、新たなことがなかった。東北大の入試の方向性が高校の立場からは望ましいと思う (高校, どちらとも言えない)
- マイクが聞きづらい (高校, どちらとも言えない)
- 早くて、分かりにくかった (高校, どちらとも言えない)
- 参考となる内容が少なかった (高校, どちらとも言えない)
- レジュメ以外の情報がなし (高校, 改善すべき)
- 入試改革の具体例を中心に講演を進めてほしかった (高校, 改善すべき)
- 定義ではなく、実際どうしたいのかをもっと聴きたかった (高校, 改善すべき)
- 高校教員としては、有益な情報がほぼ得られなかった (高校, 改善すべき)
- 東北大の入試へのスタンスがよくわかった (大学, よかった)
- 清水先生 (大学, よかった)
- 東北大学の姿勢がはっきり分かって良かったです (大学, よかった)
- どのような哲学が制度に通底しているか、よく理解できた (大学, よかった)
- 入試の課題を共通確認することができた (大学, よかった)
- 先導する東北大学の取り組みが伺えた (大学, よかった)
- 30%が限界 (大学, よかった)
- 東北大の AO について理解できた (大学, よかった)
- 東北大の入試のスタンスよくわかりました (大学, よかった)
- 東北大の AO 入試の構造がよくわかった (大学, よかった)
- 論理的な、明確な報告でした (大学, よかった)
- 説明が分かりやすかったです (大学, よかった)
- 手の内を示されたこと (大学, よかった)
- 改めて、東北大の入試がよくわかりました (大学, よかった)
- 方針がはっきりと述べられた (大学, よかった)
- 東北大の AO 入試の仕組がよくわかった (大学, よかった)
- 新共通テストの内容には余り触れられていなかった (大学, どちらとも言えない)
- ポイントをしぼって説明してほしい (大学, どちらとも言えない)
- 新共通入試下の個別選抜の在り方について聞きたかった (大学, どちらとも言えない)
- 特任教授として継続的採用は入試に有効か? (大学, どちらとも言えない)
- 具体的な点を聞きたかった (大学, どちらとも言えない)
- 話が国立大学の立場からであること、難関大学であることから、今回の高大接続改革で共感できる部分がなかった (大学, どちらとも言えない)
- 個別入試改革の根幹に触れられていないような気がする (大学, 改善すべき)
- 入試の設計方針の詳細が解説され、大いに参考になった (大学, 改善すべき)
- 東北大の現行制度をこわすような改革をするな、というメッセージでしかなかった (大学, 改善すべき)
- ” 売っている本を読め!! ” が多すぎる→「書かせていただいた」…説明なし。

レジュメで出典を出しているという点は良い。その場できちんと説明すべき。
参加者軽視、安倍首相の最近の国会答弁「私の意見は読売新聞に書いてあるので読め！！」に似ている（大学、改善すべき）

- 東北大学のスタンスを知ることが出来た為（その他、よかった）
- 東北大学の入試設計の現状と改革を知ることができた。（その後のディスカッション話題となり、勉強となった）（その他、よかった）
- いつも勉強になります（その他、よかった）
- 東北大学の AOⅡ期、Ⅲ期の動きが少し知ることができ、希望者への対応の参考となった（その他、よかった）
- 新テストを含めて、今後の大学入試において評価選抜の”原則・原理”を提言して下さったと思います（その他、よかった）
- 倉元さんの東北大学の AO に対する考え方に対する話は大学の強い意志とその意志に沿った打ち手に大変納得でき、とても良かったです（その他、どちらも言えない）

4. 現状報告者の発表は如何でしたか.

- それぞれの立場で一番の苦勞をかい間見ることができた（高校、よかった）
- 現場の入試改革に対する様子がよくわかる内容で参考になった（高校、よかった）
- 広い視野を持った高校関係の方がよいかと思います（高校、よかった）
- 現場、センターの対応が難しいことがわかった（高校、よかった）
- 東北大の主張は理解できた（高校、よかった）
- 2.~4.の方 Good、1.の方は？（高校、よかった）
- 発表者によっては分かりづらい（高校、よかった）
- 阿部先生、清水先生の話聞いて勉強になった（高校、よかった）
- ①木南先生の話は資料も少なく、よく分からなかった。 ③清水先生の話は、まさにこちらの考えを代弁してもらった印象です（高校、よかった）
- 様々な立場からの話しが聞けてよかったから（高校、よかった）
- 私どもと同様に考え、対策しているのだとわかりました（高校、よかった）
- 前半、マイクの関係で京大の先生のお話がよく聞きとれず、理解が追いつかず（高校、よかった）
- 3. が具体的に分かり易かった（高校、よかった）
- 特に国語を中心として具体的な取組が聞けたのは良かった（高校、よかった）
- 全く同じ悩み、疑問をもつ者として、共感できた。（東北大個別の採点基準より良い解答例や小論文指導等）（高校、よかった）
- 現在の状況が良く分かった（高校、よかった）
- 清水先生が出色であった（高校、よかった）
- 大学入試センター山地先生、センターの取り組みと膠着している状況について非常にわかりやすくお話しいただきありがたかったです。福岡大大濠の清水先生のご講演、高校の現場における問題を臨場感をもって知ることができました。ありがとうございました（高校、よかった）
- 資料が少なく分かりにくい発表もありました（高校、よかった）
- 聴く側を意識したプレゼンを工夫してほしい（高校、よかった）

- 京大は何を伝えたかったのか、センターは現状分析としてはよかった（高校、よかった）
- 報告 1.の方の話が全く聞きとれない！他の 3 人は面白かった。（固定マイクの使い方、下手過ぎ。ハンドマイクも）（高校、よかった）
- 問題点がよく分かった（高校、よかった）
- 教育制度改革に関するとらえ方が報告者の立場によって差異があることが強調された点が特に印象的（高校、よかった）
- 新テストについて結局よく分からない（高校、よかった）
- 阿部淳先生、清水和弘先生の講演は、本校に持ち帰り、今後の方針立てに参考になった（高校、よかった）
- 現場の先生方の生の声がよい。改めて、大学、高校、センターそれぞれの立場の思いを確認できた（高校、よかった）
- 参考になるものとならないものがあつた（高校、よかった）
- 山地さんの話を興味深く聞きました。センター試験の中身は非常に良いものです。今後どうなるか、今以上良くなることを望みます（高校、よかった）
- 木南先生のが聞きとりにくかったです（高校、よかった）
- 主張がはっきりしない先生もいらっしゃったので（高校、よかった）
- 時間がなく、じっくり聴けなかった（高校、よかった）
- 1 人 1 人の時間が短いような気もしました（高校、よかった）
- 高校および入試センターの報告は興味深い内容だった（高校、よかった）
- 清水和弘氏の話しがよかった（高校、よかった）
- よかった：特に高校現場の思い、よくわかりました。 改善すべき：木南先生、マイクワークわるすぎてききとりにくかったです。ホールマイクの性能の問題のように思います（高校、よかった）
- それぞれの立場の中でみえる問題の本質をつかむことができたと思います（高校、よかった）
- 時間が短く各先生方の話をもっと聞きたかった（高校、よかった）
- よかった←・清水先生は十分な準備を背景に高校から大学に対する貴重な提言をなさっていた。・山地先生のお話は非常に有益だった。大変プラスになった。改善すべき←・木南先生は何のために東北大学に話しに来たのか不明だった。・阿部氏のお話は、不満と大学に対するうらみつらみばかりで建設的でなかった（高校、よかった）
- 京大院の教授は、大学入試を理解しているのか？ましてや英米法専門であるが…（高校、よかった）
- 阿部先生、清水先生とも、深い問題意識を表してくださっていた。勇気がもらえました（高校、よかった）
- 4 本のテーマにばらつきがあり（広がり）焦点がぼやけた（高校、どちらとも言えない）
- ・清水先生！私も国語科（国語という名の総合科目と雑学、一般常識担当ですが(笑)）のためとっても共感しました。 ・木南先生の音声マイクに乗りにくかった前半部がききとれなかった。マイクの使い方や修正アシストが必要かと。（ボリュームは調整されたけれども…。）マイク持って話していただきたかったです。（高校、どちらとも言えない）
- 未定の部分が多く議論が深まっていない（高校、どちらとも言えない）

- やはり発表に応じたレジメはほしい（高校，どちらとも言えない）
- ざっくばらんにはなされて良かった（高校，どちらとも言えない）
- 方向性がいろいろでまとまりが感じられない（高校，どちらとも言えない）
- 高校側は良かった。現状と今後のズレが心配（高校，どちらとも言えない）
- 違った立場、視点の分析があったので（高校，どちらとも言えない）
- いろいろな視点からの分析に興味をもてた（高校，どちらとも言えない）
- 高校の現状と新センター試験の現状（高校，どちらとも言えない）
- もう少し実際の状況がわかると思っていた（高校，どちらとも言えない）
- ズバリ、はっきりと現状や問題点を指摘されて、とてもよかった（高校，どちらとも言えない）
- 湯沢高校の報告では現場の先生方のご意見を聞くことができ、良かった（高校，どちらとも言えない）
- 京都大学の説明がよくわからない（高校，どちらとも言えない）
- 清水先生の高校現場の状況を的確に話していただいたので（高校，どちらとも言えない）
- 4者の統一テーマが何か不明（高校，どちらとも言えない）
- 大濠高、清水先生の提言には納得させられた。国語←小論文では当然ない。合教科が小論文ということに改めて同意します（高校，改善すべき）
- もとめていたものもちがった（高校，.）
- 清水先生の報告が、日頃から疑問に感じていたことを指摘してあり、ありがたかった。大学側はぜひ回答していただきたい（高校，.）
- 清水先生（大学，よかった）
- 問題についての要望、大学への要望の意見が強く感じた（大学，よかった）
- 抱えている問題がはっきりと伝わった（大学，よかった）
- どうしても未定なところが多い（大学，よかった）
- 小論のことは共感するところが多かった（大学，よかった）
- 現場の生々しい報告で、とてもエキサイティングでした（大学，よかった）
- 聞きたいことがきけなかったが、現状はよく分かった（大学，よかった）
- 趣旨のよくわからない発言があった（大学，よかった）
- 特に湯沢高の先生の話は、高校の立場がよく理解できました（大学，よかった）
- 各学校での取り組み、不安を再確認できた（大学，よかった）
- 教育現場の課題をどう入試改革に反映させていくのか、従来の高大接続の観点をふまえ、さらなる対話が必要だと思いました（大学，よかった）
- 山地先生の講演（大学，よかった）
- お1人お1人の取組、仕事に対する情熱を感じました。その一方、それぞれの立場からの域を超えずに、大学や教審への要望が中心で、もう少し高く、広い視点での意見も聞きたかった（大学，よかった）
- テーマがぶれた発表が多かったのではないかと（大学，よかった）
- 小論文の議論（大学，よかった）
- 高校の先生方と山地氏の報告（大学，よかった）
- 小論指導、センター試験作題法（大学，よかった）

- 現状の不透明さがよくわかった（大学，よかった）
- 報告が4つもなくて良い。特に何を伝えたいのか。わざわざ報告しなくても良いと思えるものもあった（大学，よかった）
- よかった：山地先生（大学，よかった）
- 2に同じ(個々の発表時間を増やしてほしい)（大学，よかった）
- 高校・入試センターとそれぞれの立場で本音の意見が聞くことができたから（大学，よかった）
- 特に高校側の素直な提起（大学，よかった）
- 高校現場からの意見（採点基準の開示など）に強く共感します。（政治にふり回される入試センターにも同情します…）（大学，よかった）
- 具体的内容に踏み込んだ話は大変参考になった（大学，どちらとも言えない）
- 京大の話は意図不明、その他はわかりやすく具体的（大学，どちらとも言えない）
- 高校側の話はよかった（大学，どちらとも言えない）
- 高校の現場の受験指導の苦労や入試制度、試験科目などの問題について知ることができた（大学，どちらとも言えない）
- ききとりにくかった（大学，どちらとも言えない）
- 新たな選別のやり方についての分析がおもしろかった。大学入試センターの現在の内実を知り得た（大学，どちらとも言えない）
- それぞれの立場からの意見が聞けたことが、一番のポイントだと思う（大学，どちらとも言えない）
- 阿部先生、清水先生の率直な意見が聞けた（大学，改善すべき）
- 2. 3. 4に参考になる内容が多かった（大学，改善すべき）
- 現場でのとらえ方がよくわかった。地域が違えど事情は同じようなものであった（大学，改善すべき）
- よかった：阿部氏報告、清水氏報告、山地氏報告 改善すべき：木南氏報告（大学，.）
- 他県、他校の活動を知ることができたから（大学，.）
- 新テストが現状であまり議論が進んでいない状況がわかった（その他，よかった）
- まとまりのあるスライドや+ハンドアウトは全演者に必要としてほしい（その他，よかった）
- 論点をしぼるべきでは？（その他，よかった）
- 現状の取組については、よく理解できた。京大の報告がよくわからなかった。もう一度聞きたい（その他，よかった）
- 良い報告もあれば、もの足りない報告も（その他，よかった）
- 忌憚のない各立場のご意見が聞けた（その他，よかった）
- 山地先生の報告により現状がわかった。高校の進路指導、教科指導の現状、実態がわかった（その他，よかった）
- 京大の先生がよく分からなかった（その他，どちらとも言えない）
- 私立大学の報告が必要（その他，どちらとも言えない）

5. ディスカッションは如何でしたか。

- 例年以上に進行の工夫が感じられました（高校，よかった）

- 高校と大学の認識のずれが改めて分かった（高校，よかった）
- 入試改革の課題が焦点化され、それぞれの立場から解決に向けた意見を聞くことができた（高校，よかった）
- 率直な意見を拝聴できたため（高校，よかった）
- 討議の進め方が特に Good！！（高校，よかった）
- 本音が出ていた（高校，よかった）
- ？な前提での話は深まらない（高校，よかった）
- それぞれの立場での本音が聞けて良かった（高校，よかった）
- 大学と高校の立場で意見が戦わされていて、どちらにも一理あり面白かった（高校，よかった）
- もっと聞きたいくらいです（高校，よかった）
- 方針がでる前の状況ではあるが、識者の率直な話しがきけてよかったから（高校，よかった）
- それぞれの本音が出ていてよかったと思う（高校，よかった）
- 3.基調講演、4.現状報告でよくわからなかったことがわかりました（高校，よかった）
- 清水先生の話が分かりやすい。大学やセンター側と高校側の意識のズレが明らかになった（高校，よかった）
- 漠然とした内容の気がする（高校，よかった）
- 2.の(2)に同じ（高校，よかった）
- 新テストの具体がない中でのディスカッションは実がない気がします（高校，よかった）
- 進行がよくない（今回のテーマは「個別大学の入試改革」であり、主たるテーマからずれる議論が散見されたため）（高校，よかった）
- 小論文に関する議論（難関大の記述問題、標準的学力の学生の力を評価する記述問題、両者の話にズレがある）（高校，よかった）
- 昨年同様、国へのうらみ節だけだった（高校，よかった）
- ・質問、解答者が片寄り過ぎ…司会者の問題です。 ・登壇者それぞれの立場がありますが、指示待ちが多くスッキリしなかった。→「上位機関で決めている。公表していないので、分からない。（指示待ちの姿勢）」が多い（高校，よかった）
- 問題の難しさがよく分かった（高校，よかった）
- 不明なことが多いままでの議論である（高校，よかった）
- 未定のことについてで、つっこんだ話をしにくかったと思われる（高校，よかった）
- 立場の違う方々のお考えが聞けてよかった（高校，よかった）
- 結局のところ、不透明さは変わらない＝あまり変化なしと少し確認できたから（高校，よかった）
- 各先生方の率直な考えが聞けた（高校，よかった）
- 実施案がないなかではあったが、深まりがあった（高校，よかった）
- 記述式については、再度考えさせられました（高校，よかった）
- 議論を深めることができた（高校，よかった）
- 本音が見えるが、議論がかみ合わない場面も（高校，よかった）

- よかった：論点が明確になった。 改善すべき：センター側の説明は如何なものか（高校，よかった）
- 話題を焦点化して角度をかえて深堀していただけたので（高校，よかった）
- 小論文についての討論は良かった（高校，よかった）
- 新テストに関して、あまりわからなかった（高校，よかった）
- 記述式、小論文等の指導、小論文の意義、入試の意図が明確になり、参考になった。記述式（新テスト）が理想から、現在離れつつあるのは残念である。もっとも、数十字で記述しただけで果たして論述の力が測れるのか？（暗記した定形文のテーマ（単語）を変えるだけで解答できてしまうと思いますが）（高校，よかった）
- 三者それぞれの立場からの主張が分かりやすい（高校，どちらとも言えない）
- もっとききたかったくらいです（高校，どちらとも言えない）
- より具体的、活発で良かった（高校，どちらとも言えない）
- 前進したかどうかつかめなかった（学校に取材）（高校，どちらとも言えない）
- 大変良かった。率直で本音の議論であったと思う（高校，どちらとも言えない）
- AO とはそもそも何か理解しているのか？一般も AO も同じなら分ける必要がないと思われる（高校，どちらとも言えない）
- 問題点が明確化されたと思う（高校，どちらとも言えない）
- 高校と大学の立場の違いが顕わになった（高校，.）
- 熱い議論でした。満足です（高校，.）
- 活発で良かった（高校，.）
- 討論の論点が絞られた（高校，.）
- 小論で求められている学力についての議論をもっと聞きたかった（高校，.）
- ” わからない ” ” 決まっていない ” という中での議論であった。課題点等を互いに投げあっているだけのように感じた（大学，よかった）
- それぞれの先生のご意見（大学，よかった）
- 大学の改善の取組の基本的な考え方に触れた（大学，よかった）
- それぞれの立場での言い分がよくわかりました（大学，よかった）
- 大学、高校のそれぞれの立場から意見が交換できて有意義である（大学，よかった）
- 公平性、接続可能性の面において大学入試センター試験が良質、妥当な学力評価方法であることをあらためて認識しました（大学，よかった）
- 最後にパネラーのお1人お1人の率直なお話をチェックアウトとして聞きたかったです。最後の質問(日程の質問)は必要だったでしょうか？（大学，よかった）
- 知りたいことは何も知ることはできなかった（大学，よかった）
- 明確な答えがわからなかった（大学，よかった）
- 小論文指導のあり方（大学，よかった）
- 最後の方には、個々の考えが示されたが、未確定な部分が多く、抽象論にとどまり、深い議論になりにくいと感じた（大学，よかった）
- センターの変化、分からない部分で議論する限界がある。小論文も直接担当していた人が話してもどうだろうか？（大学，よかった）

- 超難関大学の小論文の入試設計を知ることができた（大学，よかった）
- 大学が求めていることと高校側とのギャップがよくわかった（大学，よかった）
- 教育の話になって良かったです（大学，よかった）
- 現状がわかったし、本音が聞け、共感できたから（大学，よかった）
- 改革の問題点はよくわかったが、実際にどう変わるのかは不透明なままだった（大学，どちらとも言えない）
- 各先生方のお話、考えが聞けて大変良かった（大学，どちらとも言えない）
- 終盤の「記述式」へのギモンがよかった（大学，どちらとも言えない）
- 新テストの問題はますます深刻だ（大学，どちらとも言えない）
- 議論や問題点が深まった（大学，どちらとも言えない）
- 小論文のあり方について（ゆとりのある子が受けるということは、高校にとっては指導が難しいと強く感じた。受験生が一番大変であると思う。）（大学，改善すべき）
- 噛み合わないところが…（大学，.）
- いろいろな意見が聞けた（大学，.）
- 新テスト決定者の文科省の方にも来てもらいたかった（大学，.）
- メンバーの選定が特に良い（大学，.）
- 本音でのやりとりがとても勉強になる考えさせられることばかりでよかった（大学，.）
- 質問の答えになっていないというのもあった（小論文で高校生のどんな力を計りたいのか…など）（その他，よかった）
- 各立場の意見の違いが明確であった。その違いはここ数年、全く変化がないことに驚いた（その他，よかった）
- ディスカッションがよかった（その他，よかった）
- 報告の中の質問が反映されていてよかった（その他，よかった）
- 立場の違いで議論がかみあわないこともあったが、皆様の本音が聞けて理解できた（その他，.）
- 高校の現状と大学の考えとの違いが際立ち、今後の課題が見えてきた（その他，.）

6. 時間は如何でしたか.

- 長いですが、内容的には必要と思います。遠方から日帰りの方は 16:00 おわりくらいがよいのだろうと思います（高校，ちょうど良い）
- 現状報告→ちょうど良い ディスカッション→長すぎた（高校，ちょうど良い）
- 盛り沢山でどれも駆け足だった（高校，ちょうど良い）
- 討議にもうちょっと時間を（高校，ちょうど良い）
- ディスカッションにもう少し時間が欲しい（高校，ちょうど良い）

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式，テーマを望まれますか.

- 記述問題について（高校）
- 「新テスト」と個別大学の入試改革（高校）

- いよいよ 2 年前ルール的年なので継続で (高校)
- 選抜試験以外の高大接続 (資質、能力の継続的な伸長のための大学の取り組み、高大の連携の方針、方策など) (高校)
- 専門家(大学の先生) が新しい入試設計をどうみるかを継続しておききたいです (高校)
- 新課程に対する展望 (高校)
- 作題についてお聞きしたいです (高校)
- 文科省の方針が出たあとのフォーラム (高校)
- 中教審や高大接続委員のメンバーもよんでいただきたいです (高校)
- 東北大の AO 入試分析→具体的に採点基準などを知りたい (高校)
- 東北大学の入試の方向は聞けて良かったが、学校 (代表校) の具体的な取り組みがもう少しあるといいですね (高校)
- 新テストの形が確定後に同テーマ、形式で行ってほしい。それとも説明会の方においてか? (高校)
- 東北大学から高校に対して具体的にどのようなメッセージを出しているのか聴けるようなテーマ (高校)
- ・広く高校の現場でかかえている入試にかかわる困難や対応などについて。 ・大学入試センターと個別大学との連携についてなど (高校)
- 入試改革(新テスト、多面的テスト) 関係 (高校)
- 国立大学の立場からだけの視点にとどまらず、国公立共通の視点からのテーマ設定を希望します (高校)
- 高大接続を建設的なテーマで (高校)
- 英語四技能評価や英語教育にかかわるテーマ (高校)
- 今回の入試改革の話は、今後も第 2, 3 弾と続けていって欲しい (高校)
- 形式はよいと思います (高校)
- 高大改革は高校の改革を含みます。授業やカリキュラムの新しい方向性がみえるといいです。大学入試のみならず学習指導要領の理解を深めたいと思っています (高校)
- 記述における高大接続を日程、自己採点、テクニカルの面に特化して議論を (高校)
- 新入試に向けての新たな部分について (高校)
- 新テストの実施方針が定まって、2 次試験はどうなるのか? (高校)
- 来年こそ新テストがはっきりわかった上での開催を望む (高校)
- 大学教育改革、入学者選抜改革について (高校)
- 志望理由書 (小論文) に求めるもの (高校)
- 現状報告の人数を減らしてディスカッションがもう少し長ければ…と思いました (高校)
- 今回のものを深化したもの (高校)
- 大学が求める具体的な学力アップ (高校)
- 職業と教育 (高校)
- AO の方向性 (さらに多くの大学を含めて) (高校)
- 記述(小論)、面接、客観的に→何を測れるのか (高校)

- ぜひこのテーマを継続させて欲しい。〔記述式問題・小論文試験〕（高校）
- 文科省の方のお話を伺いたかったです（高校）
- 新テストねたは、続けて下さい（高校）
- G 型、L 型と大学を区別したとき、両者の選抜の方向性には違いが出てくると考える。L 型大学が地域に貢献する人材を育成する大学としてどんな選抜を工夫しているのか知りたいです（高校）
- テーマによっては、フロアでグループワークしてもよいと思います（高校）
- 案内を出す時点で、何を伝える場か、参加すればどんな情報をえられるかを、もっとわかるようにしてほしい（高校）
- アドミッション・オフィスの役割と現状（高校）
- 高大連携で伸ばすべき学力とは何か（高校）
- 東北大に関すること、入ってほしい生徒などは必ず 1 時間程度は話してほしい（大学）
- 今回のような形式でよいと思う。テーマはトピックをとらえてもらいたい（大学）
- 英語の 4 技能についての外部試験利用について（大学）
- 次回、AO 入試に学力テスト導入が義務化された場合、AO そのものの入試制度の必要性和高校現場での指導方法の課題と方針、取り組み実例をテーマとして伺いたい。また、やはり記述式の扱いと学校現場への影響をまだまだ伺いたいと考える（大学）
- 「なぜ入試で主体性は計れないのか（計らないのか）」～態度は入試の要件か～（大学）
- 評価に関すること（高校における視点別評価やパフォーマンス評価などのあり方）（大学）
- 今後を生きる子ども達にとって、どのような入試や大学、高校教育が行われるべきか（大学）
- 今回のように高校からの発表、提言の場があるといい（大学）
- 国公立の貴学以外の地方大学の現状課題にも目を向けていただけると良いかと思ひます（大学）
- 引き続き入試改革（大学）
- 大学入試のあり方全体を論議してもいいのでは（大学）
- 子ども目線で、これからの日本の教育を文科省、有識者、現場交えて、意味のある議論を期待します（大学）
- 4 技能や IB 入試のように通常の高校教育に余計なコストをかけると有利になるような入試の是非（大学）
- 小論文を用いた入試について（大学）
- 大学入試改革は継続中なので、次回も同じテーマを扱ってほしい（大学）
- 個別大学の入試改革もではあるが、全国的な動向についても踏み込んだ話しを、内容をお願いしたい（大学）
- 高校のカリキュラム改編に伴い、大学が求める高校生の力とは何か具体的に教えていただきたい（その他）
- このような形式でいいと思います（その他）
- 旧帝大的エリート教育について（その他）
- 学生が育つ条件と大学入学までの教育（その他）

- 文科省の新テストに関する説明を聞きたいです（その他）
8. その他，全般的な御意見，御感想をお寄せください。
- 入試改革に関する東北大学のリーダーシップに期待しています（高校）
 - 残念ながら質問の内容を改善すべきだと思います（高校）
 - 内容を聞くほどに、あと数年で新しい制度の入試が実施できるかどうか疑問になってきた（高校）
 - とても勉強になりました。盛りだくさんで、スピードについていけない部分があったので、もう少し時間があれば良かったです（高校）
 - 初めて参加しましたが、歯に衣着せぬ議論が展開されていて、エキサイティングでした。ありがとうございました（高校）
 - ありがとうございました（高校）
 - とても有意義でした。ありがとうございました（高校）
 - 清水先生の「読解力について」の主張に共感しました。山地先生のお話も大変参考になりました（高校）
 - 午後だけではもったいない。学生を使ったキャンパスツアーを午前にやってほしい（高校）
 - 安西先生や文科省も居合わせたパネルディスカッションが見たい（高校）
 - 司会の声がよかった（高校）
 - 駐車場は 12 : 00 くらいから開けてほしい。かなり混乱していた（高校）
 - 各大学 3 ポリシーを明確化させて、東大を頂点とする偏差値輪切りからの脱却を目指していたはずですが、新テスト「自己採点」をして「進路指導」というのも奇異に感じました（高校）
 - 今後も様々な形で情報発信をお願いします。全体としては大変勉強になりました。ありがとうございました（高校）
 - 今後、中高一貫校における取り組みの方針なども知りたいと思います。特に中学生からどのように力をつけさせるかに関心があります。本日はありがとうございました（高校）
 - センターについてもう少し知りたくて来たのですが、やっぱりな結果でした（高校）
 - ありがとうございました（高校）
 - 個別のコメント、お話、講演はそれぞれ大変参考になりましたが、全体として新テスト etc に対する批判的スタンスが強く出ていました。入試論にのみ特化しており、「高大接続」で大学入学後の学びにつながる入試についての議論を期待していたので、その点は少し残念でした。しかしながら内容的には大変考えさせられるものでした。ありがとうございました（高校）
 - インターハイ地区大会の時期で、参加希望しながら、あきらめた教員あり（高校）
 - このアンケートはいかがなものか？このアンケートを改善に生かそうという気がないのであればいいのですが（高校）
 - またよろしくお願いします（高校）
 - AL を中心とした新学習指導要領の学びと大学入試（高校）
 - 会場からの挙手、質問で名乗りを上げる人は少ない。質問用紙からの抽出に焦点をしばって良いと思う（高校）
 - 新カリ（高校）も公示されるのでぜひいいものにしてください（高校）

- 肝心の大学入試改革の具体的な方針が示されない中での議論となり、少しもの足りなく感じた（高校）
- 新テストの形が見えない中では、仕方のないことだと思います。木南先生、阿部先生、清水先生のお話は楽しく拝聴させていただきました。ありがとうございました（高校）
- AO パンフレット、入試のコンセプトがよくわかります。「5 つの特徴」がいいです。山地先生ありがとうございました（高校）
- 大変有意義でした。ありがとうございます。入試において「コンピテンシーの評価」をどのように取り込むかという説明は大学としてできるようにしておいた方がよいと思います（高校）
- 自分はセンター試験はそのままあるべきと考えています。その上で東北大学さんのさらに AO(学力重視) を実施したら良いと思います。改革をするなら、是非、本日のことも含め声を大にして、大学主導でやってほしいと願います（高校）
- 勉強になりました。ありがとうございます（高校）
- この場で語られたような意見交換が文科省の担当者との間で行われなければいけないと心から思いました（高校）
- 時期的にどうしても新テストについて知りたいと思ってしまうので、軸足の置き方が難しかったかな、と思います（高校）
- 様々な議論をふまえて新テストはクリアきじゅんしてあつかいと大学の個別テストでとりたい生徒をえらぶのがだとうだと感じました。例えば、現行のセンターであれば国 140 英 160 数 140 をクリアすればあとは個別しかみないという方法で十分では（高校）
- 文科省の方向性が遅れていることが問題ですネ。大変お世話になりありがとうございました（高校）
- テーマはしばらくっていて良かったと思うが、結局新テストに関する話題になることが多く、結論の出ない（現段階ではわからない）場面があったのは少々残念でした（高校）
- いろいろなことが不透明な中で、様々な切り口の話がきけて良かったです。ありがとうございました（高校）
- 大学がどのような考えを持っているのかについて聞いたのは収穫だった（高校）
- 高大連携が生徒、学生にとってプラスになるような話し合いの場が、さらに増えていくことを祈ります。ありがとうございました（高校）
- 大学改革の中で様々な努力がなされ、苦勞されているのがよくわかりました。ありがとうございました（高校）
- 前半のそれぞれのお話が、最後のディスカッションを通してさらに深まりました。様々な立場から様々な意見が飛び交い、激しいものでしたが、これくらいでないとやる意味がありません。人選が成功していると思いました（高校）
- どなたも「はっきりと判らない」「未定」「答える立場にない」としかお答え頂けない状況だということ判りました（高校）
- それぞれの立場上難しいと思うが、そもそもこの改革は正しい方向なのか。意見をききたいところでした（大学）
- 報告者からは課題、問題点が発生している現状で” ルールを変えて欲しい” という訴えを強く感じた。” ルールに合わせた対策” が必要と思われる。大学が実施している背景、目的について伝わっていないのではないのか。なぜ AO 入試についての内容で実施しているのか。大学側からのメッセージが必要と思われる（大学）

- マイクききづらい (大学)
- 文科省が新テストをどうしたいのかが現時点でも未定であるといことに驚きと怒りを感じた (大学)
- 白熱したディスカッションが有意義でした (大学)
- eduroam の無線 LAN が飛んでいると有難いです (大学)
- 印象として大学側は京大・東大のような大学を受ける生徒の話、高校側の話はあらゆる大学を受験する、また受験する生徒を対象とした課題であり、少しそれぞれのもっている課題が違うのではないかと感じた (大学)
- 基調講演、現状報告は現場で話題となることが聞くことができ大変有意義でした。また今後の新テストについての捉え方等、本音がディスカッションで伺えて勉強となりました。ありがとうございました (大学)
- 新テストについて。あまりにもあいまいでせっかく聞きに来たのに「よくわからない」ということで残念だった (大学)
- 議論が届く、文科省の方にも来てもらいたい (大学)
- 日程が丁度良い。入研教の前というのも… (大学)
- 初めて参加させて頂きましたが、有意義でした (大学)
- 論がかみあわない点もあったが、それぞれの立場での考えを示す機会として有意義であったと思います (大学)
- 今回、初めて参加させていただきましたが、全国から多くの先生方が参加していることに驚きました。時宜を得たテーマであり、とても勉強になりました (大学)
- やはり新テスト関係は喫緊のこととして着目しています。今後とも、是非、具体性、深化した報告に期待します (大学)
- 今の現状がとてもよくわかりました。ありがとうございました (その他)

参加者統計

1. 参加者総数: 427 名

(講演者・招待参加者: 14 名, 大学: 125 名, 高校: 214 名, スタッフ等: 18 名, その他: 56 名)

2. 参加者地域別

宮城県内: 146 名

宮城県以外の東北地方: 136 名

(青森県: 19 名, 岩手県: 21 名, 秋田県: 15 名, 山形県: 32 名, 福島県: 34 名)

東北地方以外: 145 名

(北海道: 15 名, 茨城県: 10 名, 栃木県: 8 名, 群馬県: 6 名, 埼玉県: 4 名, 千葉県: 3 名, 東京都: 36 名, 神奈川県: 4 名, 新潟県: 7 名, 富山県: 1 名, 石川県: 2 名, 福井県: 2 名, 山梨県: 3 名, 長野県: 4 名, 岐阜県: 2 名, 静岡県: 6 名, 愛知県: 7 名, 三重県: 1 名, 滋賀県: 1 名,

京都府: 2 名, 大阪府: 5 名, 兵庫県: 3 名, 奈良県: 1 名, 和歌山県: 2 名, 島根県: 3 名, 岡山県: 6 名, 広島県: 1 名, 山口県: 1 名, 香川県: 2 名, 愛媛県: 1 名, 高知県: 1 名, 福岡県: 4 名, 熊本県: 1 名, 宮崎県: 1 名, 鹿児島県: 1 名, 沖縄県: 2 名, 不明: 2 名)

多くの方々に御参加いただき、ありがとうございました。

第 26 回東北大学高等教育フォーラム運営スタッフ

統括責任者	石井光夫	
企画責任者	倉元直樹	
事務局	宮本友弘	田中光晴

当日スタッフ

石上正敏	檜田豪利	鎌田裕子
鎌田佳子	熊井弘子	庄司強
庄司弥生	朱嘉琪	鈴木かおる
田中秀樹	秦野進一	山本莉穂

IEHE TOHOKU Report 73

第 26 回東北大学高等教育フォーラム報告書

新時代の大学教育を考える [14]

個別大学の入試改革

— 東北大学の入試設計を事例として —

発行：2017 年 9 月

編集：石井 光夫，倉元 直樹，宮本 友弘，田中 光晴

発行者：東北大学高度教養教育・学生支援機構

Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

Tel: 022-795-7551

Email: ieheoffice@ihe.tohoku.ac.jp

印刷所：株式会社 ホクトコーポレーション